379
12

자4ㅎ4ㅎ
379-12

國譯禪宗叢書

第拾貳卷

正
10. 4. 30
內交

國譯禪宗叢書第十二卷凡例

一、本叢書第十二卷に收載する所の書は、圓通大應國師語錄(二卷)、大燈國師語錄(二卷)、大覺禪師坐禪論(一卷)の三部五卷なり。由來、大應、大燈二祖の語錄は、我が臨濟門下の眼睛にして、禪宗の語錄中、宗旨を明むるに於て、最も緊要なるものなり。現今我國の臨濟宗は、大應、大燈二祖の末流にして、無相大師乃至白隱禪師の如きも、皆其の末流を汲みたるものなり。大覺禪師坐禪論は、我が國禪法流傳の最初に於て、撰述せられたるものなれば、道元禪師の坐禪儀と對照して、之を究明せば、參禪者に於て好箇の南針たるべし。

一、大應國師語錄は、應安五年、國師の法孫宗興、初めて之を開版せしが、今や流傳極めて尠く、大燈國師語錄は、是れ亦舊版、應仁の

兵火に失せて、現今殆ど世に傳はらず。此の二書、今次國譯に際して、大應錄は寛永十八年江月宗玩和尚の開版本に據り、大燈錄は元和七年同じく江月和尚の再刊本に據りたり。江月再刊の大燈錄は、一帙三卷にして、其の中の一卷は參詳語要なり、今次の國譯には之を除きたり。大覺禪師坐禪論は、舊版の存するものなく、漸く德川時代に入りて初めて印行せられしが、而も其の書すら坊間に傳ふるもの極めて尠く、又古鈔本の之と對照すべきものを見ず、たゞ一種の版本に依據せり。

一、本叢書は、大正八年七月第一卷を出してより、今玆に其の十二卷を印行し終ることを得たり。回顧すれば、最初よりこの國譯の業に從事せられたる釋宗演、蘆津實全の二禪師と兼子碩應師とは既に遷化せられ、又予が助手として本書の校正、其の他に從事したる醍醐惠端君は昨年一月逝けり、三師一君は、實に本叢書の出版に就きて、陰に陽に多大の貢獻ありしが、今や幽明境を異にす、此に特に其の芳名を錄して永く不忘の意を表す。

大正十年四月

編者上村觀光誌す

國譯禪宗叢書　第拾貳卷

目次

國譯圓通大應國師語錄解題……一——二
國譯圓通大應國師語錄……一——一八八
圓通大應國師語錄原文……一——一〇二
國譯大燈國師語錄解題……一——四
國譯大燈國師語錄……一——一八六
大燈國師語錄原文……一——九〇

目次

國譯大覺禪師坐禪論解題……一――三
國譯大覺禪師坐禪論……一――二四
大覺禪師坐禪論原文……一――一二

國譯圓通大應國師語錄

解題

大應國師語錄二卷は、鎌倉建長寺十三世勅賜圓通大應國師一代の法語を蒐載せしものにして、侍者祖璞、慈禪、宗心、克眼等の編する所なり。其の收むる所は文永七年十月筑前國興德寺、文永九年十二月同國太宰府崇福寺、嘉元三年七月京都萬壽寺、德治二年十二月鎌倉建長寺等に歷住中の法語にして、此の外に示衆、佛祖贊、小佛事、偈頌、塔銘等を錄せり。

大應國師は、實に師と同郡の出なり。幼にして當國淨辯法師の門に入りて髮を剃る。圓爾が寺の聖一國師圓爾は、紹明、諱は南浦、四條天皇の嘉禎元年駿河國安倍郡に生る。此の年、入宋せる東福傳を傳ずるに、

就いて敎を受けし堯辯は久能山の僧なりしを見ば、淨辯も恐らくは堯辯の徒にして、久能山の僧に非ざるなきか。建長元年十五歲、去つて鎌倉に赴く。時に常樂寺に於て禪風を擧揚せる道隆の許に就いて參ず。後、道隆の建長に入るや、隨つて至り、參學倦むことなし。正元元年、年二十五歲、辭して宋に渡り、偏く諸宿に參じ、後、虛堂智愚を淨慈寺に謁す。虛堂乃ち命じて賓客を典らしめ、送迎の外、參叩弛まず。咸淳元年の秋、虛堂徑山に遷り、紹明も亦俱に從ふ。一夜定より起つて、豁

然大悟す。偈を作つて曰く、「忽然として心境共に亡する時、大地山河透脫の機、法王の法身全體現ず、時人相對して相知らず」と。虛堂之を見て、大いに悅びて衆に報じて曰く、「明知客、參禪大徹し了れり」と。咸淳三年卽ち我が文永四年秋、拜辭して歸朝す、其の去るに臨み、虛堂偈を贈つて曰く、「門庭を敲磕して細かに揣摩す、路頭通ずる處再び經過す、明々に說與す虛堂叟、東海の兒孫日に轉た多し」と。當時一山の大衆、別を惜み、詩を賦して餞する者四十三、以て師の衆中に推重せられしを知るに足る。歸朝するや、再び道隆の席下に入り、知藏となる。文永七年冬、三十六歲、筑前の興德寺に出世し、更に太宰府の崇福寺に遷る。九州に在ること三十六年、爲に西海の禪風大いに興れり。後、嘉元三年秋、太上皇、遙に紹明の德風を欽じ給ひ、召して宮掖に對す、奏答旨に稱ふ、勅して萬壽寺を主らしむ。又東山の故址を革めて嘉元寺を起し、師に詔して第一祖となす。德治二年、平貞時の請により、東下して正觀寺に入り、同年無隱圓範の後を嗣いで、建長寺の席を董す。入寺の夕小參に曰へることあり、「今年臘月二十九日、來るに所來無く、明年臘月二十九日、去るに所去無し」と。大衆驚訝して其の意を諭る者なし。翌延慶元年臘月二十九日、俄に微疾を示す、二更に至つて偈を書して曰く、「風を訶し雨を罵る、佛祖も知らず、一機警轉す、閃電も猶ほ遲し」と。筆を收めて跏趺して入滅す、閱齡七十四、坐夏六十、火化して舍利を獲。勅して京都に龍翔寺を建て、塔を普光と云ふ。又門人分つて塔を建長寺に立てゝ天源庵と云ひ、崇福寺には瑞雲庵を立つ。勅して圓通大應國師と謚す。

國譯日本國 ㋑建長寺明禪師語錄敍

吾が佛㋺敎外別傳の旨を以て大迦葉に付し、二十八傳して菩提達磨に至る。梁の武帝の時に當つて中國に徠り、㋩無上心印を以て可大師に授け、而して中國始めて禪宗あり。自後㋥派別支分して華夏に彌布す。唐宋の間、號して極盛となす。日本國は遠く大海の東にあり、唐より以徠、㋭空海㋬最澄㋮斎然㋯寂照の流の若きと雖も、但だ中國に徠つて敎乘を傳ふるのみ。宋の南度に至つて、㋰千光禪師榮西なるもの、徠つて天童の㋱虛庵敞公に參じ、禪學を得て以て歸る。日本の禪宗あるは則ち西公より始まる。而して㋲覺阿は徠つて、靈隱の㋳瞎堂遠公に參じ、妙に心要を悟る。亦言ふ、彼國未だ禪學あらずと。是れによつて言へば、則ち西と阿と㋴蓋し同時ならんと云ふ。厥の後、禪を學んで中國よりして歸るもの、勝げて計ふべからず。今に至るまで彼の國禪宗大い

㋑建長寺。師、建長に住すること滿一年。
㋺敎外別傳。五千四十八卷にも說かれぬ、父子不傳の妙なり。
㋩無上心印。釋迦彌勒、觀音勢至の額に打ち込む燒印。
㋥派別支分。五家七宗、楊岐、黃龍、臨安、大惠、密庵、破庵と支分す。
㋭空海。延曆三十三年入唐す。
㋬最澄。延曆十三年入唐す。
㋮斎然。永觀元年入宋す。
㋯寂照。長保四年入宋し、彼の地に沒す。
㋰千光禪師榮西。仁安文治の兩度入宋す。
㋱虛庵敞。黃龍下の僧寮なり。
㋲覺阿。承安元年入宋す。
㋳瞎堂遠。圓悟の法嗣、楊岐下の尊宿。
㋴蓋し同時。此の評あたれり、仁安三年と承安元年とは、中

國譯圓通大應國師語錄

初住筑州早良縣興德禪寺語錄

侍者祖照等編

師、㋑文永七年十月二十八日に於て入寺。

山門、「無門の門、丁に㋺遮護なし。若し是れ眞正の道流ならば、㋩這裏便ち一歩を進めん。」彈指一下。

佛殿、「㋥德嶠・韶陽、只だ㋭錐頭の利を見て鑿頭の方を知らず、新興德は別に㋬條章あり。山門頭に合掌し、佛殿裡に燒香す。」

據室、「百千の諸佛、這裡を出でず。且く道へ、這裡是れ什麼の所在ぞ。」拄杖を卓すること一下。

拈衣、「佛々授手、祖々相傳、畢竟傳ふる底は是れ什麼ぞ。」衣を擧して云く、「看よ看よ、歡喜して之を受け、頂戴して之を披す。」

㋑文永七年。國師三十五歳なり、是より先、文永四年、宋より歸朝し、關東に在ること三年、鼓の年興德に住持す、以下載する處の入寺の語、并に嗣法の書を廬堂に呈す、廬堂喜んで曰く、「吾が道東せり矣」と。

㋺遮護。遮はさへぎり止むるなり、護は守護なり、上霄漢に通り、下黃泉に徹し、さへぎり隔てなしと。

㋩這裏便ち一歩を進めん。普通一枚悟りの漢は、此處に徘徊

に盛なり、凡そ叢林の典禮、一に中國の制に放ふ。茲に建長寺圓通大應國師明公の語錄を讀むに、㋐信に然り、公は徑山虛堂愚公の道を得、歸つて其の國を化し、㋒四たび名刹に遷り大いに玄旨を敷き、㋓學徒駢集す。而して王公貴人入室問道のもの甚だ衆し。㋔蓋し其の履踐眞實にして、學者を開示するの語、簡古嚴整にして毫髮の虛僞なし、眞に一代の宗師なり。嗟乎中國の日本に於ける、同じく閻浮提の內にあり、同一天地、同一日月、山海の限りありと雖も、而も人物の性情と夫の得るところの道德の懿とは、其れ同じからざる者あらんや。公の言行を觀るに、卓異なることかくの如し、古人の所謂何れの地にか才良なからん。徵あるかな。㋕三復感歎して、乃ち其の錄の首に叙す。洪武八年㋖倉龍乙卯五月十有九日戊寅、天界善世禪寺住持天台釋㋗宗泐叙す。

問二年を隔つるのみ。

㋐信に然り。禪宗の盛と、規矩の彼れに則るを見る。

㋒四たび名刹に遷る。興德、崇福、萬壽、建長なり。

㋓學徒云々。師崇福にあること三十三年、參學のもの、常に八十餘員を下らず、事、本錄處々に出づ。

㋔蓋し其の履踐眞實云々。評判甚だ曾弱たり、全室は國師を洞見し得ざりしならん、人物を眞實と云ひ、文章を尙古嚴整と云ひ、宗旨に虛僞なしと云ふ、食ひ足らぬでは無いか。

㋕徵。明なり、驗なり。

㋖倉龍。大歲なり。

㋗宗泐。全室と錄す、笑隱訢の法嗣なり。按ずるに、此の叙は滅宗和尙の此の錄を刊せしとき叙を乞ひしものならん、當時は支那崇拜の熱、盛にして、彼土大家の叙を用ふるを誇りとせしなり。

法座、「八面四方、通霄の活路、行かんと要すれば便ち行き、坐せんと要すれば便ち坐す。㊀須彌燈王も也た須らく退墮すべし。」

師、陞座、香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して、恭しく爲に、

㊁今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬歲萬々歲を祝延したてまつる。陛下、恭しく願はくは、㊂堯天等しく覆ひ、舜日普く臨み、四海仁に歸し、萬邦拜手せんことを。

此の香曾て㊃凌霄峰頂にあつて、無心の中に忽然として拾ひ得たり、今日人天普く會す、敢て囊藏せず。爐中に爇向して、前住大宋徑山興聖萬壽禪寺虛堂和尙大禪師に供養し、用つて法乳に酬ゆ。」

師、衣を斂めて座に就いて乃ち云く、「㊄刹竿を望んで便ち回るも、正に半途にあり、㊅招手を見て橫に趨るも、猶ほ江を隔つるとあり。何に況んや㊆棒頭に旨を領じ、喝下に承當する。萬里の崖州未だ遠しとせざるとあり。所以に道ふ、向上の一路、千聖不傳、未だ曾て親近せざるに早く大千を隔つ。與麼の告報、㊇法を盡せば民なし、退身三步、如何が相見せん。」乃ち

二

み込まぬ、一條の活路子。

㊁德嶠韶陽。德山と雲門なり、德山は佛殿を拆き、雲門は一棒に打殺すと云へり。

㊂錐頭云々。差別なきの平等は惡平等なり、鑿頭の方、平等なきの差別は惡差別なり。錐はきり、鑿はのみ。

㊃條章。おきて、箇條書なり。

㊄須彌燈王云々。此の場合に至つて、須彌燈王も、よりて大應をすわらせねばならぬ、おいらがすわる故、おりろと。

㊅今上。龜山天皇なり。

㊆堯德の天、舜德の日。拜手は猶ほ稽顙のごとし。

㊇凌霄峰。徑山にあり。

㊈刹竿を望んで回る。吉州資福寶禪師上堂に曰く、「江を隔てて資福の刹竿を望見して回り去るも、好し三十棒を與ふるに、況んや江を過ぎて來るをや。」(會元九)

㊉拂子を豎て云く、「還つて見るや、㊋霜花月に和して冷かに、梅雪烟を帶びて寒し。若し這裡に向つて見得徹し去らば、皇恩佛恩一時に報じ畢らん。其れ或は未だ然らずんば、切に忌む㊌鐘を喚んで甕となすことを。」叙謝は錄せず。

復た㊍保壽開堂の公案を擧し、師拈じて云く、「大衆、二大老の㊎落處を知らんと要すや。㊏象王回顧師子嚬呻、凜々たる神威誰か敢て近傍せん。然も是の如くなりと雖も、點檢し將ち來れば、總に㊐這の僧に勘破せらる。且く道へ、那裡か是れ他の勘破の處、具眼の者は辨取せよ。」

當晚小參、「㊑德山小參、答話せず、寰中は天子の勅、趙州小參、答話を要す、塞外は將軍の令。二老漢等閑の㊒一拶一挨、自然に風行けば草偃し、㊓太平路を得たり。然も是の如くなり

㊉拂子を豎て。拂子は塵を拂ふ道具。

㊋霜花月に和して冷。霜花は菊なり、白隱和尙は現成底などと、乞食婆の樣な、見方をすなと注意してある、學者の力量次第なり。

㊌鐘を喚んで甕となす。誰もかれも鐘がごんと鳴ると、鍋かうなると云ふ。

㊍招手を見て橫に趨る。襄州高亭の簡禪師、德山に參ぜしとき、江を隔てゝ纔かに見て、便ち云ふ、「不審し」と、德山乃ち扇を搖かして之を招く、禪師忽ち開悟、乃ち橫に趨り去り、更に回顧せず。(會元七)

㊎棒頭喝下。棒をあてられて、走り出す樣な駑馬では、遠くして遠し、千里萬里なりと。

㊏靈法無民退身三步。商鞅の法では、民がなつかぬ、餘り嚴しくすれば、學者は育たぬ、大まけに、みあしもすさつて、仕切りやらうと。

㊐霜花月に和して冷。霜花は菊なり、白隱和尙は現成底などと、乞食婆の樣な、見方をすなと注意してある、學者の力量次第なり。

㊑德山小參。德山は問話のものは三十棒と高く出られた、趙州は問話の者あれば問を致し來れと、おだやかに出られた。寰中塞外の二句は國師の評なり。

㊒一拶一挨。一拶はたゝきふせ

と雖も、㋐重ねて此の令を行ずべからず。今夜只だ自家に據るに、一條の活路子あり、汝諸人と共に同じく一歩を行せん。」拄杖を卓すること一下。

復た擧す、僧、香嚴に問ふ、「如何なるか是れ㋑直截根源の處。」嚴、拄杖を擲下して方丈に歸る。師云く、「若し直截を論せば、早く是れ㋒紆曲にし了れり。古人は卽ち且く置く、而今合に作麼生か云はん。㋓天寒し久立珍重。」

次の日、㋔兩班を謝する上堂、「衲僧家は、一動一靜、活路にあらざるなし。一歩を退くれば㋕瞿曇の眼睛を踏着し、一歩を進むれば達磨の鼻孔に築着す。只だ不退不進の如きんば、又且つ如何。」良久して云く、「㋖吹毛元動せず、徧界闖髏寒じ。」

冬至小參、「㋗法々本來法、日々杲日天に麗く、心心無別心、處々淸風匝地。便ち恁麼に會し去らば、釋迦は用つて出世せず、達磨は必ずしも西來せず、人々分上、壁立萬仞、箇々面前に㋘大寶光を飛す。㋙一念萬年、萬年一念、餓ゑ來れば飯を喫し、困じ來れば卽ち眠る。誰か㋚陰陽の代謝、四序の變遷をか管せん、甚の㋛滴水氷生、天寒人寒とか說かん。然も恁

㋐重ねて此の令を行ずべからず。太平路を得。天下太平行路安全なり。

㋑直截。直下截斷の略。

㋒紆曲。まはりどほいこと、紆は紆回、曲は屈曲。

㋓天寒云々。おゝ寒いや、長く立たせてたいぎであつたといふ意。

㋔入寺兩班の謝上堂。兩班は東西の兩班なり、東班は知事、西班は頭首、東西の兩班、住持を輔けて法社を匡持す、尙ほ朝廷に文武の兩官あるが如し。謝語、動靜進退を用ふるは、兩班に覩するなり。

㋕瞿曇は釋迦なり。釋迦の目玉を踏みにじり、達磨の鼻づらを蹴飛ばすとの意。

㋖吹毛云々。吹毛は寶劍なり。

麼にし去ると雖も、猶は是れ尋常の行履、畢竟向上如何が顯露せん。」拂子を擊つて云く、「㋗冬寒からずんば臘後に看よ。」

復た擧す、「古德云く、『佛性の義を識らんと要せば、當に㋘時節因緣を觀ずべし』と、時節既に至れば、其の理自ら彰る、今㋙書雲の令節に當る、且く道へ、彰るゝ底の理、又作麼生。」拂子を擊つて云く、「㋚一陽生じて萬彙生ず。」

次の日上堂、「一言に道ひ盡せば㋛崖崩石裂、一着機に當れば頭々漏泄。㋜洞山の菓子、㋝潙仰の家風、㋞陳年の滯貨、施設することを用ひず、畢竟今朝如何が說くべき。」拄杖を卓して云く、「時なるかな時なるかな、一陽復り來つて、㋟家々闇熱。」

上堂、擧す、「趙州、㋠雪中に臥して云ふ、『相

㋗冬寒からずんば云々。暖い暖いと云ふてゐると、あとが恐ろしい、今年の春も、節分迄は暖かかつた、が、節分がすんでから目をむく樣に寒い。

㋘時節因緣。いそいでもあかぬ、油斷してもあかぬ、時節因緣なりと。

㋙書雲。冬至のこと、冬至に雲物を書すと云ふこと左傳に見ゆ。

㋚一陽生じて云々。大小の國師、字は三寫を歷て烏焉馬となる（古人の評）。萬彙は萬類なり。

㋛崖崩石裂。地獄大堂こな微塵。頭々漏泄は百草頭上の祖師意と同じ。

㋜洞山の菓子。洞山、泰首座と冬節に菓子を喫する次、乃ち問ふ、「一物あり、天を拄へ地を拄へ、黑きこと漆に似たり、常に動用の中にあつて、動用の中に收め得ず、且く道へ、是、甚麼の處にかある。」泰曰く、「過は動用の中にあり、」洞山卽ち侍者をして菓卓を撤退せしむ。（會元）

㋝潙仰の家風。潙山上堂に曰く、「仲冬嚴寒は年々の事、曆運推移の事若何、」仰山進前叉手して立つ、潙山云く、「我れ情に知る、汝が此の話に答へ得ざることを、」香嚴云く、「某此の

㋞陳年。陳は舊。

㋟家々闇熱。家々は人人。闇熱は暗熱。

㋠趙州、雪中に臥して云ふ、『相

救へ相救へ』と、時に僧あり、便ち趙州の身邊に來つて臥す、州便ち起ち去る。」師云く、「這の僧、然も趙州を救ひ得ると雖も、爭奈せん㊐便宜を得る處便宜に落つることを。且く道へ、那裡か是れ他の便宜に落つる處、具眼のものは辨せよ。」

上堂、擧す、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ道。」州云く、「㊋墻外底。」僧云く、「這箇の道を問はず。」州云く、「儞那箇の道をか問ふ。」僧云く、「大道。」州云く、「大道長安に透る。」師、頌して曰く、「分明に指示する處、㊀覿面相謾せず。大道は弦の直きが如し、行人自ら難をなす。」

上堂、擧す、僧、鏡清に問ふ、「如何なるか是れ佛法の源。」清云く、「㊁這裡より流出す。」師云く、「大乘、流出は則ち問はず、且く道へ、這裡是れ什麼の所在ぞ。」拂子を擊つて云く、「諸人若し也た會得せば、㊅四海浪平かに、百川潮落つ。」

上堂、「山僧、早良縣裡にあつて、箇の小々の㊂茆香皂角の鋪子を開く、爭酬競買のもの、全く無しとは道はず、只だ是れ㊃價數相當るものあることを罕なり。今朝臘月十五、未だ㊄折本して諸人に賣與し去ることを免れざるなり。」拄杖を卓して云く、「㊆有利無利、行市を離れず。」

臘月二十五日上堂、「㊇雲門に一曲あり、㊈臘月二十五、流落して幾多年ぞ、今日重ねて新に擧す、重ねて新に擧す。㊉巢は風を知り、穴は雨を知る。」

㊋歲夜小參、「高く寶鑑を懸けて、萬象を目前に列し、橫に鐵鉸を按じて、群機を量外に截る。蓋天蓋地、透色透聲、卷舒我れにあり、殺活時に臨む。把定放行、全く掌握に歸す。所以に衲僧家は、㊌行不到の處に說到し、說不到の處に行到し、千變萬化、七縱八橫、㊍六十甲子を亂却し、七十二候を抹過するも、分外となさず。然れ此の如くなりといへども、今夜且つ一着を放過す。臘月盡るは舊に依る、他の春の回

話に答へ得ん、」潙山久前問を蹈む、嚴亦道前叉手して立つ、潙云く、「賴に痕子が不會に遇ふ。」（會元）

㊋陳年の滯貨。店ざらしの賣れ殘り、くすぶれる古ふんどし。

㊌家々闘熱。さなきだに、梅ミでも白粉で御慶。（古書入）

㊍雲中に臥す。蹈みすべつて雲の中にこけた。

㊎便宜を得る處便宜に落つ。利口なものは利口の穴に落つ、井戸掘つて井戸の中へころりとおちた。

㊏墻外底。墻根の外に道路ありしなり。

㊐覿面相謾ぜず。ちつともだましはせぬ、偽せ金は使はぬ。

弦は弓のつる、行人は旅人。

㊑這裡より流出す。古人は「うぬが鼻しづくが、さうじやわい、呑み込め」と云ふてある。

㊒四海潙平云々。大亂の後には斯樣な太平が來る。

㊂茆香皂角鋪子はきやすりやの事なり。爭酬競買は高島屋の倉ばらへで、我れいちと買ひに往く。

㊃價數相當。直段書通りに買ふ。

㊄折本。もとれをきるを折本と云ふ。

㊆有利無利行市を離れず。まうけがあつても無くても、賣らねばならぬは市町のならひ。

㊇雲門に一曲あり。周禮の注に雲門は黃帝の樂、蓋し樂の莊嚴神秘なるもの。（字解）

㊈臘月二十五は人間の末路、流落云々は郎當悲酸。（字解）

㊉巢は風を知り穴は雨を知る。鳳のある年は低き處に鳥巢ふ、雨多き年は乾きたる地に蟲穴を穿つ、是れ此の語の出所なり。

㊋歲夜。除夜なり。寶鑑は山川萬象を照破す、鐵鉸は殺人刀活人劍、量外は限量の外、勘定出來ぬ處。

㊌行不到は月の橫町三丁目、說不到はしやつくりの鎗先。

㊍六十甲子。一年に六十甲子あり、七十二候、彼岸土用寒食清明等の七十二の氣候あり。

㊎順時保愛。其の場其の場で護持するを順時保愛と云ふ、潙行蜜提、工夫相談する也。古人此處を評して、「是れは國師のはめてなり、手前に取りまはさずば行くまい」と。

㊏北禪露地の白牛。潭州北禪の智賢禪師、除夜の小參に、「年窮まり歲盡くるも、諸人と分歲すべきなし、老僧一頭露地の白牛を煮、黍米飯を炊き、野菜根を煮、槽櫃の火を燒き、大家喫し了つて村田樂を唱へん、何が故ぞ、他の門戸により、他の墻に倚ひ、剛ひて時人に喚んで郎となさるゝを免

るに還す。何が故ぞ、也た諸人の㋕順時保愛せんことを要す。」

復た㋖北禪、露地の白牛を烹るの公案を擧し、師拈じて云く、「北禪老師、恁麼の按排、謂つべし是れ富貴と、興德家貧にして、許多の㋗按排なし、只だ現定に據つて、㋘諸人と分歳せん。然りと雖も、汝諸人をして㋙快活不徹ならしめん。何が故ぞ。」拄杖を卓して云く、「㋚佛に獻するには香の多きを用ひず。」

㋛歳旦上堂、拄杖を卓して云く、「一處透れば處々透り、一處眞なれば處處眞なり。畢竟如何が見得せん。」又拄杖を卓すること一下して云く、「㋜元正啓祚、萬物咸新なり。」

元宵上堂、拂子を以て圓相を打して云く、「這の一燈を點ずれば、燈々卽ち明かなり、森羅萬象、形を逃るゝところなし。若し也た㋝覆盆の下は、爭か㋞山僧を怪み得ん。」良久して云く、「且く道へ、那一燈ぞ。」

上堂、「㋟馬祖陞堂、百丈卷席す、㋠風塵草動、便ち來由を知る。好大衆、衲僧家は須らく是れ恁麼にして始めて得べし。㋡一等に是れ箇般の時節、切に忌む、眼を開いて瞌睡することを。」便ち下座。

㋕順時保愛　北禪の語。「時節を順ぶ保愛せよ」と、便ち下座。（會元十五）

㋖北禪、露地の白牛を烹るの公案　北禪は獻立てなり、現定は出來合せなり。

㋗按排　北禪は獻立てなり、現定は出來合せなり。

㋘諸人　坊主もあり、在家もあり、是れが露地の白牛なり。

㋙快活不徹　愉快でたまらぬ。不徹は徹せざらんやの反語で、徹と同じ、閑不徹、笑不徹などの例多し。

㋚佛に獻するに香の多きを用ひず　此の語子細あり、容易の觀をなすなかれ。又云ふ、知音少れなり。（古人評）

㋛歳旦　文永八年の歳旦、國師三十八歳、此の時分は隨分騷騷しき世の中なり、此の年趙良弼、元の使として博多に來り、西澗子曇又來る、國師と趙良弼との唱和に、「外國の高人日本に來る、相逢ふて談笑眞機を顯す」の語あり。

㋜元正啓祚　新年おめでたう、野も山も皆目出度う。

㋝佛涅槃上堂、「㋞涅槃一片の心に住せず、㋟端なく賣弄す紫金身、今に至るまで㋠醜惡遮掩しがたし、㋡狼藉たり年々桃李の春。」

三月旦上堂、「禪と說き道と說き、妙と談じ玄と談ず、好肉に瘡を剜る、畢竟如何。㋢常に憶ふ江南三月の裡、鷓鴣啼く處百花香し。」

上堂、「春日晴れて黃鶯鳴き、春風浩々たり、春水冷々たり。㋣妙德空生都べて會せず、善財走得して㋤太忙生。」

上堂、擧す、㋥眞淨和尙、衆に示して云く、「頭陀石、莓苔に裹まれ、鄉筆峯、薜荔に纏はらる。羅漢院裡一年に三箇の行者を㋦度し、歸宗寺裡參退喫茶。」師拈じて云く、「㋧眞語の者、實語の者、不安語の者。所以に興德依つて之を行ず、大衆下座、巡堂喫茶。」

㋝覆盆の下　油斷のならぬ穴なりと。

㋞山僧を怪み得ん　和尙さんのかほばかりを見る。

㋟馬祖陞堂百丈卷席　馬祖陞堂衆機かに集る、百丈出でて席を卷却す、祖便ち下座、百丈謦つて方丈に至る、祖曰く、「我れ適來未だ說話せざるに、汝何として便ち席を卷却す」、百丈曰く、「昨日、和尙に鼻を扭られて、鼻頭の痛を得たり」、祖曰く、「汝昨日甚の處に向つてか心を留む」、百丈曰く、「鼻頭今日痛まざるなり」、祖曰く、「汝深く昨日の事を明らむ」、百丈作禮して退く。（會元三）

㋠風塵草動　そよと吹く風。

㋡一等　おしなべて、拈鎚竪拂も咳唾掉臂も。

㋢二月十五日の上堂、此の偈頌、幅もあり奥もあり、技巧もあり、上出來なり、大應今日涅槃に入る。

㋣涅槃一片の心　見性的の當體。

㋤端なく云々　四十九年、紫摩金色の身を切り賣りす。

㋥醜惡　三千年もさらされた死骸。

㋦狼藉たり云々　花の下に、拔き身を振ふなんて殺風景なことよ。

㋧常に憶ふ云々　僧、風穴に問ふ、「語默離微に涉る時如何が通じて不犯ならん」、風穴應ずるに此の語を以てす。繪ときをすると瘡が付く。

㋨妙德空生　文殊須菩提、善財は五十三の善知識に遍參す。

㋩和尙三十八歳、時節は春の盛り、法語もみづ〳〵して居る。

㋪眞淨文禪師は黃龍の法子。

㋫度　剃度なり。

㋬眞語の者云々　國師は二枚舌よ。（古人評）

浴佛上堂、「衲僧家は尋常㊐高く釋迦を揖し、彌勒を拜せず、甚によつてか今日特地に香湯を調和し、金軀を灌沐す。㊑三尺と一丈六と、且つ同じく手を携へて歸る。」

結夏小參「雲山蒼々として㊒聞覺の伽藍を成見し、海水渙々として全く平等性智を彰す。燈龍露柱、㊓狸奴白牯、若しくは凡若しくは聖、情と無情と、同じく此に結制安居、平等無平等のものあることなし。一夏九十日の內、經行及び坐臥、常に其の中にあり。然る後、山僧這の保社に入らず、行は是れ自ら行じ、坐は則ち自ら坐す。何が故ぞ。是れ時人と共に住しがたきにあらず、大都て㊔緇素分明ならんことを要す。」

復た擧す、㊕古德云く、「若し是れ全く宗乘を擧せば、汝等諸人甚れの處に向つてか領會せん。所以に㊖古今獨露、隱顯無方」と。拈じて云く、「㊗依稀として曲に似て、纔かに聽くに堪へたり。又風に別調の中に吹かる。」

次の日上堂、「興德の一衆、是れ多からずと雖も、箇々頂天履地、人々鼻直眼橫、甚の三月安居、九旬禁足とか說かん、畢竟如何。㊘南地の竹、北地の木。」

㊐高く釋迦を揖し彌勒を拜せず。先佛の釋迦を揖し、當來下生の彌勒を拜せず。

㊑三尺と一丈六と同じく手を携へて歸る。俱尸長者、身のたけ僅かに三尺、衆見て恥ぢて、佛前に至らず、佛彼を憐み、丈六の身を變じて、三尺の小身を現じ、手を携へて精舍に歸る（俱尸經）。三尺の小供と一丈六の尊となり。

㊒圓覺伽藍。圓覺經に、「大圓覺を以て我が伽藍となし、心身平等性智に安居す。」

㊓狸奴は貓、白牯は牛。

㊔緇素分明。黑白分明なり。

㊖古德。鼓山智岳了宗禪師の上堂語。（會元八）

㊖古今獨露。三世十方獨脫顯露、隱顯無方、之を見れば前にあり、忽然として後にあり、定方あるなし。會元には「古今常顯、體用無始」に作る。

北地の木。」

上堂、乾峯和尙示衆に云く、「法身に三種の病二種の光あり、一々透得して始めて是れ穩坐。」雲門大師、衆を出でて云く、「庵內の人、甚によつてか庵外の事を見ざる。」師拈じて云く、「韶陽老人也た是れ㊙邪に隨ひ惡を逐ふ。當時只だ是れ㊘冷笑一聲せば、乾峯身を隱すに路なきことを管取せん。」

端午上堂、「諸方今日㊚善財の藥を採ることを說かず、便ち㊛東山の神符を說いて以て佛事をなす。只だ是れ興德門下、渾べて說くべきなし。何が故ぞ。家に㊝白澤の圖なければ妖怪自然に消滅す。㊞滅滅、長安夜々家々の月。」

上堂、「結夏已に一月を經、山僧日々㊟業識茫々、本の據るべきなし、未だ曾て兄弟と本分の事を說着せず。且く道へ、本分の事作麼生か說かん。」良久して云く、「今日は大熱、且つ別時を待て。」

中夏上堂、「九旬已に半を過ぐ、也た諸人自ら合に時を知るべし。寒の時は闍梨を寒殺し、熱の時は闍梨を熱殺す。切に忌む、㊠當面に諱却することを。空しく光陰を度らば、更に阿誰をか恨みん。」

七月旦上堂、「一葉落ちて天下秋なり、㊡一塵起つて大地收まる。未だ言

㊙邪。彷彿、或は幽眇の意なり、古德の擧揚には、斯る面白き樣子あり。

㊘南地の竹北地の木。支那の南方は竹を產し、北方は木材を出す、松直麻曲と同じと、又天上の星、地下の木と用ひし處もあり。

㊛邪に從ひ惡を逐ふ。泥坊ば鬪がびくつく。

㊞冷笑一聲。にがわらひ。管取はうけあふ。乾峯は尻ひんまくつて逃げるところなし。

㊚善財採藥。文殊善財に謂ふ、「藥を採り將ち來れ。」

㊛東山神符。五祖上堂、「今日端午の節、白雲に一道の神符あり、也た些子の靈驗あり、敢て隱藏せず、諸人に擧示せん。」（五祖錄）

㊝白澤。神獸の名、之を寫して妖邪を伏す、普通なれば、白澤の圖ありと云ふべき處を無しと

はざるに先づ知るも、猶ほ是れ鈍漢、未だ擧せざるに先づ領ずるも、是れ俊流にあらず。何が故ぞ。定光、㋟招手、智者點頭。」

解夏小參、「一結に結定して針箭不入、一解に解開して處々㋠通方。東に去るも也た得たり、西に去るも也た得たり、甚の萬里無寸草とか說かん。淨地却つて人を迷はす、誰か管せん門を出でゝは便ち是れ草。㋡眼睛血を流出す、恁麼恁麼、大地に踏翻し、脚に信せて行く。不恁麼不恁麼、橫に柳栗を擔ふて秋風に舞ふ。然も是の如くなりと雖も、興德が拄杖子、猶ほ未だ㋢放過せざることあり。何が故ぞ。㋣吾が王庫の內、是の如きの刀なし。」

復た臨濟無位の眞人の話を擧し、㋤雪峰の語を擧し了つて、師拈じて云く、「白拈未白拈は、卽云ふは力量なり。昔黃帝恒山に白澤を得たり、神獸能く萬物の情を言ふ、因つて天地鬼神の事を問ひ、寫して圖となし、祓邪の文を作つて以て之を祝す。(軒轅記)

㋥滅々長安衆々家々月。無くなつたなくなつた。そのあとは家家の月も、戶戶の月もある、每晩々々。

㋦業識茫々。作務よ托鉢よとうは調子なりと。

㋧當面に蹉却。熱さ寒さ、往き來るさの、えりきらひをするな。

㋨一塵起つて大地收まる。一片の落葉天下の秋を含み、一微塵裡に盡大地を收む。

㋩招手は手まねぎ、點頭は合點。天台智者、十五歲の時、佛像を禮するとき、恍然として大山海際の峰頂に一僧あり、招手して、一伽藍に接入して云く、「汝當に此に居るべし、當に此に終るべし」と、天台の佛壇に定光禪師あり、弟子に謂つて云く、「久しからず、當に善智識あつて此に至るべし」と、俄爾として智者至る、定光曰く、「還つて嘗昔手を擧げて招引の時を憶ふや否や。」(祖庭事苑)

㋪通方。八方に通ず、西は九州、東は奧羽までも。

㋫眼睛血を流出す。ありがたくて、空涙がぼろ〳〵こぼれる。此の句上の結びの如くも見え又下の起しの樣にも見ゆ、下へ掛くれば目玉をつきつぶせと見るべし。

㋬放過。ほつて置くこと。

㋭吾王庫の內。其の樣なぬきさし出來ぬなまくらはなし。

㋮雪峰の語。定上座の擧揚を聽いて、雪峰云く、「臨濟大いに白拈賊に似たり。」白拈はひるく、「汝當に此に居るべし、當に此に終るべし」と、天台の佛壇に定光禪師あり、弟子に謂つて云く、「久しからず、當に善智識あつて此に至るべし」と、俄爾として智者至る、定光曰く、「還つて嘗昔手を擧げて招引の時を憶ふや否や。」

ち且く置く、若し是れ無位の眞人ならば、但だ面門より出入するのみにあらず、見んと要すや。」拄杖を擲下し、喝して云く、「元來只だ是れ拄杖子。」

次の日上堂、「布袋口打開すれば、徧界路の通ずるあり、露柱燈籠、一々眼活し、狸奴白牯、各々心空す。汝等諸人、㋯甚によつてか更に這裡に來つて、低頭接耳、叉手當胷するや。可煞だ向背を知らず、西東を辨せず。忽ち箇の出で來つて道ふあらん、長老、良を壓して賤となすべからずと。也た他を怪むこと得ず。何ぞや。㋰西風一陣來、落葉兩三片。」

中秋上堂、「秋聲日に高く、秋水澄んで淸し、秋風は颯々、秋月は圓明。畫けども又畫きならず、描すれども又描しならず。是れ㋱王老師にあらずんば、誰か能く拂袖して行かん。」

上堂、「秋風八極に吹き、木落ちて千山を露す。見成の公案、達磨不識、六祖不會、㋲大難大難。」便ち下座。

開爐上堂、「㋳火焰、三世の諸佛の爲に說法す、㋴人貧にして智短し。三世の諸佛立地に聽く、㋵馬瘦せて毛長し。更に一句子あり、且つ暖處に去つて商量せん。」

とんびなり。

㋯甚によつて。更に這裡に來つて。低頭接耳。野郎ども丸で解制の氣分を知らぬと。

㋰西風一陣來。落葉兩三片。露柱眼活。狸奴心空のところなり。

㋱王老師。王老師みたやうな分らずやで無くては、此のところは得離れまい。

㋲大難大難。我が法妙難思なりと。

㋳火燄。雪峯云く、「三世の諸佛火燄に向つて大法輪を轉ず、」雲門拈じて云く、「火燄三世の諸佛の爲に說法す、三世の諸佛立地に聽く。」(分元十五)

㋴人貧智。貧すれば鈍する。

㋵馬瘦せて毛長。苦勞が花よ。

㋶暖處。忌。十月七日なり。

㋷巴鼻は尻の先、鼻づら。來由は因緣由來。

㋸楊岐頂上拳。其の師慈明の忌日に、兩手をもつて拳を拳つ

㋐虛堂和尚の忌日拈香、香を以て圓相を打して云く、「只だ這箇是れ什麼ぞ、㋑沒巴鼻來由あり。㋒楊岐頂上の拳、㋓鎭州の蘿蔔頭。」便ち香を揷む。

上堂、「南來のものも三十棒、北來のものも三十棒、㋔梁山徹骨の貧窮、亦能く人を濟ふ。興德には然も棒ありと雖も、曾て動着せず。何が故ぞ。黃金自ら黃金の價あり、終に㋕沙に和して人に賣與せず。」

十一月旦上堂、㋖明招風頭稍峻しの公案を、師拈じて云く、「明招老漢、斯の道を以て斯の民を覺せんと欲す。之を囑して又囑す、是なることは則ち是なり、興德は則ち然らず、者裡風頭稍硬し、切に忌む商量することを。」

冬至小參、「㋗璿璣未だ動せざるとき、一句を道得すれば、鐵樹花を開く。朕兆纔かに分るゝ處、一機を轉得すれば、氷河焰を發す。直に得たり、㋘嘉州の大象、滿面に光を生じ、㋙陝府の鐵牛、通身に汗出づることを。洞山の菓子、又見る一番新に、㋚皓老の布裩舊によつて赫赤たり。然も是の如くなりと雖も、若し也た向上の全提ならば、㋛冬至寒食に到る、更に一百五の在るあり。何が故ぞ。當頭霜夜の月、任運前溪に落つ。」

㋐虛堂和尚。宋の人。天童の住。
㋑沒巴鼻。手がかりのない。
㋒楊岐。楊岐山。
㋓鎭州の蘿蔔。尾張大根などといふに同じ。一圓相に就いての働き。
㋔梁山。梁山緣觀禪師。
㋕沙に和す。云々。似せものにして安賣せぬ。
㋖明招。德謙禪師の天寒上堂、衆僧かに來る、師云く、「風頭稍々硬し、是れ汝が安身立命の處にあらず、且く暖處に歸つて商量せん。」便ち方丈に歸る、大衆隨ひ到つて立つ、師云く、「纔かに暖室に到れば、便ち瞌睡を見る」と、一時に逐ひ出す。（會元八）
㋗璿璣。書の舜典に出づ、天文を正すの器なり。
㋘嘉州の大象。統記に「唐の玄宗の朝に沙門海通なるもの、嘉州に彌勒佛を造る、高さ三百六十尺」と。

次の日上堂、「一冬二冬、叉手當胸、逢磨不會、隻履忽々たり。寒山掌を撫して呵々として大笑す。何が故ぞ。㋚海水天寒を知り、枯桑天風を知る。」

除夜小參、「古往今來、日は上り月は下る。一年十二月、月々一般、一日十二時、時々相似たり。見成の公案、按排を過絕す。德山棒あるも、手を下すにところなく、臨濟喝あるも口を開くの分なし。山僧興廢の告報、別に也た他なし。只だ諸人の時を知り節を知り、㋛化機に涉らず、自ら一條の活路子を行せんことを要す。然る後、之と手を把つて共に行かん、其れ或は未だ然らずんば、㋜明年更に新條の在るあり。春風に惱亂して卒に未だ休せず。」

復た㋝東村の王老夜燒錢の公案を擧し、頌して云く、「東村の王老夜燒錢、歲晚年々㋞事遷らず。若し箇の中に向つて㋟指的を求めば、㋠新羅の鷄子天邊に過ぐ。」

上堂、擧す、僧、香林に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」林云く、「㋡坐久成勞。」師拈じて云く、「大衆、切に忌む㋢動着することを。動着せば則

㋚海水枯桑。譏案の語なり、海水凝凍せず、是れ天寒を知らざるなり、枯桑に枝葉なし、故に天風を知らず。今は更に轉して、海水天寒を知り、枯桑天風を知るとす。
㋛化機に涉らず。暑さ寒さの化機なし。
㋜明年云々。羅隱の柳の詩なり。
㋝東村王老夜燒錢。會元十四に石門徹禪師、僧問ふ、「年窮歲盡の時如何」、師曰く、「東村王老夜燒錢。」
㋞事遷らず。會元八に「事遷らず、時移らず、人間の事、一切皆空なり」と。
㋟指的。的を指す。
㋠新羅の鷄子。高麗の鷄子。
㋡坐久成勞。坐久しければ勞を成す。
㋢動着。動作。

ち禍生ぜん、何が故ぞ。㋺白玉瑕なし、文を彫つて德を喪す。」

上堂、臨濟因に院主に問ふ、曰く、「什麼の處よりか來る。」云く、「州中に㋻黃米を糴り來る。」濟拄杖を以て劃一劃して云く、「還つて這箇を糴り得んや。」主便ち喝す、濟便ち打す。須臾にして典座來る、濟、前話を舉す、座云く、「院主、和尚の意を會せず。」濟云く、「倆作麼生か會す。」座禮拜す、濟亦打す。頌に云く、「㋼桃李無言相映じて開く、紅々白々何れよりして來る、忽然として一陣㋽春風惡く、狼藉たる園林綠苔に點ず。」

佛殿を拽く上堂、㋾雲門大師、衆に示して云く、「和尚子、妄想することなかれ、山は是れ山、水は是れ水。」時に僧あり、出でゝ云く、「某、山は是れ山、水は是れ水と見るときは則ち妄想し去らず。」門云く、「佛殿甚に因つてか這裡より過ぐ。」僧云く、「恁麼なるときは則ち妄想し去らず。」門云く、「我れに話頭を還し來れ。」師拈じて云く、「然らば則ち㋿開き易きは始終の口、保ち難きは歲寒の心なり。這の僧當時才かに他の雲門の佛殿、甚によつてか這裡より過ぐと道ふを聞いて、但だ㋷應當如是と云はゞ、唯だ自己の光明を表顯するのみにあらず、亦乃ち雲門の脚跟を覷破せん。」

王老夜燒錢。」錢は紙錢なり。

㋺事不遠。來る年も來る年も、みそかのどたばたは同じことなりと。

㋻指的。玄指綱的なり。

㋼新羅鵲子。昨日の空に飛鳥のあと、弓も鐵炮もとゞかぬ。

㋽坐久成勞。すわりくたびれ。九年面壁から思付きしならん。

㋾著云々。鵲林云く、「勅著せい、勅著せいで何とせう。」

㋿白玉瑕なし云々。鵲林曰く、「たゝきくだけ。」

㋷黃米。古米なり。

㋸桃李。院主典座、紅々白々、喝と禮拜。

㋹春風惡。臨濟の打。

㋺雲門示衆。會元十五雲門章に「三門什麼によつてか佛佛に騎つて這裡より過ぐ」に作る。

㋻開き易きは云々。初めあつて終りなし、龍頭蛇尾の漢。

佛涅槃上堂、「佛身法界に充滿し、普く一切群生の前に現ず。」拂子を竪起して云く、「這箇は是れ拂子、佛身什のところにかある。諸人若し這裡に向つて一隻眼を着得せば、便ち靈山の一會儼然として未散なることを見ん。其れ或は遲疑せば、古佛過ぎ去つて久し。」

三月半上堂、「㋽正法眼、涅槃心、頭々顯露、追尋することを用ひざれ。陌上の桃花都べて落盡し、黃鶯啼いて綠楊の陰にあり。」

法堂の前、青草を剗除し、白沙を布くの上堂、「若し是れ一向に宗乘を擧揚せば、固に是れ法堂前、青草離々たらん。未だ免れず㋾牙關を咬定して、一線道を放ち去ることを。」拄杖を卓して云く、「只だ這の些兒、㋿人の憎を得たり。古に亘り今に亘つて變易なし。㋷噁。端なく沙を撒し土を撒し了んぬ。」拄杖を靠けて下座。

浴佛上堂、「未だ都率を離れず、已に閻浮に降す。㋸天は東南に高し、未だ母胎を出でずして、度人已に畢んぬ。地は西北に傾く、恁麼に會得せば、黃面老子、豈に但だ㋹今日始めて降生するのみならんや。如し其れ未だ然らずんば、興德乂一杓の惡水を費し去らん。」拂子を以て潑水の勢をなして

㋽正法眼藏、涅槃妙心、實相無相の法門あり、摩訶迦葉に附屬すと、是れ佛の記莂なり。

㋾牙關を咬定。誠に口惜しいけれども。

㋿人の憎を得。讒の茶目は、いたづらがすぎる。

㋷噁。惡聲、勵聲なり、噁噁叱咤、千軍皆伏す。噁の字、喉より迸るの音。

㋸天は東南に高く地は西北に傾く。著語の體なり、列子には「地は東南に傾き、天は四北に高し。」

㋹今日。四月八日なり。

㋺二千年前の影子。釋迦の繩張を踐不出。

㋻之逸を打す。葛藤語錄に、「迂曲直僅ならざるを云ふ」と。蓋し外邊の逸匠して、中間を得ざるなり。

云く、「看よ看よ、我今灌沐諸如來。」

結夏小參、「大圓覺を以て、我が伽藍となす、天網恢々疎にして漏さず。身心安居、平等性智、十方刹海、包括して遺すことなし。衲僧伎倆をなし盡して、自ら謂らく、多少の奇特ありと。殊に知らず、總に這の ❶二千年前の影子を跳り得ざることを。興德恁麼に道ふ、放不過底あることなきや、出で來つて禪床を掀倒し、大衆を喝散せよ。如し無くんば高く鉢囊を掛け、拄杖を拗折し、長夏の中、外に向つて ❷之遠を打することを得ざれ。何が故ぞ。」拂子を擊つて云く、「❸趙州東壁に胡蘆を掛く。」

復た天平、❹西院に到るの公案を擧して、師拈じて云く、「天平、當時才かに西院が上座の錯か西院の錯かと道ふを聞いて、但だ錯と云つて、西院の口を開かんと擬するを待つて、拂袖して便ち行らば、惟に西院の口頭を塞斷するのみにあらず、亦乃ち諸方に檢責せらるゝことを免れん。」

結夏上堂、❼雲門、衆に示して云く、「聞聲悟道、見色明心。」師云く、「❽築着磕着、回避するにところなし。觀音菩薩、胡餅を買ふ、手を放下すれば、元來是れ饅頭。」師云く、「只だ這の些子の說話、多少の人妄に卜度を生ず。殊に知らず、❾兎馬角あつて、牛羊に角なきことを。會得せば、眸を展じて一夏を終へん。然らずんば、更に九旬禁足のある在り。」

上堂、「古者の道ふ、『結夏已に十日なり、❷水牯牛作麼生。』又云く、『結夏已に十日なり、❿寒山子作麼生』と。人を ⓫抑逼して作麼せん。興德は則ち然らず、結夏已に十日なり、但だ是れ ⓬飢ゑては飯を喫し、熱しては涼に乘じ、且く恁麼に時を過す。何が故ぞ。智者は之を見て之を智と謂ひ、仁者は之を見て之を仁と謂ふ。」

端午上堂、「今朝五月端午、⓭桃符艾虎を用ひずして、兎角の拄杖、龜毛の拂子、覿面に全提して、佛病祖病俱に拈却し、魔孽妖怪都べて掃盡す。正恁麼の時、畢竟如何。天外に出頭して看よ、誰か是れ我が般の人。」

上堂、擧す、僧、六祖に問ふ、「黃梅の意旨、什麼人か得る。」祖云く、「佛法を會する人得。」「和尙は

❶趙州錄に、問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州曰く、「東壁上に胡蘆を掛く、多少時。ぞ。」胡蘆は瓢簞。

❷天平西院に到る、平常に云ふ、「道ふことなかれ佛法を會すると、箇の話を擧するの人を覓むるも亦無し」と、一日西院遙かに見て、召して云く、「從漪、」平、頭を擧す、西院云く、「錯、」平行くこと兩三步、西院又曰く、「錯、」平近前す、西院云く、「適來の兩錯、是れ西院の錯か、是れ上座の錯か、」平云く、「從漪が錯、」西院云く、「錯、」平休し去る、西院云く、「且く這裡に在つて夏を過し、待て、上座と共に這の兩錯を商量せん、」平當時便ち去る。

❸雲門示衆。雲門錄に曰く、「古に言ふ、聞聲悟道、見色明心と、作麼生か是れ聞聲悟道見色明心」、乃ち云く、「觀音菩薩、饅を將ち來つて、餬餅を買ふ、手を放下して云く、『元來是れ饅頭。』」

❹築着磕着。コツツリ、カツチリ。物と物と突つて發する聲、磕は石と石と相打つ聲なり。

❺兎馬角あつて云々。つぼ皿の蓋をとつたれば、あしげの馬がれて居る。

❻水牯牛作麼生。青か赤か、れたか起きたか。

❼寒山子作麼生。いんだか、きたか。

❽抑逼。いぢめぬくなり。水牯牛はどうした、寒山子はどうしたと、學者をせめさいなむ。

❾有りがたくもない點心、樂でもない涼みなり。

❿桃符艾虎。桃の木のふだ、艾で作つた虎、是れは端午の節に厄除けに用ふるもの。

⓫我れば佛法を會せず。言ふなかれ佛法を會すと、此の麤語の人を求むるも又得がたし。是れ天平和尙の語なり。

⓬此の地金二兩なし。或人二兩の金を盜み、之を土中に埋む、人の知るを恐れて、告げて曰く、「此の地に金二兩なし、」人此の語によつて所在を知る。

⓭俗人酒三升を沽ふ。僧酒を買ふて私かに藏す、人の知るを恐れて、人に示して曰く、「此の三升の酒は俗人沽ひしなり」と、人此の語によつて僧の沽ひしを知る、此の二語は曖さんとして彌々露るるを云ふ。

還つて得るや否や。」「得ず。」「甚によつてか得ざる。」「(十)我れは佛法を會せず」と。師拈じて云く、「既に是れ佛法を會せず、甚によつてか祖師と作る、會すや。(ラ)此の地に金二兩なし、(ム)俗人酒三升を沽ふ。」

上堂、「今朝六月一、那の事本見成、水上青々たる綠、元來是れ浮萍。」

興德寺語錄終

太宰府萬年崇福禪寺語錄上

侍者慈禪等編

師、文永九年臘月二十五日に於て入院。

山門、「山は翠壁を横へ、水は高源より出づ。(イ)解脫門開く、大衆、(ロ)歸去來、歸去來。」

佛殿、「(ハ)麻三斤、(ニ)殿裡底、(ホ)狹路に相逢ふて、卒に回避しがたし。」香を挿んで云く、「還つて見るや、若し也た遲疑せば、(ヘ)古佛過ぎ去つて久し。」

方丈、「德山の棒、臨濟の喝、這裡一時に(ト)倚閣す。」拄杖を靠けて云く、「(チ)大坐當軒、壁立萬仞、儞等諸人、甚麼の處に向つてか相見せんと擬する。(リ)吽々。且く門外に居く。」

法座、「(ヌ)向上の一路滑かに、壁立萬仞嶮し。且く道へ、如何が步を進めん。」脚を擧げて云く、「看よ看よ、(ル)行によつて棹臂を妨げず。」

拈香に云く、「此の一瓣の香、根は盤して空劫以前にあり、葉の生ずるとは

(イ)解脫門。空、無相、無作を表して、三解脫門と云ふ。
(ロ)歸去來。本分の田地に歸入するなり。
(ハ)麻三斤。會元十五に、僧、洞山に問ふ、「如何なるか是れ佛、」山云く、「麻三斤。」
(ニ)殿裡底。會元四に、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ佛、」州云く、「殿裡底。」
(ホ)狹路云々。鼻と鼻と突き合ふた。
(ヘ)古佛過ぎ去つて久し。昨日の空の飛鳥の跡なり。
(ト)倚閣。こゝでは、懶へねぢこんでおく。

威音那畔に於てす。曾て早良縣裡興德禪寺にあつて拈出すること一番、天を熏じ地を炙す、今日人天普く會す。未だ免れず重ねて新に拈出することを。前住大宋徑山虚堂和尚大禪師に供養して、用つて法乳の恩に酬ゆ。」

師、趺座して乃ち云く、「道遠からんや、嶺頭雲淡々たり、聖遠からんや、磵下水冷々たり。須らく知るべし、瞿曇日々に出現し、達磨時々に西來することを。靈山の一會、何ぞ今日に異ならん、少室の家風正に此の時にあり。便ち見る、佛日輝を增し、堯風永く扇ぐことを。世出世間の能事、云に畢んぬ。然も是の如くなりと雖も、與麼の告報、也た是れ箇の時機に應ず、若し是れ向上の全提ならば、遠うして遠し。何が故ぞ。㋟青山長飛の勢を鎖さず、滄海合に來處の高きを知るべし。」

復た擧す、㋠張無盡相公、㋡玉泉の皓老を請す、開堂陞座して云く、「君見ずや、君見ずや。」無盡云く、「見る。」皓老便ち下座。師拈じて云く、「恁麼の事は恁麼の人に遇ふて拈出するが故に是なり。且く道へ、無盡相公見ると云ふ、㋢畢竟箇の甚麼をか見るや。若しまた會得せば、明上座、今日開堂、功浪に施さず。其れ如し未だ然らずんば、切に忌む、妄に㋣消息を通

㋝大坐冨軒云々。天の天外、地の地外まで徹底一枚。

㋞吽々。牛の鳴き聲、且く門外に居くは、まあ門の外で鳴かせておかう。

㋟向上云々。須彌座の上は、つる〳〵にすべつてゐる、須彌座の階は、中々危いぞ。

㋠行によつて掉臂か妨げず。學生が兵式體操の時、歩きだすと、一二と手をふる。

㋡青山云々。雲を帶ぶる山は、勢飛ばんとす、磵下清冷の水は、高く曹源より來る。此の二句は起句を受けて云ふ、古句に「白雲靈靈くる處是れ青山、行人は更に青山の外にあり」と。

㋢張無盡。名は商英、初め佛法を信ぜず、其の妻俊邁、深く禪奥に達す、無盡其の化を受けて初めて此の事あることを知る。

ずることを。」

當晚小參、「㋥法に定相なし、緣に遇はゞ卽ち宗なり。立處皆眞なれば、㋦方に隨つて主となる。興德を離れて崇福に到る、其の緣に非ざるなし。法幢を建て宗旨を立するは、其の處を擇ばず。直に得たり、風六合に淸く、月四海に明かに、頭々轍に合し、應用虧くるなきことを。所以に道ふ、佛性の義を知らんと欲せば、㋧當に時節因緣を觀ずべしと、時節既に至らば、其の理自ら彰る。時節は則ち諸人共に知る。且く道へ、㋨彰るゝ底の理、又作麼生。」良久して云く、「吾れ爾に隱すことなし。」

復た擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ㋩雲門の一曲。」門云く、「㋪臘月二十五。」師拈じて云く、「㋫黃鐘大呂、陽春白雪は、固に是れ古今の絶唱なり、明上座、今夜一曲を唱へん、看よ。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「㋬意は流水に隨つて遠く、聲は暮雲を遏めて寒じ。且く道へ、故人と相去ること多少ぞ。」

上堂、崇山が家風別に奇特なし、黃葉庭際に滿ち、野鹿林坳に叫ぶ。然も是の如くなりと雖も、祖意敎意、㋭鬪揍し得て恰好。且く道へ、何を以

㋥法に定相なし云々。此の語通俗にも味あり、世の中の者が、仁義禮智よ忠臣孝悌よと、定相をこさへるから、泥田の中に足を蹈みこむなり、ほんたうの處は、石と金と打ち合せて、火の出る樣なものなり、活潑々地でなくてはならぬ。

㋦方。方所、どこでも彼、こでも。

㋧當に時節因緣を觀ずべし。大抵の人は枯骨をしぼつて汁を出さうとする。

㋨彰るゝ底の理作麼生。青か赤か、いたちのくつしやみ、貓のふん。

㋩雲門の一曲。昔し黃帝、雲門

でか見得せん、具眼の者は辨取せよ。」

上堂、「❶三九二十七、籬頭篳觱を吹く。❷三世の諸佛有ることを知らず、狸奴白牯却つて有ることを知る。阿呵呵、會すや。這裡風頭稍❸硬し、且く暖處に歸せん。」

除夜小參、「年窮まり歲盡き、瞿曇の眼睛突出す。臘盡き春回つて、達磨の鼻孔❹崢嶸たり。開眼も也た着、合眼も也た着、歩を舉すれば踏着し、手を伸ぶれば觸着す。築着着、溝を塡め壑を塞ぐ。頭々顯露、處々渠に逢ふ。恁麼も也た得、不恁麼も也た得、恁麼不恁麼總に得たり。山僧が與麼の告報、忽ち人あり、聽き得て出で來つて道はん、我れ會せり、我れ會せりと。崇福❺低々地、他に向つて道はん、❻謝三娘秤金と。」

復た擧す、僧、古德に問ふ、「如何なるか是れ❼不遷の義。」德云く、「❽城上巳に吹く新歲の角、窓前猶ほ點す舊年の燈。」師拈じて云く、「古德恁麼に道ふ、放行の處に把定し、把定の處に放行す、猶ほ未だ❾勦絶を得ざることあり。崇福は卽ち然らず、如何なるか是れ不遷の義、只だ他に向つて道はん、❿舊歲今宵盡き、新年明日來ると。」

の曲を奏す、前に出づ。

❺眼。月二十五。臘月は年の暮れ、二十五は月の終り、此の一曲は狼笛の樣な響あり。

❻黃鐘大呂。律呂の調、陽春白雪は歌曲の譜なり。

❼意は流水に隨つて遠く云々。山姥の謠をうたふには、山姥の心持か吟味すべし、且く道へ、此の二句の意作麼生。

❽鬪擻。擻は擻なり、左官が土とすさとをきりかへし、これまぜる如きを云ふ。

❾三九二十七云々。五雜組に「一九と二九と、相逢ふて手を出さず、三九二十七、籬頭に篳觱を吹く」とあり、時候寒き故相逢ふても、ふところ手也、陽氣回り來れば、籬頭にひちりきの曲聲を聞く。

❿三世の諸佛云々。南泉示衆の語なり。

⓫硬。顏がこほり硬まること。

歲旦上堂、僧問ふ、「五葉花開いて瑞色新に、千古少林の春を挽回す。正與麼の時、願はくは提唱を聽かん。」師云く、「雲淨うして日月正しく、雪消して天地春なり。」進んで云く、「恁麼なるときは、則ち一氣言はず、有象を含む、萬靈何れの處にか❶無私を謝せん。」師云く、「好箇の消息。」進んで云く、「記得す、僧、鏡淸に問ふ、『新年頭還つて佛法ありや也た無や。』淸云く、『有り』と、意旨如何。」師云く、「山靑く水綠なり。」進んで云く、「如何なるか是れ新年頭の佛法。」淸云く、『元正啓祚、萬物咸く新なり』と、如何が委悉せん。」師云く、「現成の公案。」進んで云く、「僧又明敎に問ふ、『新年頭還つて佛法ありや也た無や。』敎云く、『無し』と、何の道理かある。」師云く、「❷天高うして萬象正し。」進んで云く、「僧云く、『年々是れ好年、日々是れ好日、甚麼としてか無きや。』敎云く、『❸張公酒を喫すれば李公醉ふ』と、又作麼生。」師云く、「❹東山手を拍てば西山舞ふ。」進んで云く、「鏡淸は有りと道ひ、明敎は無しと道ふ、優劣あることなきや。」師云く、「❺一に多種あり、二に兩般なし。」進んで云く、「若し人あり、和尙に新年頭に佛法ありや也た無やと問はゞ、未審し和尙如何が祇對せん。」師云く、「❻婆子の裙子を借つ

❶無私。日月に私照なし。

❷天高うして萬象正し。天が晴れると日月星辰、威儀森然た

❸張公酒を喫すれば李公醉ふ。

❹東山手を拍てば西山舞ふ。

❺一に多種あり、二に兩般なし。

❻婆子の裙子を借つ

❼崢嶸。山の嶮峻なり。

❽城上巳に吹く新歲の角、窓前猶ほ點す舊年の燈。あちらでは雜煮を食ふてゐる、こちらではまだ算用のまつさいちゆうである。

❾勦絶。書經の甘誓に出づ、勦は截斷なり、はさみきりが、きつぱりせぬこと。

❿舊歲今宵盡云々。是れは還流ではないか、不遷はどこに隱れて居るか。

⓫硬。顏がこほり硬まること。

て婆年を拜す。」進んで云く、「上來已に師の指示を蒙る、向上の宗乘、又若何。」師云く、「㊁須彌頂上に金鐘を擊つ。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「㊂斬新の日月、特地の乾坤、佛祖の大機、衲僧の㊃巴鼻、恒沙の福智、無量の妙用、者裡より頓に發す。何が故ぞ。」拄杖を卓すること一下して云く、「元正啓祚、萬物咸く新なり。」

元宵、因に經を講ずる上堂、僧問ふ、「心徑苦生ずれば、㊄迷魂の地に坐在し、燈影裡に行らば、㊅朝打暮打、二途を離却して、請ふ師と相見せん。」師云く、「天外に出頭して看よ。」僧云く、「只だ終日火を道つて口を燒かざるが如きんば、是れ名實相當らざることなきや。」師云く、「㊆桑を指して柳を罵る。」僧云く、「恁麼なれば則ち樓臺上下、㊇火、火を照し、車馬往來、人、人を看る。」師云く、「只だ㊈一橛を道ひ得たり。」僧云く、「記得す、㊉古德云く、『火燄、三世の諸佛の爲に說法す、三世の諸佛㊋立地に聽く』と、未審し、火燄甚麼の法をか說く。」師云く、「㊌明皎々暗昏々。」僧云く、「三世の諸佛如何か聽くや。」師云く、「聽くものは方に知る。」僧云く、「學人還つて聽くことを得んや。」師云く、「儞に分なし。」僧云く、「誰か聽くことを得んや。」

㊀上來。前の上堂。
㊁須彌頂上に金鐘を擊つ。須彌山の頂上に金鐘を擊つ。
㊂斬新。禪語、新鮮の極を云ふ。
㊃巴鼻。巴は尾なり、巴鼻はとらまへどころと譯す。
㊄迷魂の地に坐在す。迷惑の衆生なり。
㊅朝打暮打。見地あつて未だ極底を徹せざるなり、朝から晩迄、死水裡に坐在するなり、打の字打擊とも見、又打坐とも見る。

り、何のあるないの沙汰があらうぞ。
㊆張公云々。法身邊の境界。
㊇東山手を拍つ云々。川向の喧嘩を止めて見よ。
㊈一は一助、二は二助なり。
㊉婆子の禪子を借つて婆年を拜す。お婆さんの上著をかりて、お婆さんおめでたうと、語言三昧。
㊋須彌云々。あゝ向上の宗乘か、須彌山の絕巓に鐘かごんとなると。
㊌斬新。禪語、新鮮の極を云ふ。
㊍巴鼻。巴は尾なり、巴鼻はとらまへどころと譯す。
㊎迷魂の地に坐在す。迷惑の衆生なり。
㊏朝打暮打。見地あつて未だ極底を徹せざるなり、朝から晩迄、死水裡に坐在するなり、打の字打擊とも見、又打坐とも見る。

師云く、「露柱燈籠。」僧禮拜す。又僧問ふ、「梅花、雪を衝いて發き、黃鶯、柳梢に囀ず。箇は是れ現前の三昧なり、請ふ師別に擧揚せよ。」師云く、「向上に會取せよ。」進んで云く、「記得す、僧、趙州に問ふ、『如何なるか是れ祖師西來意。』州云く、『庭前の柏樹子』と、此の意如何。」師云く、「松は直く棘は曲れり。」進んで云く、「僧云く、『和尙、境を將つて人に示すことなかれ。』州云く、『老僧、境をもつて人に示さず。』僧云く、『如何なるか是れ祖師西來意。』州云く、『庭前の柏樹子』と、又如何。」師云く、「是れ苦心の人にあらずんば知らず。」進んで云く、「西來意は且く置く、如何なるか是れ柏樹子。」師云く、「㊎青々は時の人の意に入らず。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「燈を以て燈を傳へ、燈々相續して放光動地、動地放光。所以に道ふ、『㊏今佛放光明助發實相義』と、放光明は則ち且く置く、如何なるか是れ實相義。」拄杖を卓すること一下、「花の開くことは㊐栽培の力を假らず、自ら春風の㊑伊を管待するあり。」

上堂、「佛祖の大機全く掌握に歸し、人天の性命總に這裡にあり。把定すれば則ち乾坤光を失し、放行すれば則ち瓦礫光を生ず。把定と放行は則

㊒桑を指し云々。お三を八助と呼ぶことなり。
㊓火は火を照し人は人を見る。一體か拈じて答話を贊揚せしなり。
㊔一橛。半分なり。
㊕古德。雲門大師のこと。
㊖立地。卽坐と云ふがごとし。
㊗明皎々。沖を掛けたら明皎々、水を洒げば暗昏々なり。
㊘青々は時の人の意に入らず。柏樹子は世界一ぱいに滿ちて居れども、えい合點せぬ。
㊙今佛放光明。法華經序品の文なり。
㊚栽培の力を假らず。餘人の手は無用なりと。
㊛伊を管待するあり。自然にあれなせわするよ。
㊜認著。あれは拂子なりと認むるなり。
㊝參。手前と手前に實參實悟せよとの意。

ち且く置く、如何なるか是れ佛祖の大機、人天の命脈。」拂子を豎起して云く、「看るや看るや、㊁認着せば依然として還つて不是。㊃參。」

佛涅槃上堂、「㋐手を以て胸を摩して精魂を弄し、雙趺示し出して兒孫を累はす。西天此土二千載、㋑毘盧を摵かし得て海岳昏し。」

三月半上堂、「春山青く、春光美はし、春鳥は春風に啼き、春魚は春水を弄す。左顧右眄、可も不可も無く、東行西行、是も不是もなし。然も是の如くなりと雖も、」拄杖を卓すること一下して云く、「此に過ぎたるはなし。」

浴佛上堂、僧問ふ、「㋒鐵壁鐵壁、之を號して佛と曰ふ、常に苦海の中にあつて立つ、只だ今日の如きんば、降生する底是か苦海の中に立つ底是か。」師云く、「二俱に不是。」僧云く、「天上天下唯我獨尊。」師云く、「㋓也た是れ草裡の漢。」僧云く、「雲門の棒頭短く、藥山の杓柄長し。還つて報恩の分ありや。」師云く、「恩を知つて方に恩を報ずることを解す。」僧云く、「㋔遵布衲の浴佛、水江石卵を浸す。此の意如何。」師云く、「未だ曾て他を浴し得ず。」僧云く、「佛未だ出世せざる時如何。」師云く、「天高うして日月正し。」僧云く、「出世して後如何。」師云く、「清風匝地。」僧云く、「出世と不出世とは則ち且く置く、卽今佛什麼の處にかある。」師云く、「脚下を看よ。」僧禮拜す。又僧問ふ、「世尊初生下、天を指し地を指し、周行七歩して云く、『天上天下唯我獨尊』と、此の意如何。」師云く、「衆の爲に力を竭す。」僧云く、「雲門云ふ、『我れ當初若し見ば、一棒に打殺して、狗子に與へて喫せしめて、貴ぶらくは天下太平を圖らん』と、意什麼の處にかある。」師云く、「未だ曾て他の影子を打着せず。」僧云く、「雪竇云ふ、『我れ當初若し見ば、便ち與に禪床を掀倒せん』と、又如何。」師云く、「劒去つて久し。」僧云く、「二大老の用處、是れ同か是れ別か。」師云く、「俱に隻手を出して門戸を扶竪す。」僧云く、「上來一々指示を蒙る、向上の宗乘又如何。」師云く、「金烏は急に、玉兎は速かなり。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「佛身法界に充滿し、普く一切群生の前に現ず、諸人釋迦老子を見んと要すや。開眼かも也た着、合眼も也た着、尙ほ自ら遲疑少間せば、大佛殿に詣つて、㊄一杓の惡水什麼の處に向つても着けん。」

結夏小參、「崇福山高く、頂顆に到得するも、猶ほ㋝途に涉ることあり。若し是れ磵泉水急なり、淵源を探得するも、猶ほ㋞脈を隔つることあり。若し是れ眼乾坤を蓋ひ、皮下に血あらば、山を見ても是れ山ならず、水を見ても是れ水ならず。圓覺伽藍を掀飜し、平等性智に住せず、千聖と途を同じうせず。自ら一條の活路子を行じ、方に乃ち山を見ては是れ山、水を見ては是れ水、頭々是れ圓覺伽藍、物々卽ち平等性智、狸奴白牯、露柱燈籠、若しくは聖、若しくは凡、情と無情と、同じく此に結制安

㋐偈なり、精魂を弄すは、死にざはに、のたうちまはること。
㋑毘盧を摵得。毘盧遮那佛を引くりかへして、天地まつくらなりと。
㋒鐵壁々々。百千の諸佛も、穴のぞきならぬ、分寸のすきまもない。（慮堂錄）
㋓也た是草裡の漢。矢張りぢゝむさき處にしやがんで居る。
㋔遵布衲云々。會元に藥山儼禪師の章に、遵布衲佛に浴す、藥山云く、「這箇は汝の浴するに任す、還つて那箇を浴し得んや。」遵云く、「那箇を把り將ち來れ、」藥山乃ち休す。

㊄一杓惡水云々。ひしやくの頭に眼をむきだせ。
㋝途に涉る。途中造作を免れず。
㋞脈を隔つ。肝心の水脈と隔絶す。

居するも分外とせず。其れ或は未だ然らずんば、㋓雲は嶺頭にあつて閑不徹、水は磵下に流れて太忙生。」

復た梁山和尚、衆に示して云く、「南來のものも三十棒、北來のものも三十棒」の公案を擧し、師拈じて云く、「梁山老漢、恁麼の垂示、也た是れ力を費すこと少からず。崇福は卽ち然らず、南來のものも北來のものも、一等に他をして㋔明窓下に按排せしむ。何が故ぞ。彼此出家兒。」

五月旦上堂、一を擧して二を擧するを得ず、一着を放過すれば第二に落在すの公案、師拈じて云く、「㋕氈拍板、無孔笛、㋖狹路に相逢ふ。而今諸方の語に隨つて解をなすもの、只管一二を論ず、豈に曾て夢にだも二大老の落處を見んや。今㋗五月初一、妨げず、山前山後、三三兩々、山を看水を翫ぶことを。且く道へ、放過すや放過せずや。」

端午上堂、「今朝五月五、用ひず㋘土を咒し壁に書することを。崇福に㋙吉にして利ならざることなし。」慕に拄杖を拈じて卓すること一下して云く、「且く道へ、華言か梵語か、道の眞言あり、纔かに擧すること一返せば、㋚勞箭機前急に薦取せよ。」

㋓雲は嶺頭云々。ぢいさんは山へ柴刈りに、婆さんは川へ洗濯に。

㋔明窓下に按排。雲水を優遇するを云ふ。

㋕氈拍板。毛氈張つたひやうしぎ、音のせぬものなり。

㋖狹路に相逢。關取りと男だてが、せまき露地で出逢ふと、よけようがない。

㋗五月初一云々。一は一助、二は二助、三三が九助の、ちり毛が五本。

㋘土を呪し壁に書す。唐土の風俗、陰陽師のまじなひなり。

㋙吉にして利。周易の語、回向の文に諸緣吉利を慣用す、うんざりする程、顧慮が舞ひ込むこと。

㋚勞箭機前。時箭はきり〳〵し

擧す、慧山の智炬和尚看經の次、僧問ふ、「㋛元字脚を掛けず、何ぞ多學することを得ん。」炬云く、「文字性異に、法性體空なり。迷ふときんば則ち句々瘡疣、悟るときんば則ち文々般若、若し取捨なくんば、何ぞ㋜圓伊を害せん。」師拈じて云く、「慧山和尚也た是れ取捨の心未だ忘せず、崇福は則ち然らず。或は人あり、元字脚を掛けず、何ぞ多學を得ると問はゞ、只だ他に向つて道はん、句々眞如、文々般若と。敎他あれ別に生涯あることを。」

半夏上堂、九夏半を過ぎ、事として辨せざることなし。開單展鉢、喫粥喫飯、㋝北番を收得して東西自ら安し。且く道へ、何を以てか驗とせん。」良久して云く、「後五日に看よ。」

六月十五日、㋞兵火の後上堂、「馬祖喝下に百丈を聾せしめ、黃檗の棒頭臨濟を活す。㋟德を以て人を服するものは王たり、力を以て人に假すものは覇たり。崇福が者裡は、這の兩邊に屬せず。何が故ぞ。」良久して云く、「㋠鵰弓已に掛けて狼煙息み、萬里歌謠太平を賀す。」

七月旦上堂、「凉颸乍ち起つて葉初めて墮つ、時節因緣㋡相饒さず。若し是れ當陽に薦得し去らば、何ぞ妨げん分外逍遙に任すことを。或は人あ

㋛元字脚。元の字の脚は、乙の字、乙は一なり、一は文字の初なり、故に文字を捲じて元字脚と云ふ。（俗語解）

㋜圓伊。圓は丸なり、伊は三角なり、丸でも三角でも、點でも、害にならぬ、伊は梵に∴に作る、古人に圓伊を名とせる人あり。

㋝北番云々。是れは文永九年、國師三十八歲、屯を按するに、前年に元より趙良弼を使して和親を求めしも、吾れ應ぜずして元使空しく歸れり、蓋し此の時分一時小康を得て、太平ん謳歌せしものか、次の六月十五日の上堂にも又此の意あり。

㋞兵火の後。兵塵消して太平來る、故に馬祖黃檗の因緣を用ふ。

り、出で來つて道はん、時節因緣は卽ち且く置く、如何なるか是れ佛法の大意と。只だ他に向つて道はん、火を竟めて煙に和して得、泉を擔つて月を帶びて歸る。」

解夏小參、「二千年前風淸く月白し、二千年後月白く風淸し。幸に自ら瘡なし、之を傷ることなかれ。若し結制解制を論ぜば、邪に隨ひ惡を逐ふ、禁足護生は無繩自縛。所以に崇福が這裡は、四月十五も也た與麼、敢て諸人の一絲毫許りをも錯誤せず、七月十五も也た與麼、亦諸人の一絲毫許りをも動せず。諸人若し佛祖未生以前に向つて會得せば、又何ぞ妨げん、㋐晝は兜率、夜は閻浮、脚頭到るところ是れ生涯なることを。其れ如し未だ然らずんば、迦葉門前に㋖刹竿あり。」

復た擧す、僧、雲門に問ふ、「樹凋み葉落つる時如何。」門云く、「體露金風。」師頌して云く、「體露金風㋗處々同じ、時人空しく自ら西東に走る。㋘憐むべし只だ蘆花の色を見て、白蘋の蓼紅に對することを見ず。」

八月旦上堂、僧問ふ、「參は須らく實參なるべし、悟は須らく實悟なるべしと、如何なるか是れ實參。」師云く、「參じて始めて得べし。」僧云く、「如何

㋖王者は德により、霸者は力を恃む、孟子に出づ、此の前語は馬祖黃檗の句に纏す。

㋗鵶弓は射鵶の强弓、狼烟は烽火なり。

㋘相饒さず。世間に公道なるは唯だ白髮、貴人頭上にも曾て饒さずと。

㋙晝は兜率夜は閻浮。彌勒無著の因緣、箱根へ往うと、別府へ往うと、まゝよ。

㋚刹竿あり。酒旗なり、高きこと三萬三千尺、浮つかり目をつくな、あぶないぞ。

㋛處々同じ。何くに往くも秋の夕暮れ、裂裝文庫掛けて、西へ東へと、うろ〳〵うろつく。

㋜憐むべし只だ。花の色を見て云々。古人も牛窓櫻や、疎山壽塔を透過すると、こゝどころがほんのりすると云ふてある。

㋝如來禪云々。是れは香嚴擊竹

なるか是れ實悟。」師云く、「悟つて始めて得べし。」僧云く、「凡夫を轉じて賢聖となし、賢聖を抑へて凡夫となすことは、則ち和尙無きにはあらず。」師云く、「更に一着のある在り。」僧云く、「記得す、仰山、香嚴に謂つて云く、『㋝如來禪は師兄の會することを許す、祖師禪は未だ夢にだも見ざることあり』と、此の意如何。」師云く、「言中に響あり。」僧云く、「如何なるか是れ如來禪。」師云く、「㋞鷄足山前風悄然。」僧云く、「如何なるか是れ祖師禪。」師云く、「少室峰下雪猶ほ寒し。」僧云く、「如何なるか是れ和尙の禪。」師云く、「還つて㋟腦門の重きを覺ゆるや。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「蟬は高樹に鳴き、蛩は草底に吟ず、槿花煙を凝らし、白露珠を垂る。從來法の商量するなし、只だ現成の受用を要す。大衆、還つて委悉すや。」良久して云く、「田を種ゑて㋠摶飯を喫し、脚を伸べて牀上に睡る。」

浴佛上堂、僧問ふ、「佛未だ出世せざる時、甚としてか靈山に密旨ある。」師云く、「天は是れ天、地は是れ地。」僧云く、「佛已に出世して後、甚としてか杳として消息なき。」師云く、「㋡天を指し地を指し、狼藉少からず。」僧云く、「出世不出世は則ち且く置く、卽今佛甚の處にかある。」師云く、「高く眼を着け

悟道後の事なり、此の語眼機あり。

㋞鷄足山。又狼足山とも云ふ、迦葉入定の處、迦葉は一大藏經を結集す。

㋟腦門の重き云々。自分の頭の重さを知つたか。

㋠摶飯。にぎりめしの如し、摶は丸めるなり、飯を丸めて、口へ放り込むことゝ摶飯喫と云ふ。

㋡天を指し云々。一手は天を指し、一手は地を指し、唯我獨尊などとぢすむさきものを撒きちらす。

て看よ。」僧云く、「爭奈せん金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳となることを。」師云く、「眼を將つて看ること莫れ。」僧云く、「只だ雲門の一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめんと道ふが如きんば、是れ何の心行ぞ。」師云く、「家富んで小兒嬌る。」僧云く、「今朝大家、手を出して金軀を灌沐す。復た是れ報恩とせんか、復た是れ酬怨とせんか。」師云く、「是れ怨家にあらざれば頭を聚めず。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「閻浮に降下して、王宮に誕生し、㋒九龍水を吐いて金軀を灌沐す。今に到るまで千古㋓雨洗ひ風磨す。金容の妙相光輝を增し、天を照し地を鑑み、何の極りかあらん。命根落在す崇福が手、一杓の惡水驀頭に澆ぐ。何が故ぞ。㋔之を齊しうするに禮を以てす。」

結夏小參、「南贍部洲、大日本國、筑州太宰府裡、横岳山中に、一座の清淨伽藍あり、大にしては刹海を包み、細にしては隣虚に入る。若しくは聖、若しくは凡、有情無情、盡く裡許にあつて結制安居す。九十日の内、行かんと要すれば便ち行き、須彌那畔、大洋海底も、一時に走徧す。二六時中、坐せんと要すれば即ち坐し、東弗于提、西瞿耶尼、盡十方世界も、直下に坐斷す。正恁麼の時、汝等諸人、甚麼の處に向つてか氣を出さん。然も是の如くなりと雖も、有る時は把定し、有る時は放行し、卷舒我れにあり、殺活時に臨む。今夜僩をして一々氣を出し去らしめん。」拄杖を拈じて卓すること兩下して云く、「會

㋒九龍水を吐く。義淨經に出づ。
㋓雨洗風磨。雨の灌頂、風の洗禮。
㋔之を齊しくする。禮義でなければ家が治まらぬ。

❷頂門眼通天竅。ひたひの眞中に立つまなこ、あたまのてつべんの耳の穴、美事氣燄を吐くか、吐かぬか。

すや、❷頂門の眼、通天の竅。」

復た舉す、東京法雲の杲和尚、衆に示して云く、「老僧、熙寧三年の❶文帳、鳳翔府に在つて供申、當年華山の四十里を崩り了り、八十村の人家を壓倒す。汝が輩、後生の㋐茄子瓠子、幾時か知り得ん。」師拈じて云く、「㋑高山流水只だ知音を貴ぶ、惜むべし當時一衆、人の賞音するなし。若し是れ明上座ならば、才かに恁麼に道を聞いて、手を拍つて㋒呵々大笑せん。何が故ぞ。詩は會人に向つて吟ず。」

次の日上堂、「十五日以前は㋓天は東南に高く、十五日以後は地は西北に傾く。正當十五日、天は是れ天、地は是れ地、僧は是れ僧、俗は是れ俗、甚の三月安居、九旬禁足とか說かん。這裡に向つて畢竟如何が箇の消息を通せん。」拂子を擊つて云く、「薰風自南來、微涼生殿閣。」

上堂、舉す、僧、智門に問ふ、「蓮華未だ水を出でざる時如何。」門云く、「蓮華。」僧云く、「水を出でゝ後如何。」門云く、「荷葉。」師拈じて云く、「崇福は卽ち然らず、蓮花未だ水を出でざる時如何、水は是れ水。水を出でゝ後如何、蓮華は是れ蓮華。崇福恁麼に道ふ、還つて落處を知るや。風無きに荷葉動く、決定魚の行くことあらん。」

❶文帳。出家得度の屬出を鳳翔府に送出す、是れを虛空消殞戲山擂くる雄的などと、いやどうして夢にだも會せずとなり。
㋐茄子瓠子。成程なすや青瓢單の知つたことでない。
㋑高山流水。呂氏春秋の伯牙子期の故事なり。
㋒呵々大笑。すてきな聲を出しなさる、びつくりするは。
㋓天は東南に高く、地は西北に傾く。往古共工と祝融と戰ひし時、共工怒つて頭を不周山に觸る、天柱地維崩裂して、天は西北に高く、地は東南に傾く。

七月旦上堂、僧問ふ、「擧一明三は尋常の茶飯、只だ聲前の一句の如きんば、如何が緇素を分たん。」師云く、「一葉落ちて天下秋なり。」僧云く、「恁麼なる則は ㊇石鏡を懸くるを勞せず、天曉自ら分明。」師云く、「只だ一半を道ひ得たり。」僧云く、「記得す、㊉長生、靈雲に問ふ、『混沌未分の時如何。』雲云く、『露柱懷胎。』意旨如何。」師云く、「無孔の鐵鎚、當面に擲つ。」僧云く、「生云く、『分れて後如何。』雲云く、『片雲の太清に點するが如し、』又如何。」師云く、「一簑兩彩。」僧云く、「生云く、『太清還つて點を受くるや也た無や。』雲答へず、何の道理かある。」師云く、「毒龍行く處草生せず。」僧云く、「生云く、『與麼なれば含生不來ならん。』雲又答へず、如何が委悉せん。」師云く、「要津を坐斷す。」僧云く、「生云く、『直に純清絶點を得る時如何。』雲云く、『尙ほ是れ ㊋眞常流注す』と、意何の處にかある。」師云く、「痛處に針錐を下す。」僧云く、「生云く、『如何なるか是れ眞常の流注。』雲云く、『鏡の長に明かなるに似たり』と、如何が理會せん。」師云く、「㊌山河は鏡中にあつて觀えず。」僧云く、「生云く、『向上還つて事ありや也た無や。』雲云く、『有り。』生云く、『如何なるか是れ向上の事。』雲云く、『鏡を打破し來れ、倆と相見せん』と、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「破鏡重ねて照さず。」僧云く、「古人諸訛の處、和尙已に ㊍訐露す。和尙諸訛の處、未審し何

㊇石鏡。山の名、潯陽記に、「石鏡山の東に一圓石あり、崖に掛る、明淨人を照し、形を見る。」

㊉長生。雪峯義存の法嗣。靈雲は志勤禪師、桃花を見て悟道せし人、長慶安の法嗣。

㊋眞常流注。悟の穴にしやがみ込むば、この處の吟味が足らぬから。

㊌山河は鏡中にあつて觀えず。山河で鏡を照すことなり。

㊍訐露。訐は告訐と熟して、あばき出すなり、露は顯露の露

人か點檢せん。」師云く、「衆眼も瞞じ難し。」僧云く、「恁麼なるときは則ち此の話大いに天下に行はれ去らん。」師云く、「諸方に擧似するに一任す。」僧云く、「作家の宗師、㊎天然あるあり」と。便ち禮拜す。

師乃ち云く、「葉落ちて秋を知り、絃を動かして ㊏曲を別つも、未だ衲僧本分の事に當らず。且く道へ、如何なるか是れ衲僧本分の事。崇福直に得たり口を開くに處なきことを。然も是の如くなりと雖も、㊐雲中の鴈を見ずんば、爭か沙塞の寒きを知らん。」

解夏小參、「暑退き涼生じ、樹凋み葉落つ。古佛の家風を全彰し、衲僧の巴鼻を成現す。蹉過するもの、千々萬々、錯つて會するもの、萬々千々。若し是れ未だ言はざるに先づ領じ、未だ擧せざるに先づ知らば、方に始めて少分の相應あらん。猶ほ未だ是れ全機の作略にあらず、有般の漢は十二時を以て一日となし、九十日を以て一期となし、坐して安居を守る。大いに木に緣つて魚を求め、舟を刻んで劍を尋ぬるに似たり。崇福今夜、㊑忍俊不禁、別に一條の活路子を通せん。」良久して云く、「㊒住みね住みね、若し頻に淚を下さしめば、滄海も也た須らく乾くべし。」

㊎天然あるあり。自然天然に備つて居る。

㊏曲を別つ。吳の周瑜は、音律に精し、大醉の後と雖も、誤りあれば必ず之を知る。

㊐雲中の鴈云々。突飛ぶ鴈を見て、朔北の沍寒を知る。

㊑忍俊不禁。こらへかねること。

㊒住みね住みね云云。やつぱり、やめよと、己れに存分泣せたら、東の海も盡きざるなり。

㊓雲門示衆。會元十五、上堂、「乾坤の內、宇宙の間、中に一寶あり、形山に秘在す、燈籠を拈じて佛殿裡に向ひ、三門を將つて燈籠上に來す、作麼生。」自ら代つて云く、「物を逐はず意移る。」

㊔大家平分。大家は皆さんと云ふが如し、過不及なき樣に分けて取れと。

㊕君に勸む云々。王維の詩に「渭

復た擧す、㋙雲門、衆に示して云く、「乾坤の內、宇宙の間、一寶あり、形山に秘在す。」師拈じて云く、「此の寶は但に形山にあるのみにあらず、崇福今夜、情を盡して拈出し、普く大衆に施し、九夏の賞勞とせん。」幕に拄杖を拈じて擲下して云く、「㋛大家平分。」

次の日上堂、「烏兎停まらず、時自恣に臨む。九十日の內、曾て說着せざる底の一句子、分明に諸人の與に說破し去らん。」拄杖を卓して云く、「㋜君に勸む此の一盃の酒を盡せ、西のかた陽關を出づれば故人なからん。」

中秋上堂、僧問ふ、「㋝天上月圓に、人間月半なり。是れ人あることを知る、未審し中間の㋞樹子は何人にか屬する。」師云く、「從來主人のあるあり。」僧云く、「恁麼なれば則ち天香の桂子落ちて紛々たり。」師云く、「見る者還た稀なり。」僧云く、「馬祖月を翫ぶ次、西堂に問うて云く、『正與麼の時如何。』堂云く、『㋟正に好供養』と、意旨如何。」師云く、「早く光影に隨ふ。」僧云く、「祖、百丈に問ふ、丈曰く、『㋠正に好修行』と、又如何。」師云く、「簷前に月を捧ぐ。」僧云く、「祖、又南泉に問ふ、泉、拂袖して便ち行る、意、那裡にかある。」師云く、「㋡行に因つて臂を掉ふ。」僧云く、「祖曰く、『經城の朝雨輕塵をひたす、客舍青々として柳色新たなり、君に勸む此の一杯の酒を盡せ、西のかた陽關を出づれば故人なからん』と。他國へ出ると、茶を飲めと云ふものも無いとの意なり。

㋝天上云々。仰いで見れば、天月圓滿、人間世界は十五日で、一月の半分處なりと。

㋞樹子。天香を發する桂子なり、箇々具足底のあみださん。

㋟正好供養。さて〳〵結構な御供養なり。

㋠正好修行。純淸絕點の修行の端的。

㋡行に因つて臂を掉ふ。歩むと手が動きだす。

㋢年老心孤。年よつて淋みしくなつた、丁度婆が孫をかはゆがる樣なり。

㋣鼓山拂袖。玄沙衆に示して曰く、「世尊靈山會上にあつて道は藏に歸し、禪は海に歸す。只だ普願のみあつて獨り物外に超ゆ』と、畢竟如何。」師云く、「㋤年老いて心孤なり。」僧云く、「當時若し馬祖、正與麼の時如何と云ふを見ば、和尙如何が祗對せん。」師云く、「便ち一掌を與へん。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「南泉は驟步して便ち行る、㋥鼓山は拂袖して衆に歸す。㋦寒山子馬駒兒、總に未だ光影裡を出でず。且く道へ、畢竟月。噫。泊んど錯つて名言を下す。」

上堂、「崇福門下百事宜しきに隨ふ、飯に遇ふては飯を喫し、茶に遇ふては茶を喫し、寒には卽ち火に向ひ、困じては卽ち打眠す。左之右之、可も不可も無し。德山臨濟、常流を出でず、却つて憶ふ寒山子、言無くして笑つて點頭することを。」

達磨忌上堂、「㋧少室山下、雪寒く冰苦し、熊耳峯前、月冷に風高し。因つて憶ふ、㋨普通年遠の事、鐵作の心肝も也た斷腸。」

虎堂の忌日拈香、「世界未だ分れず、生佛未だ具はらざるに、早く這箇あり、天を熏じ地を炙す。從上の佛祖、這の些子を得て頭を競ふて出で來り、ふ、吾に正法眼藏あ、涅槃妙心あ、實相無相の微妙法門あ、不立文字あ、敎外別傳あ、之を摩訶大迦葉に附囑すと、猶ほ月を蓋くが如く、曹源の拂を竪つるは猶ほ月を指すが如し、」時に鼓山衆を出でて曰く、「月、月、」沙云く、「這箇の阿師、我に就いて月を覓む、」山背はす、却つて衆に歸して云ふ、「我れ他に就いて月を覓む」と道へり。（類聚十四）

㋤寒山、馬祖皆月を翫びし人。

㋥噫。發聲、「エイ」とか「ヤイ」とか云ふが如し、名言は綽とき譬なり。

㋦少室山は達磨の居處、熊耳峯は達磨の墓所。

㋧普通。梁武帝の年號、普通七年九月廿一日達磨初めて漢土に入る。

㋨純鐵。人を馬鹿にするなり。

㋩拳を行ず云々。人の頭をはれば、人からはりかへされる。

㋪萬象の中云々。鳳州長慶棲禪

貴買賤賣す。大驚小怪、崇福一年一度、諱日に臨む毎に、特地に拈出し、這の老和尚の鼻孔を熏じ、㋐鈍置一上す。何が故ぞ。㋑拳を行せば須らく拳を喫する時あるべし。」

冬至小參「崇福山前、戒岸寺後、一物あり、杲々として明かなること日の如く、漫々として黑きこと漆に似たり。上は天を拄へ、下は地を拄へ、目前を離れず、全く象外に超ゆ。陰陽の消長を逐はず、豈に寒暑の變遷に同じからんや。所以に道ふ、㋒萬象の中獨露身、唯だ人自ら肯つて乃ち方に親し。諸禪德、朝々暮々、來々往々、幾般か看見し、幾廻か撞着す。滿眼滿耳、廻避するに處なし、甚によつてか落處を知らざる。」良久して云く、「吾れ常に此に於て切なり。」

復た擧す、「慈明和尚、冬日僧堂前に榜示して此の相○○三三一八珠柮を作す。若し人識得せば、四威儀の中を離れず。首座一見して、乃ち衆に謂つて云く、『和尚今日放參』と。」師拈じて云く、「天神は一見して天に歸し、地神は一見して地に歸す。者箇は則ち且く置く、首座一見して和尚今晩放參と云ふ、又作麼生。」良久して、「㋓一百單五、清明に近く、清明は定めて寒食の後にあり。」

次の日上堂、「晷運推移し、日南長至、石笋條を抽き、鐵樹花を生ず。老胡㋔不合に流沙を過ぐ。」

師の頌に曰く、「萬象の中獨露身、唯だ自ら肯つて乃ち方に親し、昔日錯つて途中に向つて覓む、今日看來れば火裡の氷。」

㋓一百單五。冬至から寒食まで一百五日。

㋔不合。不可を推しとほす意あり、むだごととでも譯すべきか、達磨は來ないでもよいに、推付けて流沙を過ぎ來れり。

上堂、擧す、五臺山下に一婆子ありて接待す、凡そ僧臺山の路甚麼に去ると問ふとあれば、婆云く、「驀直に去れ。」僧才かに去る、婆云く、「好箇の師僧も又與麼に去る」と。是の如くすること既に久し、游僧傳へて趙州に到る。和尚聞き得て乃ち云く、「待て、老僧汝が爲に去つて勘破せん」と。州往いて便ち問ふ、「臺山の路甚麼の處に向つてか去る。」婆云く、「驀直に去れ。」州才かに行く、又云く、「好箇の師僧も又與麼に去る」と。州回つて陞座して云く、「婆子已に諸人の爲に勘破し了れり。」師頌して云く、「㋕煙塵を發動す箇の老婆、趙州の㋖一語千戈を定む、玆より四海清うして鏡の如し、㋗贏ち得たり將軍の凱歌を奏することを。」

上堂、僧問ふ、「雲門に三句あり、還つて咨參を許すや也た無や。」師云く、「㋘大海は細流を讓らず。」僧云く、「如何なるか是れ函蓋乾坤の句。」師云く、「天の高きも蓋ひ盡さず。」僧云く、「如何なるか是れ隨波逐浪の句。」師云く、「十字街頭の破草鞋。」僧云く、「如何なるか是れ截斷衆流の句。」師云く、「㋙水中の江石卵。」僧云く、「恩大にして㋚都べて語なし、懷抱自ら分明。」師云く、「分明に記取せよ。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「嶺上白雲多く、澗下流水足り、寒月虛庭を照し、霜風林底

㋕煙塵云々。此の婆、並大抵でない、煙塵を發動して、初僧の眼をくらます。

㋖一語。勘破了の一語、婆子の筋骨を拔いた。

㋗贏ち得たり。太平の効、師一人に歸す。

㋘大海云々。泰山は土壤を讓らず、河海は細流を揀ばず、よりぐひぜぬから、何でももつてこい。（史記に出づ）

㋙水中の江石卵。伊勢の海千尋の底の一つ石、鹽もします、水もします、齒も立たない。

㋚都べて語なし。口で言ひ露し樣がござらぬ、胸の中はぐわちりといたしました。

を動す。一切成現、更に缺少なし。崇福恁麼に道ふ、口を開くことは舌頭上にあらず、甚によつてか是の如くなる。㊂虎體元斑あり。」

上堂、僧問ふ、「三通鼓罷んで、四衆筵に臨む、學人上來、請ふ師提唱せよ。」師云く、「秋雲秋水共に悠々。」僧云く、「恁麼なれば則ち群生恩に霑ひ去らん。」師云く、「何人か不恁麼なる。」僧云く、「趙州、一庵主を訪うて云く、『有り麼、有り麼。』主、拳頭を竪起す。州云く、『水淺うして是れ舟を泊する處にあらず、』意旨如何。」師云く、「㊃鵝王乳を擇ぶ、元鴨の類にあらず。」僧云く、「州又一庵主を訪うて云く、『有り麼、有り麼。』主、拳頭を竪起す、州便ち禮拜讃嘆す、如何が委悉せん。」師云く、「一手は擡、一手は搦。」僧云く、「問答已に一般、甚としてか一人を肯ひ一人を肯はざる。」師云く、「兩頭を離却して會取せよ。」僧云く、「若し人ありて、有り麼有り麼と問はゞ、未審し和尚如何が祇對せん。」師云く、「劈脊に便ち打たん。」僧便ち禮拜す。

師乃ち擧す、「僧、百丈に問ふ、『如何なるか是れ奇特の事。』丈云く、『㊄獨坐大雄峯』と。百丈和尚善く來機に應す。是なることは則ち是なり、崇福は卽ち然らず、若し人ありて、如何なるか是れ奇特の事と問はば、只だ他に向つて道はん、主山は高く、案山は低しと。」

上堂、「鐘は鐘鳴をなし、鼓は鼓響をなす。十分現成の處は、我が衲僧家に還す。然も是の如くなり

㊂虎の庶文に、繪解はいらぬ。
㊃鵝王乳を擇ぶ。正法念所經六十四に曰く、譬へば水乳同じく一器に置くが如し、鵝王之を飲めば只だ乳汁を飲み、其の水は猶ほ存す、其の形は似たれども鴨と同じからず。」
㊄獨坐大雄峯。天上天下唯我獨尊と承斷した處。

と雖も、甚によつてか㊅鉢盂口天に向ふや。若し也た知り得て分曉ならば、長連床上の喫粥喫飯に一任す。」

㊆東福開山聖一和尚の忌日の陞座、「㊇關を摩竭に掩ひ、身を藏して影を露す。口を毗耶に杜ぢ、耳を掩ふて鈴を偸む。爾より西天の四七、東土の二三、虎を承け響を接し、一人は一人に傳へ、㊈濫觴止まらず、天に滔るに至る。玆によつて我が日本國洛陽東山東福開山聖一和尚、事已むを獲ず、出で來つて宗乘を播揚すること四十餘年、正按傍提、橫該竪抹、千變萬化、七縱八橫、頭々轍に合し、應用虧くるとなし。一切の有情無情を度し盡し、驀忽に時節到來翻身し去る。電影追ひ難く、佛祖も知らず、然も是の如くなりと雖も、未だ是れ東福老漢、眞實行履の處にあらず。且く道へ、如何なるか是れ眞實行履の處。」良久して云く、「㊉日面佛月面佛。」

復た擧す、「巖頭、德山に問ふ、『從上の諸聖、甚麼の處に向つてか去る。』山云く、『㊋作麼、作麼』と。覿面當機疾く、當機覿面に提ぐ。頭便ち禮拜す。㊌燒磚打着す連底の凍、只だ東福開山老師の如きんば、遷化の後四十九日、畢竟甚れのところに向つてか去る。」拂子を擊つて云く、「紅輪決定西

㊅鉢盂口天に向ふ。會元十九に、楊岐會禪師因に僧問ふ、「天は一を得て以て淸く、地は一を得て以て寧し、衲僧は一を得て何を作すにか堪へたる、」禪師曰く、「鉢盂口天に向ふ。」
㊇是れ弘安三年の陞座なり。崇福は隨乘房湛慧の創瀝にして聖一國師に開堂演法せしむる處、故に七七忌日の拈香あるなり、蓋し聖一國師は此の年十月十七日に示寂ぜらる。
㊈關を摩竭に掩ふ。西域記に、「昔如來摩竭陀國に於て、初めて正覺を成す、梵王七寶堂を建て、帝釋七寶座を建て、佛其の上に坐し、七日中に思惟す云々。」
㊉濫觴。孔子家語に「江は岷山に出づ、其の始め觴を濫ぶべし、江津に至るに及べば、航舫にあらずんば以て渉るべか

に沈み去る、白雲舊によつて青山を覆ふ。」

上堂、「衲僧の用處、水の地を行くが如く、東行西流、可不可なく。七穿八穴、是不是なし。諸天尋覓するに路なく、魔外潛に覷へども見えず。何が故ぞ是の如くなる。達磨識らず、六祖會せず。」

三月旦上堂、僧問ふ、「三月初一、花は紅に柳は綠なり、現成の公案、如何が商確せん。」師云く、「春日遲々春光美なり。」僧云く、「㊁靈雲曾て道ふ、『桃花を一見せしよりして後、直に而今に至るまで更に疑はず』と、那裡か是れ他不疑の處。」師云く、「桃花舊によつて春風に笑む。」僧云く、「已に是れ不疑、玄沙甚によつてか道ふ、㊄敢保す老兄の未徹在と。」師云く、「㊅一家事あれば百家忙はし。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「一莖草上に瓊樓玉殿を現じ、一微塵裡に大法輪を轉ず。法法皆宗、頭々是れ令、一切處に成就し、一切處に建立す。只だ者箇の力に憑る。且く道へ、者箇は是れ甚麼ぞ。」拄杖を拈じて卓一下して、「噁、幾乎ど㊆諱に觸る。」

解夏小參、「結するときは則ち盡大地一時に結して、針劄不入、水瀉げども着かず、解するときは則ち徧法界一時に解し、他の風吹き又日炙るに任す。翠岩の眉毛在不在、雲門の關字常に現前す。㊇蠟人氷、鵝護雪、總に是れ一邊に拈放す。黑色の拄杖又摩挲し、鉢囊鞋袋重ねて挑起して、㊈一家は一家の事に管せず、各自に疆を守り界を保す。然も是の如くなりと雖も、九十日中、且く道へ、甚麼邊の事をか明かにす。前三三後三三。」

復た㊉洞山和尙、示衆に云ふ、兄弟家初秋夏末の公案を擧して、拈じて云く、「洞山老漢、一條の大路を豁開す、只だ要す盡大地の人共に行かんことを。然も是の如くなりと雖も、且く道へ、路頭什麼の處にか在る。㊋脚下を看よ。」

上堂、「大野涼風颯々、長天疎雨濛々、祖師の㊌心印、衲僧の巴鼻、一時に漏泄す。古より今より人の遮藏するなし。崇福是れ不肖なりと雖も、試みに爲に遮藏す看よ。」袖を以て拂子を掩ふて云く、「噁、千眼大悲覷れども見えず、三賢十聖那ぞ能く知らん。」

佛殿釋迦安座上堂、「一會靈山、儼然未散、今古に凌跨し、虛空に逼塞す。盡大地の人㊍仰望すれども及ばず、森羅萬象總に下風にあり。而今面目現

㊀日面佛月面佛。新樣のしたゝかな上堂は、穴のぞきも出來るものでない、南泉、長沙、楊岐、黃龍、廬堂の面を見るやうな。

㊁作麼作麼。なんじや、なんじやと。

㊂燒磚打着す蓮底の凍。眞赤に燒けた瓦を氷の中へ打ち込んだ、師匠も弟子もびくともせぬ、岩頭の拜は上霄漢に通り、下黃泉に徹して居る。

㊃靈雲。桃花を見て悟道す、その頌に曰く、「三十年來劍客を尋ぬ、幾回か葉落ち又枝を抽く、桃花を一見せしよりして後、直に如今に至つて更に疑はず」と、誠に立派な白狀なり。

㊄敢保。たしかにうけあふと云ふこと。

㊅一家事あれば。女學生が一人殺されると、京大阪中が大騷ぎよ。

㊆諱に觸る。陛下の諱に觸れると、舌を拔かれる、南無三寶、ふみすべらうとした。

㊇蠟人氷鵝護雪。蠟細工の人形が浮べる氷水、鵝鴨の護持せる雪塊と云ふことか、本苑の解分明ならず、鵝護雪は蘇城の故事かとも疑はる。

㊈一家は一家の事に管せず。おれの處は他人の本件に携りなし。

㊉洞山。類集十四に、洞山价禪師衆に示して曰く、「初秋夏末兄弟、東に去り西に去る、直に須らく萬里無寸草の處に向つて去り始めて得べし。」又曰く、「只だ萬里無寸草の處の如きんば作麼生か去らん。」

㊋脚下を看よ。堀やら、陷穽にはまるな。

㊌心印。額の眞中、打ち込む燒

在、坐ながら寰中を鎮す。仰ぎ冀はくは、法輪常に轉じ、應用無窮ならんことを。」

上堂、「㋐俱胝指頭を竪起し、㋑魯祖人を見て面壁す。㋒冷地に看來れば、早く是れ便を着けず。所以に崇福、緣に遇ひ境に觸れて、分に隨ひ㋓養を知る。」

冬至小參、「天平かに地平かに、日上り月下り、陰剝して陽主となり、否極まりて泰來る、自然に時あり節あり。端なく從上㋔沒般次の漢、㋕陳年の菓卓を羅列し、爛臭の布裩を提起す。一錯百錯、錯而今に到る、未だ免れず一年一度人の唇齒に掛くることを。崇福今夜、忍俊不禁、別に一條の活路子を開き、汝諸人をして㋖太平象なきことを管取せしめん。」拄杖を拈じて卓すること一下して云く、「直に得たり、崇福山頂枯木花を開き、太宰府裡和氣靄然たることを。君子小人各〻其の宜しきを得、正恁麼の時、親切の一句作麼生。」良久して云く、「一氣言はず㋗有象を含む、萬靈何れの處にか無私を謝せん。」

復た潙山、仰山に問ふ、㋘仲冬嚴寒の公案を擧して、師拈じて云く、「潙

印。

㋐仰望すれども及ばず。仰げば彌々高しと。

㋑俱胝。天龍和尚一指を竪てて俱胝に示す、胝當下に大悟す、是れより學者の參問するあれば、唯だ一指を擧し、別に繩唱なし、將に順寂せんとするとき、衆に謂つて曰く、「吾れ天龍一指頭の禪を得て、一生受用不盡」と、言ひ訖つて滅を示す。（會元四）

㋒魯祖。池州魯祖山寶雲禪師、時常僧の來るを見れば、便ち面壁す。

㋓冷地に看來。かた影から寫ふなり、丸で人を寄せつけぬ。

㋔差を知る。はちを知るから、ちゞを知り、ちゞを知るからばゞを知る。

㋕沒般次。分けの分からぬを云ふ。

㋖陳年の菓卓。潙山冬夜の因緣、

仰父子、互に相熱謾す、爭奈せん身を藏して影を露すことを。且く道へ、㋙那裡か是れ他の影を露す處、具眼の者は辨取せよ。」

次の日上堂、「光陰箭の似く、日月流るゝが如し。㋚事は眼前より過ぎ、覺えず老の頭に臨むことを。寒暑に干らず世緣に涉らず、如何が信を通せん。一冬二冬、叉手當胸。」

上堂、僧問ふ、「㋛佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべしと、未審し是れ何の時節ぞ。」師云く、「一等に是れ恁麼の時節。」進んで云く、「如何なるか是れ佛性の義。」師云く、「頭々上に明かに、物々上に現ず。」進んで云く、「趙州云く、『有佛の處住することを得ず、無佛の處急に走過す。三千里外人に逢ふて錯つて擧すること莫れ』と、此の意如何。」師云く、「早く是れ錯つて擧し了れり。」進んで云く、「僧云く、『恁麼なるときは則ち去らざるなり』と、又如何。」師云く、「也た是れ伶利の漢。」進んで云く、「州云く、『㋜摘楊花、摘楊花』と、如何が委悉せん。」師云く、「蘇魯蘇魯。」進んで云く、「恁麼なるときは則ち昔日の趙州、今日の和尚。」師云く、「還つて東壁に胡蘆を掛くることを知るや。」僧無語、便ち禮拜す。

彌奥布裩、皆者の故事。

㋙太平象なし。天下大いに亂れしとき、何れの時か太平を得んと嘆きしに、或人答へて曰く、「太平象なし」と。

㋚有象。柳は綠、花は紅、無私、平等大慈の恩澤。

㋛仲冬。潙山上堂云く、「仲冬嚴寒年々の事、暑運推移の事如何。」仰山進前叉手して立つ、山云く、「我れ誠に知る、汝が此の話に答へ得ざることを。」（會元九）

㋙那裡か是れ他の影を露す處。裡の化けた大入道は、石地藏の影なり。

㋚事は眼前より過ぐ。見る中にさつさと過ぎ去る。

㋛佛性云々。涅槃經の文、時節因緣、春が來れば花咲き、秋が來れば葉墜つ。

㋜摘楊花々々々。おさらば、おさらばなり。離別の語なり。

師乃ち云く、「山は是れ山、水は是れ水、草は本天下同じ。山は是れ山ならず、水は是れ水ならず、桑を指して柳を罵る。也た是れ尋常、也た是れ尋常。只だ一塵未だ起らず、一漏未だ發せざる以前の消息の如きんば、甚麼の處に向つてか得來らん。」拂子を擊つこと一下して云く、「諸人若し會得せば、㋟晝錦還鄉、其れ如し未だ然らずんば、㋠鳳林吒之。」

維那・知客・典座を謝する上堂、槌を鳴し鉢を展べ、鼓を擊つて上堂、「照用あり用あり、賓あり主あり、有漏の筏羅、無漏の木杓、頭々轍に合し、應用虧くることなし。然も是の如くなりと雖も、柄欄は我が手裡にあり。」驀に拄杖を拈じて卓一下して云く、「㋡要且つ大家力を着けよ。」

臘八上堂、「正命を全提せば、佛祖も命を乞ふ、直饒ひ釋迦老子、雪山に端坐すること六載、臘月八夜に逗到して、明星現ずる時、忽然として悟り去るも、猶ほ未だ放過せざることあり。何が故ぞ。」拂子を擊つて云く、「我が王庫の內、是の如きの刀なし。」

歲節小參、「年窮まり歲盡き、㋢牛頭沒し馬頭回る。臘盡き春來り、㋣驢井を覷ひ、井驢を覷ふ。文殊維摩は手を撒して歸去し、拾得寒山は掌を撫して大笑す。是れ新年頭の佛法にあらず、亦舊歲の因緣にあらず。這裡に到つて、銅頭鐵額の漢も、也た背を揷むの處なし、畢竟如何が信を通せん。」禪床を拍つて云く、「㋤東村の王老夜燒錢。」

歲旦上堂、「昨夜舊年を送り、今朝新歲を迎ふ。㋥現量の法門、活祖師の意、若し也た身を橫へて擔荷し得去らば、自然に春風和氣。然らずんば、」拂子を擊つて云く、「又是れ㋦從頭に起さん。」

元宵雪に因つて上堂、「㋧瑞を三五の節に開いて上元に届る、在處に燒燈し、以て上帝に享す。崇福例に隨つて也た一燈を點ず。所以に道ふ、一燈點出す百千燈、燈々相續すと。忽ち人あつて出で來つて道はん、燈々相續は卽ち且く置く、雪千山を覆ふ、甚によつてか孤峯白からざる。只だ他に向つて道はん、㋨我見燈明佛、本光瑞如此。」

三月半上堂、僧問ふ、「祖令當行、十方坐斷、正恁麼の時、請ふ師祝聖せよ。」師云く、「雲淨うして日月正し。」僧云く、「雪峯、衆に示して云く、『盡大地是れ解脫門、手を把つて拽けども入らず、』此の意如何。」師云く、「㋩甚麼の處にかある。」僧云く、「爭奈せん門外にあることを。」師云く、「㋪甚麼を喚んでか門となす。」僧云く、

㋟蘇魯蘇魯。陀羅尼なり。
㋠晝錦還鄉。錦の衣を着けて晝の日中に故鄉に還る。
㋠鳳林吒之。蘇軾は學問自慢で あつたが、東坡が此の四字を示したら、うんとつまつた。
㋡要且云々。是れは「且つ大家の力を着けんことを要す」と讀むべきなれども、古來「要且つ」と讀み、「大家力を着けよ」と讀む習慣あり、臨濟錄に多し。
㋢牛頭沒し馬頭回る。俗語解に「間に髮を容れざるなり、」牛馬に用なし、あちらに引込むと、こちらにつんでる。
㋣驢井を覷ひ云々。會元十三、曹山章に、强上座に問ふ、「佛の眞法身は猶ほ虛空の如し、物に應じて形を現ず、水中の月の如しと、作麼生か、この應ずる底の道理を說かん、」曰く、「驢の井を覷ふが如し、」曰く、「井の驢を覷ふが如し。」曰

云く、「道ふことは甚だ道ひ得たり、祇だ八成を道ひ得たり。」曰く、「和尙又如何。」山云く、「井の驢を覷ふが如し。」驢の井を窺ふは、有功用、井の驢を窺ふは、無功用。
㋤東村の王老云々。東隣りの權兵衞が、紙錢を燒いて、先祖の祭をする。
㋥現量。ありのまゝと云ふが如し。
㋦從頭。いろはのいの字。
㋧瑞。豐年の瑞、三五の節は正月十五日、上元は十五日の夜。
㋨我見燈明佛。法華經序品の語、雪と燈をはらつた。
㋩甚麼の處にかある。貴樣は全體どこに居る。
㋪甚麼を喚んでか門となす。そちが目には門があるか。

「甚としてか肯て入らざる。」師云く、「獨り入るを得ず。」僧無語、師云く、「果然果然。」又僧あり問ふ、「臨濟一日衆に示して云く、『有る時は奪人不奪境、有る時は奪境不奪人、有る時は人境兩俱奪、有る時は人境俱不奪』と、是れ何の章句ぞ。」師云く、「四句を離却して會取せよ。」僧云く、「如何なるか是れ奪人不奪境。」師云く、「目前に闍梨なし。」僧云く、「如何なるか是れ奪境不奪人。」師云く、「面を仰いで天を見ず、頭を低れて地を見ず。」僧云く、「如何なるか是れ人境兩俱奪。」師云く、「花散じて鳥來らず。」僧云く、「如何なるか是れ人境俱不奪。」師云く、「天は是れ天、人は是れ人。」僧云く、「畢竟如何。」師云く、「天の高きも蓋ひ盡さず。」僧云く、「猿子を抱いて青嶂の後に歸り、鳥花を啣んで碧巖の前に落つ。者箇は是れ ㊀夾山の境、如何なるか是れ崇福の境。」師云く、「雲山蒼々、澗水潺々たり。」僧云く、「如何なるか是れ境中の人。」師云く、「㊁天外に出頭して看よ。」僧、禮拜す。

乃ち云く、「日暖かに風和ぎ、春色晩に向とす。處々桃花開いて錦に似たり、靈雲の見處今猶ほ在り。知らず諸人、疑ふや疑はずや、徹すや徹せずや。相識天下に滿つ、知心能く幾人ぞ。」

四月旦上堂、僧問ふ、「猿子を抱いて青嶂の後に歸り、鳥花を啣んで碧巖の前に落つ。者箇は是れ夾山の境、如何なるか是れ橫嶽の境。」師云く、「雲は嶺頭にあつて閑不徹、水は澗下に流れて太忙生。」僧云く、「如何なるか是れ境中の人。」師云く、「㊂屋頭の青山青更に青。」僧云く、「未審し、人と境と相去ること多少ぞ。」師云く、「高く眼を着けて看よ。」僧云く、「只だ ㊃趙州の如きんば、曾て到るも曾て到らざるも、一等に他をして茶を喫し去らしむ。意甚の處にかある。」師云く、「喫茶の者方に知る。」僧云く、「學人卽今此間に到る、和尙何の施設かある。」師云く、「齋時飯を喫し去れ。」僧云く、「人を成ずるものは少く、人を敗するものは多し。」師云く、「恩を知つては方に恩を報ずることを解す。」僧便ち禮拜す。

乃ち云く、「一言に道ひ盡せば、㊄佛祖の與に師となる、一言に道ひ盡さずんば、人天の與に師となる。且く道へ、那の一言ぞ。滿地の殘紅春色去り、潑天の張綠夏初めて來る。」

端午上堂、「五月五は ㊅天中の節、時淸く道泰かに、門安く戶靜なり。㊆張天師・李道士、土を呪し符を書することを要せず、何ぞ必ずしも更に善財の藥を採り、文殊の藥を用ひることを擧せん。崇福門下、自然に太平路を得。何が故ぞ。」良久して、「㊇皇天親なし、惟れ德是れ輔く。」

中夏上堂、「九夏半を過ぐ、見成の公案、諸人若し會得せば、事として辨

㊀夾山。船子和尙に嗣法す。
㊁天外に出頭して看よ。大燈國師の歌に、「雲よりも上なるそらに出でぬれば、雨の降る夜も月をこそみれ。」
㊂屋頭の青山云々。主人と青山と賓山と主人と二つはない。
㊃趙州。會元四、趙州の章に、師新到に問ふ、「曾て此間に到るや、」曰く、「曾て到る。」師云く、「喫茶去。」又僧に問ふ、僧曰く、「曾て到らず。」師云く、「喫茶去。」後に院主問ふ、「何として曾て到るも喫茶去、曾て到らざるも也た喫茶去と云ふや。」師院主と召す、院主應諾す、師云く、「喫茶去。」
㊄佛祖。人天の師となる。臨濟錄に出づ。
㊅天中節。「五月五日の午の刻を天中の節となす」と提要錄に出づ。
㊆張天師。端午に張天師の像を畫いて以て賣り、又泥塑の張天師を作り、艾を以て顏となし、蒜を以て拳となし、門上に置く、是れ支那端午の俗習、張天師は後漢の趙道陵なり、符は厄除のお守なり。
㊇皇天親なし云々。書經蔡仲の命に、「皇天親なし、是れ德是

せざるなし。長連床上に喫粥喫飯することを妨げず、其れ脱し未だ然らずんば、更に那の㋑一半の有る在り。」

解夏小參、「金風拂々たり、秋色澄々たり。蛩は幽砌に吟じ、蟬は高樹に鳴く。全く靈山の家風を彰し、潛に少林の密旨を通ず。若し是れ眼裡に珠あり、皮下に血あらば、朝遊夕處、只だ現成を領じ、左之右之、了に異解なし。一念萬年、萬年一念、日々是れ九夏、時々是れ三秋、更に甚の㋺克期取證、法制周圓とか說かん。總に是れ風を生じ草を起す。正恁麼の時、親切の一句、作麼生か道はん。」良久して云く、「雕弓已に掛けて狼煙息み、萬里の歌謠太平を賀す。」

次の日上堂、「㋩祖師意百草頭、㋥衲僧眼拄杖頭、爭か如かん崇福が這裡、布袋の結頭を打開し、東去も也た得、西去も也た得。㋭風流ならざる處也た風流。」

中秋上堂、「見成の公案、更に他說なし。八月十五、中秋の令節、㋬寒山子太だ饒舌、饒舌することを休めよ、長安夜々家々の月。」

重陽上堂、「重陽只だ是れ九月九、若し佛法の要妙を說かば、㋮特地の干戈、或は黃花白醪を賞せれ輔く、民心常なし、慨れ惠に是れ懷づく。」

㋑一半。まだ殘りの半分がある。
㋺克期取證。圓覺經に「若し道場を建てば、まさに期限をたつべし、長期百二十日、中期百日、下期八十日」
㋩祖師意百艸頭。西來の端的、百草頭上に活躍す。
㋥衲僧眼拄杖頭。衲僧家の一隻眼は拄杖頭に放光す。
㋭風流ならざる處也た風流。嬾は出でうせ、おら臥てくらす。
㋬寒山子。我が心秋月に似たり。
㋮特地干戈。花見の席のはたしあひ。

ば、俗氣除かず。何に況んや茫々として蝓を涉り、高きに登るをや。何ぞ曾て自家の活路を踏着せん。且く道へ、如何なるか是れ自家の活路、是れ佛殿前僧堂後なることなきや。」良久して云く、「不識。」

上堂、「我れ本此の希求することあるに心なし、天より降下し、地より湧出す。風は虎に從ひ、雲は龍に從ふ。甚によつてか此の如くなる。」拄杖を卓して云く、「㋯物は有主に歸す。」

上堂、「見成の公案、迥かに商量を絕し、渾崙の句子、未だ擧せざるに全く彰る。直に得たり、崇福口を開くの處なきことを。諸人合に作麼生。噁、切に忌む、妄に消息を通ずることを。」

㋐聖一國師第三年の爲に陞座、「威音那畔の一着子、古に亘り今に亘り、天に輝き地を鑑む。若し這裡に向つて承當し得去らば、不報の恩を報ずるに堪へたり。其れ如し未だ然らずんば、更に第二義門に向つて、箇の消息を露し去らん。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「二千年前、摩竭陀國に於て、親しく此の令を行ず。」又卓一下して云く、「二千年後、日本國中に於て、全く此の令を提げて、一絲毫許りを移さず。崇福久しく此の要を默し、速說を務めず。今東福開山聖一和尙遷化の後、第三年の忌辰に當り、此に嗣法の小師龍華長老、崇福をして宗乘を擧揚せしむるに臨み、敢て囊藏被蓋せず。直に得たり、重々に說破し去ることを。」拄杖を拈じて又卓一下して云く、「正當恁麼の時、聖一老師、甚麼の處にあつてか此の事を證

㋯物は有主に歸す。主心が大事なり、主心なければ明き屋も同然、狐狸が入りかはる。
㋐聖一國師の三周忌は、弘安五年十月十七日に相當す、大應國師、時に四十八歲、崇福入院より九年目なり、元寇の翌年に相當す。

明す。」拄杖を拈げて云く、「紅日門に當つて照し、清風匝地に寒じ。」

復た擧す、神鼎諲和尚、因に首山の忌日上堂云く、「山僧、先師を離れしより來、所願の未だ滿たざるあり。先師を離るゝこと較早うして、始終相隨はず、今日更に哭一聲せんと擬欲す。知らず大衆、許容すや否や。若し哭せば俗に異ならず、若し哭せずんば、者の敬何にかある。且く道へ、哭するが卽ち是か、哭せざるが卽ち是か。」衆、無對。乃ち云く、「蒼天蒼天。」師拈じて云く、「神鼎和尚、謂つべし、是れ恩を知つて方に恩を報ずることを解すと。衆無對、蒼天の中更に寃苦を加ふ。今日龍華長老、先師の忌日に於て、大齋會を設け、大佛事を作し、報恩已に畢る。且く道へ、古人と是れ同か是れ別か。」良久して云く、「九九元來八十一。」

三月半上堂、僧問ふ、「摩尼珠人識らず、如來藏は則ち問はず、如何なるか是れ摩尼珠。」師云く、「天を照し地を照して光燄々〜。」僧云く、「學人只だ一顆の珠を索む、和尚一㋺拷栳を傾出す。」師云く、「一肩に擔取し去れ。」僧云く、「只だ牛頭未だ四祖に見えざる時の如きんば、百鳥甚としてか花を啣んで獻ず。」師云く、「㋩彩は鯢家に奔る。」僧云く、「見えて後、甚としてか花を啣んで獻せざる。」師云く、「落花枝に上らず。」僧云く、「見と未見とは則ち且く置く、牛頭卽今甚麼の處にかある。」師云く、「當面に薦取せよ。」僧云く、「㋥楊德意によらずんば、爭か馬相如を識らん。」師云く、「更に須らく子細にして初めて得べし。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「春色晩に向として、綠暗く紅稀なり。滿地の落花風掃ひ盡し、黃鶯啼いて綠楊の陰にあり。」

㋺栳。柳行李なり。

㋩彩は鯢家に奔る。鯢は鱔鯢の鯢、小說に「ぢさむさき」を鱔鯢と云ふ、賽と彩と通ずるか、賽の目は賢い男へは行かぬ、馬鹿の方へ奔ると。

㋥楊德意。史記に司馬相如子虛の賦を作る、同鄕の楊德意、上に侍して之を誦す、帝云く、「朕恨むらくは此の人と時を同じうせざることを、」德意曰く、「臣が里人司馬相如自ら言ふ、此の賦を作ると、」帝大いに喜び、召拜して郎となす。

結夏小參、「山靑く水綠に、花笑ひ鳥啼く、一々㋻觀體全眞、箇々當陽に漏泄す。所以に崇福尋常、聲前句後に向つて、人家の男女を鼓弄することを欲せず。何に況んや三月安居、九旬禁足をや。網底の遊魚に異ならず、什麼の快活の處かあらん。當頭に坐斷して、別に生涯を立つるも、也た是れ風を生じ草を起す。總に不與麼ならば、未だ常情を出でず。且く道へ、畢竟如何が卽ち是ならん。」拂子を擊つて云く、「㋼碧落を衝開す松千尺、紅塵を截斷す水一溪。」

㋻觀體。見えたまゝ、當陽は正面なり。

㋼碧落を衝開す松千尺。泉谷の百拙和尚が寶藏寺の門に聯を掛けようと思ふて、さる學者に相談せられしに、篤と考へて見ましようと、二月三月たちて、此の語を得、喜んで泉谷に斷けつけしに、ちやんと此の語が聯に成つて掲げてあつたと云ふ逸話がある。

復た擧す、僧、睦州に問ふ、「一言に道ひ盡す時如何。」州云く、「㋽老僧汝が鉢囊裡にあり。」師拈じて云く、「睦州老兒、這の僧に一問せられて、直に得たり、心肝を露出することを。崇福は則ち然らず、忽ち人あつて一言に道ひ盡す時如何と問はゞ、低々地に他に向つて道はん、㋾且緩々と。」

㋽老僧汝が鉢囊裡にあり。えぐい語なりと。

㋾且緩々。これも少しやんわりやつてくれ。

次の日上堂、拄杖を拈じて卓一下して云く、「諸佛此に於て大法輪を轉す。」又卓一下して云く、「諸佛此に於て結制安居、克期取證。且く道へ、什麼の法をか取證す。」又卓一下して云く、「是れ這箇の法なること莫しや。」良久して云く、「不是、不是。」

結夏小參、僧問ふ、「烏兎馳するが如く、聖制已に臨む。節に應ずるの一句、願はくは擧揚を聽かん。」師云く、「薰風自南來、殿閣生微凉。」僧云く、「如何なるか是れ圓覺伽藍。」師云く、「㋜青山流水。」僧云く、「如何なるか是れ平等性智。」師云く、「鵲噪鴉鳴。」僧云く、「畢竟如何が安居せん。」師云く、「頭上漫々、脚下漫々。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「世界未だ分れず、形名未だ兆さゞるとき、誰か是れ釋迦、誰か是れ彌勒、如何が安居し、如何が禁足せん。㋭一向に恁麼にし去らば、土曠く人稀にして相逢ふもの少なり。世界纔かに分れ形名已に兆さば、釋迦は自ら釋迦、彌勒は自ら彌勒、青山流水、明月白雲、頂門上、脚跟底、總に是れ圓覺伽藍、平等性智にあらざることなし。與麼の告報、未だ常情を出でず、向上全提の一句、如何が委悉せん。」拄杖を卓すること一下して、㋟千峯の勢は嶽邊に到つて止まり、萬派の聲は海上に歸して消す。」

㋜青山流水。叡山加茂川、皆圓覺伽藍なり、鵲噪鴉鳴、柱は琴、嶽居は横、皆平等性智なり。

㋭一向に恁麼にし去る。大圓鏡の眞たゞ中に坐斷する。

㋟千峯の勢。白山、立山も富士に出合ふては頭は上らぬ、早瀨の信濃川、天龍川も海へ落ちては音沙汰は無いぞ。

擧す、僧、溈山に問ふ、「如何なるか是れ道。」溈云く、「無心是れ道。」僧云く、「學人不會。」溈云く、「不會底を會取せよ。」僧云く、「如何なるか是れ不會底。」溈云く、「只だ是れ爾、是れ別人にあらず。」師拈じて云く、「溈山恁麼に老婆心切なり、爭奈せん者の僧肯て承當せざることを。今夜還つて承當し得る底ありや、崇福猶ほ說のあるあり。何が故ぞ。無心猶ほ一重の㋡關を隔つ。」

次の日堂上、僧問ふ、「一峯雲片々、雙澗水潺々、是れ二千年前の消息なることなからんや。」師云く、「㋩認着せば依前として還つて不是。」僧云く、「衲僧家、尋常氣宇王の如し、甚によつてか今朝者裡に坐在して、無繩自縛なる。」師云く、「㋬火を覓めては煙に和して得。」僧云く、「與麼なるときは則ち龍、水を得る時意氣を添へ、虎、山に逢ふ處威獰を長す。」師云く、「靈利の漢。」僧云く、「記得す、㋮古者の道く、『護生は須らく是れ殺すべし、殺し盡して始めて安居、箇中の意を會得せば、㋯鐵船水上に浮ぶ』と、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「恁麼の人方に恁麼の事を知る。」僧云く、「如何なるか是れ護生は須らく是れ殺すべき。」師云く、「上に佛祖なく、下己躬を絕す。」僧云く、「如何なるか是れ殺し盡して始めて安居。」師云く、「外に一物あるを見ず。」僧云く、「如何なるか是れ箇中の意。」師云く、「佛祖も知らず。」僧云く、「鐵船水上に浮ぶ、又如何。」師云く、「輕きこと鴻毛の如く、重きこと山の如し。」僧云く、「者箇は則ち且く置く、和尙別に結制

㋡關。關所、此の蘆一重が儘ならぬ。

㋩認着。既に合點せば還八刻。

㋬火を覓めて煙に和して得。無繩自縛も外の物で無い。

㋮古者。龐居士の偈なり。

㋯鐵船水上に浮ぶ。印龐の二重目の富士の山。

底の一句あることなしや。」師云く、「西天令嚴なり。」僧禮拜す。又僧問ふ、「四月江天雨霽れ晴れ、青山萬朶雙眉に上る。袈裟眼裡に重ねて屑を添ふ、九旬禁足事如何。」師云く、「㋐處々原に逢ふ。」僧云く、「只だ大千を總べて一伽藍となし、古今を促めて一期限となし、四聖六凡を驅つて此の網子に入るが如きんば、還つて網を漏るゝ底ありや。」師云く、「網を漏るゝ底なし。」僧云く、「西天に㋑蠟人を以て驗となすは則ち問はず、㋒東土鐵彈を以て驗となす意旨、如何。」師云く、「園圃縫罅なし。」僧云く、「蠟人鐵彈、相去ること多少ぞ。」師云く、「西天東土㋓路迢々。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「袈裟僧家三月安居、九旬禁足、虎の山に靠るが如く、龍の水を得るに似たり。甚によつてか是の如くなる。」拂子を擊つて云く、「㋔水は竹邊より流出して冷かに、風は花裡より過ぎ來つて香し。」

書記の秉拂を謝する上堂、僧問ふ、「諸佛行不到の處、如何が說かん。」師云く、「㋕一歩は是れ一歩。」僧云く、「行說俱に到る、是れ何人の分上の事ぞ。」師云く、「天外に出頭して看よ。」僧云く、「記得す、乾峯、衆に示して云く、『一を擧して二を擧することを得ざれ、一着を放過すれば第二に落在す』と、意旨如何。」師云く、「松は本直く、棘は本曲れり。」僧云く、「雲門、衆を出でて云く、『昨日人あり、天台より來る、又南嶽に行き去る』と、如何が委悉せん。」師云く、「知音知つて後、更に誰か知る。」僧云く、「峯云く、『典座來日普請するを得ず』と、畢竟如何。」師云く、「問あり答あり。」僧云く、「恁麼ならば、則ち㋖碑文白字を刊り、道に當つて青松を種う。」師云く、「好箇の一句。」又僧あり、問ふ、「時節因緣は則ち問はず、如何なるか是れ向上宗乘の事。」師云く、「須彌山。」僧云く、「恁麼ならば則ち佛祖も身を退くに分あり。」師云く、「但だ佛祖のみにあらず。」僧云く、「記得す、龐居士、馬祖に問ふ、『本分を昧まさざるの人、請ふ師高く眼を着けよ。』祖直上に覷る、此の意如何。」師云く、「目前分明。」僧云く、「士云く、『一種の沒絃琴、唯だ師彈じ得て妙なり、』祖直下に覷ると、又如何。」師云く、「讃嘆するに分あり。」僧云く、「㋗路は桃源に入つて深うして更に深し。」僧云く、「者箇は則ち且く置く、如何なるか是れ和尙爲人の處。」師云く、「還つて腦門の重きを覺ゆるや。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「通天路あり、㋘夜行を許さず、㋙大道人無し、明に投じて須らく到るべし。且く道へ、甚によつてか是の如くなる。一字劃を着けず、八字兩ノなし。」

㋐處々原に逢ふ。柳絲花紅、皆是れ別のものでない。
㋑蠟人。蠟を以て人形を製する、其の人清淨なれば蠟色亦清淨、其の人汙濁なれば蠟人亦汙濁なり。一說に蠟は臘なり、法臘を以て人の高下を定む。
㋒東土鐵彈。會元十二に、僧長慶惠稜遷文慧禪師に問ふ、「四天蠟人を以て驗となす、未審し、此間何を以て驗となす、」師曰く、「鐵彈子、」僧曰く、「意旨如何、」師曰く、「大底は大、小底は小。」
㋓路迢々。十萬八千里。
㋔水は竹邊云々。大應國師に逢ふと、盲が目をあき、聾が聽えると云ふことなり。
㋕一歩は是れ一歩。錢金のことでは無い、きびきび歩みませい。
㋖碑文白字を刊る云々。白い者へ白をほれば、何んだが知れぬ、大道の眞中へ松を植ゑて、道ふさざするといふ意。
㋗路は桃源に入つて云々。居士と馬祖の出合は深くして深しと。
㋘夜行を許さず。少しも憂りけやら、嗜があつてはならぬ。
㋙大道無人。京極や銀座には人一人もなし。

解夏小參、「横岳一峯青し、黯々として以て長時に現前す。雙彌泉水の聲、潺々として日夜常に流る。諸人此に於て結制安居、朝遊夕處、飽味を觀るに足れり。意、玄に停まらす、㋚眼、戸に掛けす、今は則ち三期、滿を告げて、聖制周圓、箇々天を頂き地を履む。人々鼻直眼横、内修する所なく、外證する所なし。然らば則ち只だ㋛田を開き粟を種ゑ、晝は飡し夜は寢ぬることを知る。且く道へ、㋓文殊三處に夏を度る、又作麽生。」良久して云く、「㋐意氣ある時は意氣を添へ、風流ならざる處却つて風流。」

復た洞山萬里無寸草のところに去るの公案を擧して、師拈じて云く、「洞山恁麽に人に指示す、覺えず全身草に入る。石霜只だ洞山に相見せんことを要す、未だ免れず同じく草裡に在ることを。崇福は則ち然らず、初秋夏末、兄弟東に去り西に去り、各自に途中㋒善爲せよ。」

次の日上堂、「布袋頭結して、大地行蹤を絶す、布袋頭開いて徧界活路を通す。且く道へ、結ぶ底是か、開く底是か。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「西風一陣來、落落兩三片。」

重陽上堂、拄杖を拈起して云く、「我れ若し拈起すれば、汝未だ拈起せ

㋚眼戸に掛けす。眼を戸口にぶらさげて、けろりかんとして居ぬ、遊びたがる者は戸口に目がつく。

㋛田を開き粟を種ゑ云々。非を堀つて飲み、田を耕して食ふ、帝力何ぞ我にあらんや。

㋓文殊三處に夏を度る。類聚十四解結門に曰く、世尊因に自恣の日、文殊、三處に夏を過し來つて靈山に至る、迦葉問うて曰く、「仁者今夏何の處に安居せし」文殊曰く、「一月は祇園精舍にあり、一月は童子學堂にあり、一月は婬房酒肆にあり、」迦葉云く、「何ぞ此の不如法の處に住するを得たる、」遂に乃ち佛に白して、文殊を擯ぜんと欲す、佛の云く、「意に隨へ、」迦葉乃ち白槌して、纔に槌を拈すれば、乃ち百千萬億の文殊を見る、迦葉

ざる時に向つて道理をなす、我れ若し未だ拈起せずんば、汝拈起するところに向つて主宰となる、大衆還つて會すや。」拄杖を卓して云く、「菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る。」

開爐上堂、「堆々坐して寒爐を擁し、片々頻に落葉を燒く。誰か管せん㋑無賓主の話、甚の三界唯心とか說かん。但だ些子の火種を得ること在り、自然に暖氣春よりも勝れり。」

上堂、㋔現前を得んと要せば、順逆を存することなかれ。祖師恁麽に道ふ、塗轍なき中翻つて途轍を成す、且く道へ、順時逆時、寒時熱時、何の時か現前せざらん。然も是の如くなりと雖も、如何なるか是れ現前底の道理。」良久して云く、「開眼も也た着、合眼も也た着。」

浴佛上堂、「淨法界身、本出沒なし、知らず今日更に那箇の佛をか浴する。諸人若し也た會得せば、親しく釋迦老子を見ん。其れ脱し未だ然らずんば、崇福下座、㋕頂門上に一杓の惡水を潑ぎ去らん。諸人急に眼を着けて看よ。」

結夏小參、「岳峰峭峻にして其の頂を窮め難く、戒岸池深うして其の源を測ることなし。若し也た其の源を測り得ば、四大海水、只だ一滴に在り。若し是れ其の頂を窮め得ば、百億の須彌只だ一塵に在

其の神力を盡せども、槌擧ぐること能はず、世尊遂に迦葉に問ふ、「汝那箇の文殊を貶せんと擬す、」迦葉對ふるなし。

㋐意氣云々は迦葉白槌して文殊を擯ぜんとする處。風流ならざる處云々は槌子擧ぐる能はざる處。

㋑善爲。無事平安を希ふ語。

㋑無賓主の話は趙州、三界唯心は法眼。

㋔現前。信心銘の語なり。

㋕頂門上。てまへたちの頭からぶちかけてやらう、浮つかりびつくりして逃げるなよ。

り。所以に道ふ、一毫頭上に根源を識得し、十世古今、始終當念を離れず。一念萬年、萬年一念、塵劫來の事、只だ而今にあり。等しく是れ恁麼の時節、何ぞ便ち領取し去らざる。那ぞ更に三月安居、九旬禁足とか說くに堪へん。然も是の如くなりと雖も、煙を見て便ち火を知る處に會し去らば、㋓飯熟すること已に多時、其れ脫し未だ然らずんば、」拂子を擊つて云く、「㋔西天令嚴なり。」

復た擧す、臨濟、德山に侍する次、山云く、「老僧今日困す。」濟云く、「㋒寐語して什麼をかなす。」㋑山、棒を拈せんと擬す、濟、禪床を掀倒す。師拈じて云く、「若し是れ崇福ならば、當時纔かに老僧、今日困すと道ふを聞いて便ち云はん、請ふ和尙喫茶と。彼此干戈相待することを見るを免る。何が故ぞ、㋐老いては筋力を以て能となさず。」

次の日上堂、「三月安居、布袋頭結す。要津を坐斷して、聖凡路絕す。正當恁麼の時、汝等諸人、甚麼の處に向つてか氣を出す。」拄杖を卓すること一下。書記の秉拂を謝する上堂、「碧雲流水、明月淸風、㋑是れ禪ならず、是れ道ならず、是れ物ならず。且く道へ、是れ何の章句ぞ、文彩已に彰る。」

㋺端午上堂、「崇福從來、些子の靈藥を收得して、囊藏被蓋すること久し。今朝端午の節、手に信せて拈じ來りて大衆に布施す。」蓋に拄杖を拈じて衆に示して云く、「唯だ鐵を點じて金となすのみにあらず、亦乃ち凡を轉じて聖となす。佛病祖病、身病意病、一切の病悉く皆之を除く。且く道へ、是れ什麼の藥ぞ、恁麼の奇特をか得たる。」良久して云く、「神仙の秘訣、父子傳へず。」

上堂、「十五日以前は、白雲敢て白ならず、十五日以後は、青山未だ青となさず。正當十五日、㋙白雲は自ら白雲、青山は自ら青山。崇福恁麼に道ふ、還つて爲人のところありや也た無や。」良久して云く、「㋚仁者は之を見て之を仁と謂ひ、智者は之を見て之を智と謂ふ。」

解夏小參、「天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水、四月十五日も也た與麼、七月十五日も也た與麼、一絲毫許りを移易せず。然も是の如くなりと雖も、纔に擬して與麼なれば、便ち不與麼、窮すれば則ち變じ、變ずれば便ち通ず。看よ看よ、拂子乾坤大地を呑却す。正恁麼の時、天は是れ天ならず、地は是れ地ならず、山は是れ山ならず、水は是れ水ならず。若し這裡に向つて身を轉得し、氣を吐き得ば、妨げず、舊によつて天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水、拂子は是れ拂子。所以に道ふ、佛法二千年、一絲毫許りをも移さず。這箇は卽ち且く置く、只だ解制自恣底の一句の如きんば、作麼生か道はん。」良久して云く、「四海而今鏡よりも㋛淸し、行人路の與に

㋓飯熟すること。遲八刻の意。
㋔西天令嚴。夏中はきつと規矩に準ぜよ。
㋒寐語。あてなしの語ゆゑ。
㋑山棒を拈ぜんと擬す云々。象王回顧、獅子嚬呻。
㋐老いて筋力。禮記の曲禮に、「貧しきものは貨財を以て禮となさず、老いたるものは筋力を以て禮となさず。」
㋑是れ禪ならず云々。禪なり道なりと誰が云ふた。
㋺よき垂示なり。

㋙白雲は自ら白雲。悟了回來語。
㋚仁者云々。此の世界を人間がみれば淨瑠璃、餓鬼が見れば地獄。
㋛行人路云々。旅に出るに、しかめすらすな。

復た擧す、僧、雲門大師に問ふ、「初秋夏末、東に去り西に去る、前程忽ち人あつて問はば、未審し、如何が祇對せん。」門云く、「㋟大衆退後。」僧云く、「某甲什麼の過かある。」門云く、「我れに㋠九十日の飯錢を還し來れ」と。拈じて云く、「雲門大師放去收來、風の如く電の如し。然も是の如くなりと雖も、且つ㋡大人の相なし。若し人ありて崇福に問はゞ、他に向つて道はん、前三三後三三、如何と擬せんを待つて、驀口に便ち打す。」

次の日上堂、「宗師たるものは、只だ本分の事を以て人を接することを貴ぶ。崇福、一夏九旬の内、牙關を咬定して、曾て兄弟の與に本分の事を說著せず。何が故ぞ此の如くなる。人に逢ふては且つ㋙三分の話を說き、未だ全く㋚一片の心を拋つべからず。」

上堂、擧す、乳源和尙、衆に示して云く、「西來的々の大意、擧唱し易か らず。」時に僧ありて出づ、源云く、「㋛什麼の時節ぞ、出頭し來る」といつて便ち打す。師拈じて云く、「乳源老漢、㋜覿面當機、惜むべし、這の僧背て承當せざることを。且く道く、崇福が者裡、還つて人の承當得することありや。」良久して云く、「有なることは卽ち有、只だ是れ人の知るなし。」

㋟大衆退後。皆々ひつこめ、のいた〳〵。
㋠九十日の飯錢を還。不都合したなら飯代拂へ。
㋡大人の相なし。言ふや一ひやうし、眞向から斬り付けるなんて、餘りにおとなげなし。
㋙三分。十の者なら、三つ程云へ。
㋚一片の心。腹の底丸出しの處を云ふ、陳琳の魏の文帝に語るの語に、「人に逢ふては須らく三分の話を說くべし、未だ全く一片の心を拋つべからず、人長へに我れと相好からず、花長へに春と盛開するなし、昨友は今日の塵埃。」
㋛什麼の時節ぞ。丑三つの夜中に、こそ〳〵出るのは、盜人か追はぎなり。
㋜覿面當機。誠にはしこい芝居

開爐上堂、「崇福が開爐は、諸方と同じからず、寒時火に向はざるも、自然に暖氣相洽し、熱時㋝涼に乘せざるも、自ら淸風の骨に徹するあり。何が故に、是の如くなる。」拄杖を卓して云く、「㋞百丈道ふ底。」

冬至小參、「群陰剝盡す、屋頭の山色靜悄々たり。一陽復た生ず、門外の水聲鬧浩々たり。鬧浩々の處靜悄々、靜悄々の處鬧浩々たり。㋣來由あり、巴鼻なし、石笋條を抽く三兩枝、鐵樹花開いて數朶秀づ。要且つ是れ佛法の道理にあらざるなり。只だ是れ時節因緣、且く道へ、是れ什麼の時節ぞ、甚麼の因緣かある。」㋤喝一喝して云く、「曹溪門下、切に忌む㋥俗談することを。」

復た擧す、僧、多福に問ふ、「如何なるか是れ多福一叢の竹。」福云く、「一莖兩莖は斜に、三莖四莖は曲れり。」虛堂先師拈じて云く、「往々に多福を知つて㋦竹を知らず、往々に竹を知つて㋧多福を知らず。」師拈じて云く、「大凡そ衲僧家は、煙を見るのところ便ち火を知る、虛堂和尙甚に因つてか恁麼に道ふ、還つて委悉すや。鶴は㋨九皐の翥翼し難きあり、㋩馬は千里の追風を謾ずる無し。」

㋝涼に乘。木かげにもよらず、扇も使はぬ。
㋞百丈道底。百丈の道ふ體なり。
㋣來由あり巴鼻なし。わけはある、とらまへどころはない。
㋤喝一喝。ならぬ。
㋥俗談。おだれさいだれなり。
㋦竹を知らず。竹を寄せつけない。
㋧多福を知らず。多福をよせつけない。
㋨鶴は九皐。千里縱橫の九澤で飛べない。
㋩馬は千里。一瞬千里の能なくして、走ること風をも追ひ越す。
㋪叉手當胸。兩手を組んで胸にあてる。
㋫兩手に暮を摸す。摸はこするなり、二十一日は冬夜、二十二日は冬至。
㋬白衣相に拜。百姓から一足飛を打たれる。

次の日上堂、「一冬二冬、㋐叉手當胸、二十一二十二は㋑兩手に鼻を摸す。諸人若し也た會得せば、恰も㋒白衣の相に拜する如く、平生を慶快す。其れ或は未だ然らずんば、冬至寒食に到る㋓一百單五。」

㋑びに太政大臣と云ふこと。
㋓一百單五。大分時間が遠い。

崇福寺語錄上 終

太宰府萬年崇福禪寺語錄下

侍者慈禪等編

臘月旦上堂、擧す、㋑金峯、僧ありて參ず。峯云く、「吾れに一則の因緣あり、儞に擧似す、切に忌む錯つて會することを。」僧聽く勢を作す。峯云く、「早く錯り了れり。」僧拂袖して便ち出づ。峯云く、「雪上更に霜を加ふ。」師拈じて云く、「高山流水、子期能く之を聽く、是なることは則ち是なり。且く道へ、峰云く、雪上更に霜を加ふと、叉作麼生。限りなき清風來つて未だ休せず。」

上堂、「㋺言ふて足れば、終日言ふて盡く道、言ふて足らざれば終日言ふて盡く物なり。且く道へ、道と物と、是れ一か是れ二か。」良久して云く、「一冬二冬、㋩叉手當胸。」

除夜小參、「崇福山前、戒岸寺畔、一片の田地あり、古より今より、曾て變易せず。來々往々、千々萬々なるも、未だ曾て踏着せず。若し人あり、曾て踏着し得ば、脚跟下硬㊁糾々地なり。行かんと要すれば、則ち三世の諸佛、手を把つて共に行き、住まらんと要すれば、則ち歷

㋑金峯。曹山の法嗣。
㋺言ふて足る云々。莊子則陽篇に出づ。
㋩叉手當胸。寒いから手出しせぬ。
㊁糾々。三つぐりの繩か糾ふと云ふ、故に糾々は引きしまる形、詩經に「糾々たる葛屨、以て霜を履むべし」とあり。

代の祖師、眉毛厮結ぶ。森羅萬象、總に裡許にあり、清風浩々たり、明月凜々たり。臘月三十日に㋕逗到するも、也た只だ是れ恁麼。臘盡き春回るも、舊によつて前の如し。且く道へ、是れ什麼の田地ぞ。」拄杖を卓して云く、「㋺契券分明。」

復た擧す、僧、㋻谷隱の慈照禪師に問ふ、「如何なるか是れ道。」照云く、「臘月三十日。」師拈じて云く、「古人恁麼に道ふ、㋾蟲の木を禦んで偶爾として文をなすが如し。忽ち人あり、崇福に如何なるか是れ道と問はゞ、卽ち他に向つて道はん、㋿角は奏す舊年の曲、花は開く新歲の枝と。」

元宵上堂、「風蕭々〳〵、雪漫々〳〵、古佛心只だ而今、且く道へ、何を以てか驗とせん。」良久して云く、「過去燈明佛、木光瑞如此。」

佛涅槃上堂、僧問ふ、「雨淡紅を洗つて桃蕚嫩に、風淺碧を動かして柳絲輕し。如何なるか是れ瞿曇の面目。」師云く、「慈顏已に露る。」僧云く、「柰何せん、露柱㋽横に點頭することを。」師云く、「㋼將に謂へり、人の證明するなしと。」僧云く、「記得す、世尊入涅槃に臨み、文殊佛の再轉法輪を請ふ、世尊咄して云く、『文殊、吾れ四十九年世に住し、未だ曾て一字を說かず、汝吾が再轉法輪を請ふ、是れ吾れ曾て法輪を轉ずるか』と、此の意如何。」師云く、「平生の肝膽、人に向つて傾く。」僧云く、「畢竟

㋕逗到。逗は投と通ず、物の相投合するなり。
㋺契券分明。地發面に儻なし。
㋻谷隱。首山省念禪師の法嗣。
㋾蟲の木を禦。智度論に出づ、佛の言く、「善く說いて失なきは佛語に過ぐるはなし、諸の外道等、喩へ好言語あるも、蟲の木を食ふて、偶々文を成すが如きのみ。」
㋿角。ちつぱのこと。
㋽横點頭。あたまを横にふります。
㋼將に云々。證明のし手はあるまいと思ふたら、えらい知音に遇ふたと。

轉法輪か、不轉法輪か。」師云く、「兩頭を離却して看よ。」僧禮拜す。師乃ち云く、「百花競ひ發き、萬物㋾敷榮す。瞿曇滅を示して、迦葉眉を攢む。波旬の㋿失笑を引き得たり、一片の涅槃身、頭々都べて漏泄す。今に至るまで千古遮掩し難し。㋷狼藉たり年々二月の春。」

三月旦上堂、「春色晩に向として、㋮落花地に滿つ、靈山の一會、儼然未散、拈花微笑、萬古に現成す。更に何人かあつて眼流星の如くなる。」喝一喝して云く、「㋹大家這裡にあり。」

三月半上堂、「春風浩々〳〵、春雨微々、水は溪磵に滿ち、風は落花を掃ふ。好箇衲僧の巴鼻、㋸巴鼻なく來由あり、眼を眨得し來れば三千里。」擧す、僧雲門に問ふ、「如何なるか是れ淸淨法身。」門云く、「山花開いて錦に似たり、磵水湛へて藍の如し。」師拈じて云く、「韶陽老人恁麼に道ふ、是なることは卽ち是なり、諸人恁麼に㋺會せば、卽ち未だ可ならざることあり。且く道へ、㋻利害什麼の處にかある。具眼のものは試みに辨じて看よ。」

浴佛上堂、「聲前の一路、佛未だ出世せざるとき、早く是れ漏逗す。末後の一機は、佛出世の後、處

㋮敷榮。あまねく榮ゆるなり。
㋹失笑。やれ〳〵、てもまあ、目出度やとふきだす。
㋷狼藉。常樂我淨四智圓福の身が、あちらにも、こちらにも、亂暴狼藉なりと。
㋮落花地に滿つ。花は散れども散らない花がある。
㋹大家這裡にあり。皆の衆よ、こゝにある。
㋸巴鼻なく來由あり。手がかりは無いぞ、而も春風春雨あり。
㋺會。湛へて藍の如しが、淸淨法身と認めばなり。
㋻利害。長短と同じ。

處に成現す。直饒ひ恁麼に會得し去るも、釋迦老子を見んと要せば、太だ遠きことあり。何が故ぞ、豈に道ふことを見ずや、天上天下㋓唯我獨尊。」

上堂、僧問ふ、「一機一境、盡く今時に落つ。化門に涉らず、如何が信を通ぜん。」師云く、「南地の竹、北地の木。」僧云く、「露柱暗中に横に點頭す。嚏。」師云く、「更に知音のあるあり。」僧云く、「只だ馬祖陞堂、百丈捲席の如き、意何の處にかある。」師云く、「燒塼打着す㋔連底の凍。」僧云く、「祖便ち下座して方丈に歸る、又如何。」師云く、「他家自ら㋕通霄の路あり。」僧云く、「恁麼ならば則ち鯨海水を呑み盡して、珊瑚の枝を露出す。」師云く、「更に一歩を進めよ、看ん。」僧云く、「㋖糟載して往き、垂橐して歸る」と。便ち禮拜す。

師乃ち云く、「渾嵩句子、現成の公案、從上の佛祖、提撕不起、天下の衲僧、名狀し出さず。纔かに思惟に涉れば、白雲萬里。崇福今朝㋗快便逢ひがたし、分明に說破し去らん。山前麥熟すや也た未だしや。」

結夏小參、「徧法界即ち圓覺の伽藍、何の處か安居せざる。盡大地是れ衲僧の自己、阿誰か平等ならざる。況んや是れ鳥山林に啼いて世尊の密語を顯揚し、水磵下に流れて古佛の心宗を潛通す。頭々轍に合し、處々原に逢ふ。恁麼に會得せば、劍樹刀山も意に任せて遊戲し、鑊湯爐炭も入らんと要せば便ち入る。是の如く護生し、是の如く禁足し、方に始めて沙門行履の處となす。其れ如し未だ然らずんば、長連牀上、粥あり飯あり。」

㋓唯我獨尊。一は擊前、二は末後、三は唯我獨尊。
㋔連底。水底迄一枚の氷、燒け瓦が打ちぬいた。
㋕通霄の路。人の知らないぬけみち。
㋖糟載。車に一ぱい載せること、垂橐は空ちふくろをぶらさげること。
㋗快便逢ひがたし。こゝちよきたよりは、二度と得難い。

復た擧す、僧、雲門大師に問ふ、「如何なるか是れ直截の處。」門云く、「㋘主山の後。」僧云く、「師の指示を謝す。」門云く、「㋙皮袋を合取せよ。」師拈じて云く、「雲門大師、是なることは卽ち是なり、崇福は卽ち然らず、忽ち人あり、如何なるか是れ直截の一路と問はゞ、便ち云はん、法堂前と。他の師の指示を謝すと道ふを待つて、只だ他に向つて道はん、禮拜し了つて退けと。」

次の日上堂、擧す、五祖云く、「今日結夏、大衆に供養すべきなし、㋚一家宴をなして、諸人を管待せん。」遂に手を擧して云く、「羅囉招、遲囉遙、遲囉送、怪む莫れ空疎なることを。伏して惟れば珍重。」師拈じて云く、「五祖老人、好箇の家宴、只だ是れ㋛節拍全くなし。崇福今日結夏、也た是れ大衆と箇の家宴をなさん。德山の歌、雲門の曲、㋜氈拍板、無孔笛、一時に吹唱して叢林を鬧熱し、諸禪德をして貧を拔き富をなさしめん。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「一曲兩曲人の會するなし、雨過ぎて青山溪水深し。」

上堂、「五月初一、舊時の話頭を擧せず、只だ現成の公案によつて、諸人と相見せん。」驀に拄杖を拈じて卓一下して云く、「山前麥熟すや也た未だしや。」

㋘主山の後。後の山の其の又うしろ。まはり遠い答なり。
㋙皮袋を合取せよ。だまれ、やかましいと、眞向から出た。
㋚一家宴。出來合せの御馳走なり。
㋛節拍。かうした節拍と云ふ、丸で葱の樣で、ふしも打ち込みもない。
㋜氈拍板。毛氈で包んだひやうし木、鳴らぬもの。

端午上堂、「崇福尋常、禪を說かず道を說かず、麁食淡飯、分に隨つて時を過す。今朝五月五天中の節、却つて請ふ拄杖子、箇の消息を通ぜよ。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「㋐天行已に過ぐ、使者須らく知るべし。」

五月半上堂、「人々自ら一片の田地あり、四至界畔、曉然として明白、諸人若し也た一踏に踏著せば、行住坐臥、常に其の中にあり、左之右之、是不是なし。飽食安眠、未だ分外となさず、然も是の如くなりと雖も、且く道へ、其の中の事又作麼生。」拂子を擊つて云く、「薰風自南來、微涼生殿閣。」

中夏上堂、擧す、㋑梁山因に、眞園頭問ふ、「家賊防ぎ難き時如何。」山云く、「識破せば寃をなさず。」眞云く、「識破して後如何。」山云く、「無生國裡に貶向す。」眞云く、「是れ他の安身立命の處なること莫しや。」山云く、「死水、龍を藏さず。」眞云く、「如何なるか是れ活水の龍。」山云く、「波を興して浪を作さず。」眞云く、「忽然として㋒傾湫倒嶽の時如何。」山下座、扭住して云く、「老僧の袈裟角を濕却することを得ざれと。若し人あり、崇福に家賊防ぎ難き時如何と問はゞ、只だ他に向つて道はん、㋓賊に和して敗闕すと。敗闕して後如何、身を藏すに路なし。」

七月旦上堂、「暑退き涼生じ、樹凋み葉落つ、時節因緣相慢せず、林下の衲僧機用活す。崇福門庭此れより昌盛。且く道へ、何を以てか驗とせん。」拂子を擊つて云く、「秋至つて㋔鴈蘆を含む。」

解夏小參、僧問ふ、「九夏の賞勞、請ふ師言薦せよ。」師云く、「清風徧野に動き、寒鴈長天に鳴く。」僧云く、「便ち恁麼にし去る時如何。」師云く、「更に須らく子細にすべし。」僧云く、「臨濟に三句あり、如何なるか是れ第一句。」師云く、「黃葉虛庭に落つ。」僧云く、「如何なるか是れ第二句。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」僧云く、「如何なるか是れ第三句。」師云く、「無孔の鐵鎚當面に擲つ。」僧云く、「三句分明に指示を蒙る、向上の宗乘又如何。」師云く、「天の高きも蓋ひ盡さず。」僧便ち禮拜す。又僧あり、問ふ、「聖制已に圓に、秋風面に滿つ。正與麼の時、願はくは提唱を聽かん。」師云く、「秋林葉落ち、秋月戶に當る。」僧云く、「恁麼なるときは則ち意氣ある時は意氣を添へ、風流ならざるところ又風流。」師云く、「更に奇特のあるあり。」僧云く、「記得す、翠岩、衆に示して云く、『一夏兄弟の爲に東語西話す、看よ、翠岩が眉毛在りや』と、意何の處にかある。」師云く、「爛泥裡に刺あり。」僧云く、「保福云ふ、賊となる人心虛ると、如何が委悉せん。」師云く、「賊、賊を知る。」僧云く、「長慶云ふ、生也と、又如何。」師云く、「兩重の公案。」僧云く、「雲門云ふ、關と、畢竟如何。」師云く、「突出辨じ難し。」僧云く、「只だ三古德の翠岩の門風を扶起するが如きんば、還つて優劣ありや也た無や。」師云く、「途を同じうして轍を同じうせず。」僧云く、「當時若し翠岩の看よ眉毛在りやと道ふを見ば、未審し

㋐天行云々。天帝の行令は、最早すんだ、行令の使者は知つてゐる。

㋑梁山。緣觀禪師は、同安の志の法嗣、會元の十四に載す。

㋒傾湫倒嶽。堤が切れ山拔けする時、濁を作さずを、蹈んで云ふ。

㋓賊に和して敗闕。コンヨツシヨンを取られて、公事はまけたり。

㋔鴈含蘆。淮南子脩務に曰く、「鴈は風に順つて以て氣力を養ひ、蘆を含んで翔り、以て繒弋に備ふ」と、是れは翼を射られるを恐れて、蘆を含んで的を亂すなり。

和尙如何が祇對せん。」師云く、「覿面相瞞す。」僧云く、「學人今夜小出大遇」と。便ち禮拜す。

師乃ち云く、「九旬制內、崇福の一衆、㋐眼戶に掛けず、意、玄に停まらず、水邊林下に、懷を忘じ照を絕し、石上松根に、月に嘯き雲に眠る。今は則ち法歲周圓、三期滿を告ぐ。行かんと要すれば便ち行き、坐せんと要すれば則ち坐し、當處を離れず、物外に逍遙す。拄杖頭邊淸風を起し、草鞋跟底乾坤闊し、甚の萬里無寸草とか說かん。㋖彩は鯢家に奔る、笑ふに堪へたり門を出づれば是れ草、㋗隨婁搜の漢、粟を種ゑ畬を開き、晝飡夜寢、又是れ靈龜尾を拽く。崇福門下は總に不興廢、畢竟如何が行履せん。」拄杖を卓すること一下して、「大鵬一擧九萬里。」

擧す、雲門、僧に問ふ、「何の處よりか來る。」僧云く、「岳山より來る。」門云く、「吾れ曾て人の與に㋙葛藤せず。」乃ち云く、「來れ。」僧近前す。門云く、「去れ。」師拈じて云く、「雲門大師、人をして近前退後せしむ、早く是れ葛藤し了れり。崇福は卽ち然らず、僧に問ふ、何の處よりか來る、僧の岳山より來ると云ふを待つて、劈脊に便ち打たん。何が故ぞ、吾れ曾て人の與に葛藤せず。」

次の日上堂、僧問ふ、「禁足安居は、㋚困魚濼に止まる、尅期取證は、鈍鳥蘆に栖む。今朝解制、如何が轉身せん。」師云く、「徧界活路通ず。」僧云く、「恁麼なれば則ち靑山綠水草鞋底、明月淸風拄杖頭。」師云く、「前面、虎に逢着せば、道ふことなかれ、㋛翁々道ひ來らずと。」僧云く、「記得す、洞山、衆に示して云く、『兄弟、初秋夏末、直に須らく萬里無寸草のところに向つて去るべし』と、意旨如何。」師云く、「也た是れ草裡の漢。」僧云く、「石霜の云ふ、『何ぞ門を出づれば是れ草と道はざる』と、又如何。」師云く、「知らず脚下草還つて生ずることを。」僧云く、「山聞いて云く、『大唐國裡、能く㋝幾人かある』と、如何が理會せん。」師云く、「千里同風。」僧云く、「只だ萬里無寸草の處の如きんば、如何が去らん。」師云く、「急に㋞走過せよ。」僧云く、「前程忽ち人ありて、和尙に今夏の事を問着せば、未審し如何が祇對せん。」師云く、「前三三後三三。」僧便ち禮拜す。又僧あり、問ふ、「㋟袖頭に領を打し、腋下に襟を剜ることは則ち問はず、獨脫底の句、願はくは擧揚を聽かん。」師云く、「㋠脚頭脚底淸風を起す。」僧云く、「尙ほ㋡廉纖に涉ることあり。」師云く、「㋢韓獹、塊を逐ふ。」僧云く、「只だ自恣斯に嗣み、㋣法堂新に開くが如きんば、還つて新底の佛法ありや也た無や。」師云く、「燈籠露柱に鳥蘆に栖む。今朝解制、如何が轉身せん。」師云く、「徧界活路通ず。」僧云く、「恁麼なれば則ち靑山綠水草鞋底、明月淸風拄杖頭。」師云く、「前面、虎に逢着せば、道ふことなかれ、㋛翁々道ひ來らずと。」僧云く、「記得す、洞山、衆に示して云く、『兄弟、初秋夏末、直に須らく萬里無寸草のところに向つて去るべし』と、意旨如何。」師云く、「也た是れ草裡の漢。」僧云く、「石霜の云ふ、『何ぞ門を出づれば是れ草と道はざる』と、又如何。」師云く、「知らず脚下草還つて生ずることを。」僧云く、「山聞いて云く、『大唐國裡、能く㋝幾人かある』と、如何が理會せん。」師云く、「千里同風。」僧云く、「只だ萬里無寸草の處の如きんば、如何が去らん。」師云く、「急に㋞走過せよ。」僧云く、「前程忽ち人ありて、和尙に今夏の事を問着せば、未審し如何が祇對せん。」師云く、「前三三後三三。」僧便ち禮拜す。又僧あり、問ふ、「㋟袖頭に領を打し、腋下に襟を剜ることは則ち問はず、獨脫底の句、願はくは擧揚を聽かん。」師云く、「㋠脚頭脚底淸風を起す。」僧云く、「尙ほ㋡廉纖に涉ることあり。」師云く、「㋢韓獹、塊を逐ふ。」僧云く、「只だ自恣斯に嗣み、㋣法堂新に開くが如きんば、還つて新底の佛法ありや也た無や。」師云く、「燈籠露柱に

㋐眼戶に掛けず云々。是れは禪制中の樣子、兩眼に見ゆれども外はどうじやと戶口をながめ、式は玄々の窠窟に停滯する事は、許さぬと把住の方に見るべし。

㋖彩は鯢家に奔る。賽の目はへたばくちの方へ飛ぶものなり。

㋗隨婁搜。是非の辨別なくして他人の語に從ふを云ふ、僕人看場と同じ。

㋙葛藤せず。まはりくどいことはせぬ。

㋚困魚濼に止まる、鈍鳥蘆に栖む。濼は道路の凹みにたまつた雨水、澤水の魚、蘆葦中の鈍鳥は、一時の小廉を得るも眞個の安樂の大海深林にあらず。

㋛翁々道ひ來らず。此の樣な惡ろしい目に遇ふた時、爺さん氣がきかない、なぜ言ふて呉れなんだなどと、泣言云ふな。

㋝幾人かある。大鼓を敲いて搜しても一人もない。

㋞走過。馬鹿め、ぐづつくな。

㋟袖頭云々。會元十一に鎭州萬壽和尙、僧問ふ「如何なるか是れ趣葉上行の衣、」壽云く、「鶴は飛ぶ千點の雪、雲は鎖す萬重の關、」問ふ、「何如なるか是れ丈六の金身、」壽云く、「袖頭に領を打し、腋下に襟を剜る」に基く、袖口にえりを付けたり、腋の下へあなをほがしたりすることは問はぬと。

㋠脚頭脚底。大慧開山投機の頌に、「金色の頭陀手を拱して還る、脚頭脚底淸風を起す」の句あり、蓋し大應の錄を愛讀せ

掛く。」僧云く、「記得す、臨濟、衆に示して云く、『赤肉團上に一無位の眞人あり、常に諸人の面門にあつて出入す、未だ證據せざるものは、看よ看よ』と、此の意如何。」師云く、「覿面當機更に ㋑回互なし。」僧云く、「時に僧あり、出でて問ふ、『如何なるか是れ無位の眞人。』濟擒住して云く、『道へ道へ。』如何が領略せん。」師云く、「迅雷耳を掩ふに及ばず。」僧云く、「僧擬議す、濟托開して云く、『無位の眞人、是れ何の乾屎橛ぞ』と、又如何。」師云く、「㋺曲直を藏せず。」僧云く、「㋩岩頭聞き得て覺えず舌を吐く、是れ何の心行ぞ。」師云く、「知音知つて後、更に誰か知る。」僧云く、「雪峯の云ふ、『臨濟大いに ㋥白拈賊に似たり』と、還つて臨濟を識得すや也た未だしや。」師云く、「早く雪峯に覷破せらる。」僧云く、「畢竟如何なるか是れ無位の眞人。」師云く、「高く眼を著けて看よ。」僧云く、「與麼なれば則ち粉骨碎身も、未だ酬ゆるに足らず。」師云く、「恩を知つては方に恩を報ずることを解す。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「暑退き涼生じ、樹凋み葉落つ。林下の衲僧、㋭全機獨脫なり。露柱燈籠、箇々心空、狸奴白拈、一々眼活す。然も是の如くなりと雖も、崇福が拄杖子、猶ほ未だ點頭せざることあり。何が故ぞ。㋬楚鷄は是れ丹山の鳳にあらず。」

八月旦、大風の後上堂、「大機を顯し大用を發し、門に入つては便ち棒し、門に入つては便ち喝す、恰も疾風卒雨、傾湫倒嶽の如し。然も是の如くなりと雖も、㋮冷地に看來れば、力を費すこと少からず。所以に崇福順時保愛、坐ながらに太平を致す。且く道へ、甚によつてか是の如くなる。」良久して云く、「豈に道ふことを見ずや、㋯萬般の施設、常には如かず。」

中秋上堂、「靈山に月を指し、曹溪に月を話る。當頭未だ光影を出でず、南泉拂袖して歸り去るも、猶ほ第二に落つ、㋰長沙一踏に踏倒するも、一半を用ひ得たり。且く道へ、如何なるか是れ那一半。」拂子を以て圓相を打して云く、「㋱團々として海嶠を離れ、漸々として雲衢を出づ。」

九月旦上堂、「風颯々、雨瀟々、黃葉は地に滿ち、塞鴈は空に橫ふ。是れ佛法の要妙にあらずや、只だ是れ時節因緣。且く道へ、今日は是れ什麼の時節ぞ、什麼の因緣かある。大衆若し也た會得せば、妨げず㋲途中受用なることを。其れ如し然らずんば、㋳世諦流布に一任す。」

㋑回互。折れまがりなし。
㋺曲直を藏せず。曲つたものは正直を寄せつけない。
㋩岩頭聞き得て云々。是れは臨濟の沒後に、其の弟子常上座より此の話を聞きしなり。
㋥白拈賊。ひろとんび、きんちやくきりなり。
㋭全機獨脫。帶もふんどしも脫いだ。
㋬楚鷄と丹鳳とは姿は似ても、貴賤霄壤、昔し楚鷄を丹鳳と間違へて、王に獻ぜしものあり。
㋮冷地。局外と同じ、局外者はられしより成りしか。
㋰廉纖。圓悟心要に出づ、むしやむしやすることを云ふ、廉も纖も微細の義あれば、こまごましき有樣のところ。
㋱狸奴は後犬の名。
㋲法堂新に開く。崇福住持中に法堂の新築ありしと見ゆ。
㋳同互。折れまがりなし。
㋴團々として海嶠を離れ云云。是れは如滿の詩なり、如滿此の句を得て喜び極つて狂し、鐘を亂打す。雲衢は半天に橫はる雲なり。
㋵途中受用。右往左往に菩薩の頭顱冷かなり。
㋶萬般の施設常に如かず。種々樣多の心遣ひよりは、尋常普通のあしらひがまし。
㋷長沙一踏。長沙の岑和尙と仰山の寂と月見をせし時、仰山が誰にもこれがあるに、見事用ふること出來ないと云ふたら、岑がいや丁度お前を儒ふて用ひさせて見ようと云ふ、すると仰山がお前はどう用ふるなどとやり返すと、岑は卽座に仰山の胸元へこぶしをあてゝ倒るゝと、胸元をいやと云ふ程蹈みつけた、仰山は覺えずきやつと叫んで、丸で猛虎の樣な和尙じやと云つた。
㋸團々として海嶠を離れ云云。是れは如滿の詩なり、如滿此の句を得て喜び極つて狂し、鐘を亂打す。雲衢は半天に橫はる雲なり。
㋹途中受用。右往左往に菩薩の

開爐上堂、「大地を爐となし、須彌を炭となす。祟福が家風、未だ是れ寂寥ならず、且つ火邊に去つて坐せよ。㋝切に忌む更に商量することを。」喝一喝す。

冬至小參、僧問ふ、「葭管㋐灰を飛ばし、繡紋線を添ふ。時節に涉らず、請ふ師提唱せよ。」師云く、「天は東南に高く、地は西北に傾く。」僧云く、「潙山、仰山に問ふ、『仲冬嚴寒年々の事、晷運推し移る事若何。』仰山叉手進前して立つ、意旨如何。」師云く、「亂に㋑懐袋を呈す。」僧云く、「潙云ふ、『情に知る、汝が此の話に答へ得ざることを』と、叉如何。」師云く、「爛泥裡に刺あり。」僧云く、「潙山又此の話を以て香嚴に問ふ、嚴云く、『某㋒偏に此の話に答へ得ん。』潙云く、『汝如何。』嚴叉手進前して立つ、如何が領略せん。」師云く、「同坑に異土なし。」僧云く、「潙云ふ、『幸に寂子が不會に遇ふ』と、畢竟如何。」師云く、「㋓眼東南を觀て意西北にあり。」僧云く、「和尚今夜徹底老婆。」師云く、「更に一歩を進めよ看ん。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「㋔群陰消盡、葭灰未だ飛ばず、玄機を未兆以前に戢め、一氣潛通、律管先づ知り、㋕冥運を即化の際に藏す。洞山菓卓を掇退し、皓行を行ずるなり。

㋐世諺流布。日出度や悲しや、欲しや、憎くや也。

㋝切に忌む商量。おれの處は、斯く迄、富貴自在なり、其れによそは、飯が白いの、黒いの、作務が荒いの、樂なのと、言つてゐる。

㋑灰を飛ばし線を添ふるは、一陽來復の端的なり。

㋒懐袋。大根のほしや、芋の皮や飯の殘りを入れた乞食袋、ぢゞむさき袋をかつぎだした。

㋓偏に。的確にと云ふ程ならん。

㋓眼東南意西北。仰山にひいた弓が香嚴に中つた。

㋔群陰云々。時節を云ふ、洞山菓卓云々は、引喩、所以に祟福云々は本意。

㋕冥運。冥々裡の推移、即化、晷運推移すれば化其の中にあり。

老の布裩を洗はず。潙仰父子、進前退後、總に這裡を出でず。所以に祟福只だ現定によつて、時に應じて㋖祐を納れ、他の否極まつて泰來るに還す。自然に時あり節あり。何が故ぞ、是の如くなる。」良久して、「皇天親なし、㋗惟だ德是れ輔く。」

擧す、㋘荷澤、思和尚の處に到る、思問うて云く、「何の處よりか來る。」澤云く、「曹溪。」思云く、「曹溪の意旨如何。」澤㋙身を振つて立つ。思云く、「猶ほ瓦礫を帶ぶることあり。」澤云く、「㋚此間黄金あることなしや。」思云く、「縱ひあるも甚の處に向つてか著けん。」師拈じて云く、「二老の相見、賓主歷然、然りと雖も、未だ勦絶することを得ざることあり。若し是れ祟福ならば、他の此間、黄金あることなしやと問ふを待つて、便ち㋛一拳を與へん。何が故ぞ。黄金自ら黄金の價あり、終に沙に和して人に賣與せず。」

次の日上堂、僧問ふ、「朔風地を拂つて黄葉を捲き、門外の千峯寒色凛たり、正與麼の時、願はくは擧揚を聽かん。」師云く、「冬日熙々として門に當つて照す。」僧云く、「恁麼なれば則ち岸柳未だ眼を開かざるに、庭梅先づ花を發く。」師云く、「㋜劫外春風動く。」僧云く、「佛眼の遠禪師、寒夜孤坐、爐を撥つて火一豆許りを見て云く、『深々に撥つて些子あり』と、遽かに几上の傳燈録を閲し、

㋖祐を納れ。無量の福壽海を享受す。

㋗惟德。正人君子も斬り取り劫盜も、其れ〳〵御助けがある。

㋘荷澤神會禪師が、青原行思禪師の處にやつて來た。

㋙身を振つて立つ。奮や秩をふりはらつて、によつきりとつつ立つた。

㋚此間黄金。此の貧乏寺には小判はありはすまい。

㋛一拳。こがれか、しろがれか、はたあちがれか。

㋜劫外。億劫以前なり。

㋐破竈墮の因緣に到つて、忽然として大悟す。還つて端的なりや也た無や。」師云く、「貧兒の寶を得るが如し。」僧云く、「圜悟因つて㋑青林搬土の話を以て之を驗す、乃ち云く、『且喜すらくは、遠兄便ち活人の句あり』と、又如何。」師云く、「知音知つて後更に誰か知る。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「天寒人寒、㋒大家者裡にあり、便ち與麼に去る、都べて㋓縫罅なし。崇福今朝、略一線路を通じ去らん、普天の和氣を管取せよ。」拂子を擊つて云く、「直に得たり、一陽來復、人々東より西に過ぎ、西より東に過ぎ、箇々拜する底は拜し、賀する底は賀す。何が故ぞ是の如くなる。㋔一氣言はず有象を含む、萬靈何の處にか無私を謝せん。」

上堂、乾峯、衆に示し、「㋕一を擧して二を擧するを得ざれ、一着を放過せば、第二に落在す。」雲門、衆を出でて云く、「昨日人あり、天台より來る、今日却つて南嶽に往き去る。」峯云く、「典座、來日普請することを得ざれ。」師拈じて云く、「氈拍板、無孔笛、㋖狹路に相逢うて音青霄に徹す。崇福也た是れ一を擧し去らん。今朝臘月初一日、諸人㋗切に忌む、道着することを。來日は初二日。」

㋐破竈墮の因緣。是れは破竈墮和尚が、竈に引導を授けて、破碎せし因緣なり、引導の語に、杖を以て竈を敲くこと三下して曰く、「嘘、此の竈、泥瓦合成、聖何より來り、靈何より起る、恁麼に物命を烹宰すや、」又打つこと三下す、竈爲に破碎すと、蓋し佛照は此の偈にて自己を證明せしなり。

㋑青林搬土の話。是れは竈を敲くこと三下より、柴三束を運ばしむる因緣を持ち出して驗せしなり、鐵輪天子寶中の旨にて、納僧もまうとりつめられて身はたらきが出來ぬ、さあどうじやと切り掛りし時帝釋宮中より敕書を放つと、佛眼が答へた故、圜悟も遠兄活人の句ありと賞せしなり。

㋒大家證裡にあり。皆々こゝに綿こまつて居る。

除夜小參、「只だ這の一枝の拂、眞に櫻欄鐵作骨、古より今に至るまで、未だ嘗て變易せず。年窮より歲盡くるも也た是れ㋘烏散々地、臘去り春廻るも舊によつて前の如し。然も是の如くなりと雖も、拈起せば也た天廻り地轉す、放下せば也た風行き草偃す。不拈不放なるも㋙時に應じて祐を納れ、坐ながら太平を致す。且く道へ、這の一枝の拂子、箇の什麼に憑つてか恁麼に奇特なることを得たる。」良久して云く、「只だ㋚老胡の知を許して、老胡の會を許さず。」

復た擧す、僧、谷隱の慈照禪師に問ふ、「如何なるか是れ道。」照云く、「臘月三十日。」師拈じて云く、「好し大乘、一片の皓玉瑕なし、切に忌む㋛動著することを。何が故ぞ、文を雕つて德を喪す。」

正、旦上堂、「大機圓應、大用無方、天の普蓋の如く、地の普擎に似たり。風は虎に從ひ、雲は龍に從ふ。且く道へ、甚に因つてか是の如くなる。」拄杖を拈じて一下して云く、「㋜彩は齪家に奔る。」

上堂、「古者の道ふ、法輪未だ轉せず、食輪先づ轉ず。崇福が這裡、法輪常に轉じて、食轉未だ轉せず。忽ち若し兩輪共に轉ずる時如何。」驀に拄杖

㋖狹路。ねひめ、かけめ、丸で鋼鐵で張り詰めた樣で、微塵も漏きぬ。

㋗一氣言はず。冬至は陰の極なり、陰極の處、既に白々紅々廿四番の春を含む。

㋘一を擧して云々。お茶と云ふたら、まう飯は持つて來るな、一寸ゆるめると、直きに增長する。

㋙狹路に云々。幡隨院長兵衛と水野十郎左衛門が、露地で出逢ふて、頭をコツツコするとがんと云ふ音が天まで響いた。

㋚切忌道着。內證じやぞ、えいか、人に話すな。

㋛烏散々地。烏は拂子の毛の黑きを云ふならん、散々はばらばらするをいふ。

㋜時に應じて祐を納る。其の時節時節に應じて福德圓滿を授與し、天下の泰平を挽回す。

を拈じて連卓兩下して云く、「三世の諸佛立地に聽き、森羅萬象齊しく鼓舞す。」

三月旦上堂、「孟春は猶ほ寒く、孟夏は漸く熱す。諸人自ら合に時節を知るべし、山僧が口を開いて說くを待つことなかれ、黃鶯枝上に分明に說く。且く道へ、㊀箇の什麼をか說く。」喝一喝す。

三月半上堂、「桃花は紅に梨花は白し、靈雲の悟處尙ほ依然たり、玄沙の未徹人の識るなし。人の識るなし、吾をして特地に㊁南泉を憶はしむ。」

結夏小參、「天際日上り月下り、檻前山靑く水綠に、南斗は七北斗は八、牛頭沒し馬頭回る。幸に自ら恬然として一事なし、二千年前の大覺世尊事已むことを獲ず、模を起し樣を畫し、喚んで圓覺伽藍平等性智となす。若しくは聖若しくは凡、情と無情と、總に裡許にあり、菩薩乘に據り寂滅行を修し、玆より後代の兒孫をして、箇々㊂梅林を望んで渴を止めしむるを致す。一人の獨脫底の漢あることを見ず、崇福が拂子、今夜忍俊不禁にして、出で來つて一擊に靈山多年の窠窟を擊碎す。」拂子を以て擊一擊して云く、「一擊に擊碎し了れり。又甚麼の處に向つてか禁足護生せん。」良久して云く、「切に忌む㊃囚に停めて智を長ずることを。」

復た擧す、藥山和尙坐する次で、僧あり來り參ず、問うて云く、「和尙兀々地に箇の什麼をか思量す。」山云く、「不思量底を思量す。」僧云く、「不思量底、如何が思量せん。」山云く、「非思量。」師拈じて云く、「藥山老漢、一等に是れ老婆心切なり、然も是の如くなりと雖も、大衆還つて不思量底を知るや。」良久して云く、「㊄分明に記取せよ。」

次の日上堂、「靈源不昧なれば、萬法を擧して全く彰れ、妙用繁興せば、法界を稱げて齊しく起る。一步を行ずれば瞿曇の眼睛を踏著し、一指を擧すれば達磨の鼻孔に築著す。恁麼の禁足ぞ、㊅眼を眨すれば便ち一夏を過す。其れ或は未だ然らずんば、㊆西天令嚴なり。」

歲主の秉拂並に齋を謝する上堂、「一句子あり、百味具足す。從上の佛祖も提持し到らず、一大藏敎も該載し及ばず、今日㊇快便逢ひ難し。崇福手に信せて拈出して、諸人に供養せん。」驀に拄杖を拈じて擲下して云く、「麁飡は㊈飽き易く、細嚼は飢ゑ難し。」

解夏小參、「橫岳峰頂、峭峻巍々、千古萬古到るもの還つて稀なり。霧捲し雲屯し、日炙し風吹く。

㊀老胡の知。屁撒く丈はまけてやるが、屁垂れる事はならぬと云ふ語なり。
㊁動著。けろつくな、けろつくと正月の餅宮へぬ。
㊂彩は鰹家に奔る。賽の目は、へたばくちへ往くとも、きれいな女が、醜夫に嫁すとも用ひらる。彩は綺彩なり、鰹は鰹節にて、ぢゞむさいことなり。
㊃箇の什麼をか說く。驚は法華經をば忘れはて、うら淋みしくもぎゃゝゝゝと鳴く。
㊄南泉か憶はしむ。靈雲は、桃花を一見してより、更に疑はずといつたに、大應國師は、いなした線の味が忘れられぬと。
㊅梅林か望んで渴を止む。面白き言ひ廻しなり、昔し曹操軍に臨む、兵士渴を愛ふ、操云く、「進め、近く梅林のあるあり」と、兵士皆津液を生ず。
㊆囚を停めて智を長ず。裁判官がぐづぐづして、判決を怠ると、其の內に罪人めが罪を免れる口實を考へ出す。
㊇分明に記取。忘れてしまへで無くて、覺えて置けなり。
㊈眼を眨すれば便云々。五十六億七千萬年も、唯だ是れ一刹那。
㊉西天令嚴。威儀凜々として、風をも通ぜず。
㊊快便。此の機な痛快な、道手風は容易に逢ひ難し。
㊋飽き易く飢ゑ難し。飽くもひもじいも、同じことなり、千松は腹がへつてもひもじうない。

歴代の祖師も仰望し及ばず、天下の衲僧も脚を著くること得ず。今夏九十日の内、八十餘員の禪和、同じく此に結制安居し、各自に尅期取證す。風前月下、兩々三々、林邊水際、任意に遊戯す。今は則ち法歳周圓す、且く道へ、還つて一箇半箇の親しく頂顎に到る底ありや。其れ或は未だ然らずんば、」拂子を擊つて云く、「千峯の勢は㊐岳邊に到つて止まり、萬派の聲は海上に歸して消す。」

復た擧す、僧あり仰山に到る。(山)云く、「甚麼の處よりか來る。」僧云く、「廬山より來る。」山云く、「曾て五老峯に到るや。」(僧云く、)「曾て到らず。」山云く、「㊏閣梨曾て遊山せず。」雲門大師云く、「仰山、此の語、慈悲の故に落草の譚あり。」師拈じて云く、「仰山恁麼に道ふ、當時大唐國裡能く幾人かあつて知る。雲門此の一語を著得す。殊に知らず、㊁落草の譚愈甚だしきことを。具眼のものは辨取せよ。」

次の日上堂、「結は是れ誰か結す、虛空㊅釘橛、解は是れ誰か解す、虛空剝烈。解結以前に見得して親しければ、千里萬里一條の鐵。」

重九上堂、僧問ふ、「汾陽云ふ、『㊇重陽九日菊花新なり』と、意旨如何。」師云く、「現成の公案。」僧云く、「臨濟會下、兩堂の首座、相見齊しく喝と下す時如何。」師云く、「也た㊈照あり、也た用あり。」僧云く、「僧あり、問ふ、『這の兩喝、還つて賓主ありや也た無や。』濟云く、『賓主歴然』と、又如何。」師云く、「文彩已に彰る。」僧云く、「人天衆前、伊を㊉蓋覆し得るや也た無や。」師云く、「蓋覆するに處なし。」僧云く、「甚としてか蓋覆するに處なき。」師云く、「賓主歴然。」僧便ち禮拜す。又僧問ふ、「重陽九日風光別に、處々の樓臺人を醉倒す。這般の保社に入らずんば、和尚如何が施設せん。」師云く、「天高うして萬象正し。」僧云く、「只だ步々高きに登る底の人の如きんば、還つて向上の一路を踏著すや也た無や。」師云く、「蹉過すれども也た知らず。」僧云く、「記得す、僧、古德に問ふ、『如何なるか是れ祖師西來意。』德云く、『東籬の黃菊』と、意旨如何。」師云く、「突出辨じがたし。」僧云く、「請ふ、師一枝を拈起して看よ。」師云く、「未だ拈起せざる時、全機顯露す。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「黃花は舊叢に發き、茱萸は烟紫を凝し、塞雁は長天に鳴き、蟋蟀は草底に吟ず。古佛心、祖師意、一時に漏泄す。甚に因つてか是の如くなる。」良久して云く、「㊋時節既に至る。」

虛堂和尚忌、香を拈じて、「大宋淩霄峯頂に收得して、多年囊藏被蓋す。日本崇福山中に拈じ來つて、幾廻か天を薰じ地を炙す。斤兩多きことなし、根苗異なることあり、㊌巴陵の三轉語を說くことを休めよ。只だ要す徧界

㊐岳邊。五岳なり。千峰一々五嶽にあつまり、江河の萬派、皆東海に朝す、止と消とは國師提唱の眼目。

㊁閣梨曾て遊山せず。こちらはどう、あちらはどうと、跳め廻さぬ男なり。

㊂落草譚愈甚。仰山一轍と得、雲門半轍と得たり。

㊅釘橛剝烈。釘橛は虛空の釘付け、豆腐のかすがひ、剝烈は虛空の皮むき、烈は蓋し裂の字の誤り。

㊇重陽九日。汾陽の三玄三要の拋頌に、「三玄三要事難」分、得意忘言道易親、一句明々該萬象、重陽九日菊花新。」

㊈照用。本體と作用。

㊉蓋覆。おほひつゝむの意、此の僧仄かに文彩を知る、故に此の問を發す。

㊋時節。此の時節は、佛性の義を知らんと欲ぜば、時節因緣を觀ずべしの時節なり。

㊌巴陵三轉語。岳州巴陵の顥鑒禪師、住院の後、嗣法の書を呈ぜず、只だ三轉語を以て雲門に呈す、曰く、「如何なるか是れ提婆宗、銀椀裡に雪を盛る、」「如何なるか是れ吹毛劍、珊瑚枝々撐三箭月、」「如何なるか是れ道、明眼人落井、」雲門曰く、「他後老僧が忌日に、此の三轉語を擧すれば以て恩に

香風の起らんことを。」

十月半上堂、擧す、明招の謙和尚、衆に示して云く、「這裡㋺風頭稍硬し、且く煖處に歸つて商量せん。」衆後に隨つて到る。招云く、「纔かに煖處に到つて、便ち瞌睡するを見る」と、便ち趂ひ散ず。師拈じて云く、「明招老漢、盤に和して掇出す夜明珠。惜むべし、當時一衆、眼裡に筋なく、人に隨つて上下す。大衆若し也た會得せば、一場の富貴。其れ或は未だ然らずんば、切に忌む商量することを。」

冬至小參、「六陰剝盡して、群機を未兆に戢め、一陽來復して、萬象を不言に含む。直に得たり、鐵樹花を開き、石笋條を抽くことを。君子小人、各〳〵其の宜しきを得、情と無情と同じく欣顏を展ぶ。太宰府裡、崇福山頭、和氣藹然たり。然も是の如くなりと雖も、仲冬嚴寒、暑運推移し、日南長至す。皓老の布裙は、依然として㋻赫赤、又作麼生。陰陽到らざる處、分外の好風光。」

復た擧す、「潙山、仰山に問ふ、「卽今の事を問はず、古よりの事如何。」仰山叉手進前す。潙云く、「猶ほ是れ卽今の事。」仰山叉手退後す。潙云く、「我れ汝を屈し汝我れを屈す。」師拈じて云く、「仰山進前退後す、步々古今の一路を踏着す。還つて潙山の年老いて心孤なるを知るや。汝我れを屈し我れ汝を屈す。」

次の日上堂、「㋼璿璣未だ動かず、全機獨脫、一氣言はず、萬象歷然、一切見成、了に欠少なし。所以に崇福順時保愛、坐ながら太平を致す。何が故ぞ。」拂子を擊つて云く、「陽氣發するとき㋽硬地なし。」

元宵上堂、僧問ふ、「昔日瞿曇無所得を以て燃燈の記を受く、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「虛を承け響を挫す。」僧云く、「西天の迦葉初めて燈を傳ふ、如何なるか是れ傳ふる底の燈。」師云く、「天に輝き地を鑑む。」僧云く、「迦葉已に傳ふ、㋾龍潭甚としてか吹滅すや。」師云く、「只だ要す大家の㋿暗中に行かんことを。」僧云く、「後來僧、香林に問ふ、『如何なるか是れ室內一盞の燈。』林云く、『三人龜を證して鼈となす』と、意旨如何。」師云く、「千聞は一見に如かず。」僧云く、「忽ち人あり、如何なるか是れ室內一盞の燈と問はゞ、凝。」師云く、「露柱光を放つ。」僧云く、「恁麼なれば則ち處々に光輝を發し去らん。」師云く、「果然果然。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「春日晴れ、春光美に、春蝶春風に舞ひ、春魚春水を弄す。黃鶯は枝上に語り、錦雉は溪畔に啼く。限りなきの好風景、一時に都べて漏泄す。且く道へ、是れ何の祥瑞ぞ。過去燈明佛、本光瑞如此。」

二月旦上堂、僧問ふ、「向上に全提せば、鐵壁銀山、線路を放開して、如何が相看せん。」師云く、「十分の春色江湖に滿つ。」僧云く、「便ち是れ和尚爲人の處なるとなからんや。」師云く、「儞の㋷耳朶、聰なし。」僧云く、「世尊昔日、百萬の衆前に向つて、一枝の花を拈起す、意那裡にかある。」師云く、「突出

㋺風頭稍硬。風の劍尖がするどい。
㋻赫赤。あかふんどし。
㋼璿璣玉衡は、天文をはかる器械。
㋽硬地。九冬嚴寒、大地凍つて堅きこと鐵の如し。
㋾龍潭。德山をめくらにせし和尙なり。
㋿暗中。蒲團上にあり。
㋷耳朶無聽。貴樣の耳は、からつんぼ。

辨じ難し。」僧云く、「只だ迦葉のみあつて、破顔微笑す、未審し何の道理をか見し。」師云く、「㋐赤眼撞着す火柴頭。」僧云く、「世尊乃ち云く、『吾れに正法眼藏あり、摩訶迦葉に付囑す』と、如何なるか是れ正法眼藏。」師云く、「桃花は紅に、李花は白し。」僧云く、「畢竟分付ありや分付なきや。」師云く、「㋑虛を承け響を接す。」僧云く、「只だ卽今日暖かに風和し、百花競ひ開くが如きんば、甚麼の處に向つてか世尊を見ん。」師云く、「當面に蹉過す。」僧云く、「靈山の一會、儼然として未散。」師云く、「只だ一半を見得す。」僧禮拜す。又僧ありて問ふ、「玄を談じ妙を說くは、好肉に瘡を剜る、拳を竪て喝と下すは、平地の波瀾。如何なるか是れ直截の一路。」師云く、「天高うして群象正し。」僧云く、「爭奈せん、尙ほ迂曲に涉ることを。」師云く、「㋒韓獹、塊を逐ふ。」僧云く、「恁麼なれば則ち家々の門首、長安に透る。」師云く、「脚下を看よ。」僧云く、「記得す、僧、雲門に問ふ、『如何なるか是れ淸淨法身。』門云く、『㋓花藥欄』と、意旨如何。」師云く、「㋔劈腹剜心。」僧云く、「僧問ふ、『便ち恁麼にし去るとき如何。』門云く、『金毛の獅子』と、又作麼生。」師云く、「未だ敢て相許さず。」僧云く、「今日和尙に問ふ、如何なるか是れ淸淨法身。」師云く、「雲は嶺頭にあつて閑不徹。」僧云く、「便ち恁麼にし去る時如何。」師云く、「㋕邯鄲に唐步を學ぶ。」僧云く、「者箇は則ち且く置く、如何なるか是れ㋖法身向上の事。」師云く、「水は磵下に流れて太忙生。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「敎中に道ふ、『十方佛土中、唯有一乘法』と、一花開いて天下春に、一塵起つて大地收る。大衆會すや、若し也た遲疑せば、拄杖子、重說偈言し去らん。」卓拄杖一下して云く、「㋗但だ願はくは春風の齊しく力を着け、一時に吹いて我が門に入り來らんことを。」

上堂、「結夏の後半月を過ぐ、㋘寒山子を問はず、水牯牛を論ぜず、諸人上來問訊せば、山僧合掌低頭す。照あり用あり、賓あり主あり。且く道へ、甚に因つてか此の如くなる。」良久して云く、「風は虎に從ひ、雲は龍に從ふ。」

端午上堂、「今朝端午の節、崇福禪を說かず、一枝の拂子を提起す。自然に時に應じ、㋙門安く戶靜なり。且く道へ、甚によつてか是の如くなる。拂子を擊つて云く、「東山下の左邊底。」

解夏小參、「卽心卽佛は、山靑く水綠に、非心非佛は、樹凋み葉落つ。不是心不是佛は、風颯々水冷冷、等しく是れ恁麼の時節、其の土曠く人稀なることを奈せん。今は則ち法歲周圓、㋚三期滿を告ぐ、

㋐赤眼撞着す火柴頭。赤眼は龜なり、龜がたき火に頭を打ちつけた、進むを得ずして頭を縮却するなり。

㋑虛を承け響を接す。うそを聞いて、又うそをこれまぜる。

㋒韓獹。猛犬の名。

㋓花藥欄。雪隱かくしの花の籬。

㋔劈腹剜心。腹の底をぶちまけた。

㋕邯鄲に唐步を學ぶ。邯鄲は歌舞の地なり、宋人往いてあゆみのこなしを學ぶ、遂に其の秘を得る能はず、而も亦宋國の步法をも失却す。故に向ふにとられて、足元のふらつくに喩ふ。

㋖法身向上の事。玉泉の皓に、法身邊の事、法身向上事の話あり。

㋗但願。腰に十萬貫をつけて、鶴に乘つて揚州に遊ぶと云ふ樣な語なり。

㋘寒山子水牯牛。古德雜語に曰く、「結夏已に半を過ぐ、寒山子作麼生。」又云ふ、「結夏已に半を過ぐ、水牯牛作麼生。」

㋙門安戶靜。時豐に家富み、門戶安く靜に、是れ那邊の住處ぞ。

㋚三期。長期百二十日、中期百日、下期は八十日、之を三期と云ふ、期とは相約するの義、期限を立てゝ猛く修行の精彩なつくるなり。

崇福未だ免れず言薦賞勞し去ることを。」拄杖を拈じて卓すること一下す。

復た仰山、溈山に問訊す、山云く、「一夏上來せず、下面にあつて何の所務ぞ」といふ公案を擧す。師拈じて云く、「溈仰父子、當時一夏空過せず、崇福門下の一衆、一夏都べて所務なく、山僧も亦所作なし。且く道へ、空過すとせんか、空過せずとせんか、具眼の者は試みに辨じて看よ。」

上堂、「九旬の安居今已に滿ち、林下の衲僧活路通ず。大地を踏飜して寸土なし、橫に椰棟を擔つて秋風に舞ふ。然も是の如くなりと雖も、崇福猶ほ說のあるあり。」拄杖を拈じて一畫して云く、「此に過ぎたるはなし。」

中秋上堂、「十五日以前は、風淸く月白く、十五日以後は、月白く風淸し。正當十五日、此夜一輪滿てり、淸光何の處にかなからん。」

九月旦上堂、「頭々是、物々是、塞鴈長空に過ぎ、野鹿林底に叫ぶ。屋頭の山、門前の水、一々他物にあらず、箇々自己に歸す。且く道へ、如何なるか是れ自己。」良久して云く、「㊀吾れ爾に隱すことなし。」

上堂、「如來禪、祖師意、嶺上の白雲、澗下の流水、百草頭邊、十字街裡、頭々是、物々是。何が故ぞ是の如くなる。」拄杖を卓して云く、「萬物主なきにあらず。」

衆客を謝する上堂、趙州和尙云ふ、「宗師者は、須らく本分の事を以て人を接して始めて得べし。」師云く、「諸人上來問訊す、山僧低頭合掌す。且く道へ、還つて本分の事に契得すや也た無や。」良久して

㊀吾爾に隱すなし。吾れは是れ汝、爾は是れ吾。

云く、「客は是れ主人の㊁相師。」

十月半上堂、「崇福尋常、禪を說かず、道を說かず、㊂飯に遇ふては飯を喫し、茶に遇ふては茶を喫す。時に應じて㊃祐を納れ、宜しきに隨つて施設す。諸天花を雨らすに路なく、魔外潛かに覷ふに門なし。便ち恁麼にし去るとき如何。崑崙生鐵を嚼む。」

冬至小參、僧問ふ、「陰盡き陽生じて、㊄碓觜花を開く、時節に涉らず、願はくは提唱を聽かん。」師云く、「雲淨うして日月正し。」僧云く、「松源に三轉語あり、還つて學人の咨參を許すや也た無や。」師云く、「問ひ將ち來れ。」僧云く、「大力量の人、甚によつてか脚を擡げ起さゞる。」師云く、「一步は是れ一步。」僧云く、「口を開くと甚によつてか舌頭上にあらざる。」師云く、「㊅鵶鳴鵲噪。」僧云く、「明眼の人、甚によつてか脚下の㊆紅線不斷なる。」師云く、「㊇程を貪ること太た疾し。」僧云く、「恁麼なれば則ち昔日の松源、今日の和尙。」師云く、「儞何の處に向つてか松源を見る。」僧無語。師云く、「當面に蹉過す。」僧禮拜す。又僧あり問ふ、「陰魔沮伏し、陽氣發生す、正與麼の時、請ふ師指示せよ。」師云く、「枯木花を生じ、鐵樹枝を抽んづ。」僧云く、「僧巴陵に問ふ、『祖意敎意、是れ同か是れ別か。』陵云

㊁相師。主人の人相見、長居するのも、早く立つのも、皆主人の顏色を以て決す。此處は大應のつらつきは、御客の眼玉次第と云ふ文字なり。
㊂飯茶。後語の根源。
㊃納祐施設。鬮分もとるが、御馳走もする。
㊄碓觜。石臼のはな。
㊅鵶鳴鵲噪。からすはかあ〳〵
㊆紅線不斷。結ぶの神の赤繩に結ばれて居る。
㊇程を貪る。白隱和尙も、是れはよくやられたとある、足元をよく見よ。

く、『鶏寒うして樹に上り、鴨寒うして水に下る』と、此の意如何。」師云く、「山青く水綠なり。」僧云く、「僧問ふ、『如何なるか是れ吹毛の劍。』陵云く、『珊瑚枝々月を撐著す』と、又作麼生。」師云く、「寒光凜凜、人に逼つて寒し。」僧云く、「僧問ふ、『如何なるか是れ㋕提婆宗。』陵云く、『銀椀裏に雪を盛る』と、如何が委悉せん。」師云く、「明々歷々。」僧云く、「如何なるか是れ祖意。」師云く、「少室峯前雪未だ消せず。」僧云く、「如何なるか是れ教意。」師云く、「鷲峯の山色青更に青。」僧云く、「是れ同か是れ別か。」師云く、「向上に眼を着けて看よ。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「㋖群陰剝盡して、大地平沈す。清寥々、白的々、黃梅の石女、身を藏すに處なく、少室の鐵牛、露地に安眠す。㋗一氣潛通して、萬物敷榮す。暖烘々、鬧浩々、露杜燈籠、滿面に光生じ、狸奴白牯、同じく歡顏を展ぶ。直に得たり、崇福山中和氣熏春、佛法世法一時に昌盛、何を以てか驗となす。」良久して云く、「㋙露。」

舉す、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ道。」州云く、「墻外底。」僧云く、「這箇の道を問はず。」州云く、「那箇の道をか問ふ。」僧云く、「大道。」州云く、「大道長安に透る。」師拈じて云く、「大道遮障なく、坦然として長安に透る。紛々たり路を問ふもの、憐むべし自ら㋚難を作すこ

㋕提婆宗。凡そ言句あるは皆提婆宗と馬大師言へり。

㋖群陰剝盡して。柳綠を失ひ、花紅を失ひ、聲知見聞に處なし。

㋗一氣潛通して。野老謳歌し、家々三臺に舞ふ。

㋘露。茶人は露堂々を、つゆ堂堂と讀むげな、成程露の字は其れとして、堂々がすまめで無いか、いやたう〳〵たらりと云ふは、水の落つる音なりと、何でも繪解きをするとこんなものなり、露。

㋚難を作す。關所は皆自分がこさへるものなり。

とを。大衆還つて大道を知るや、脚下を看よ。」

次の日上堂、僧問ふ、「㋛六陰剝盡して、一陽復た生ずることは則ち問はず、如何なるか是れ不遷の義。」師云く、「日は東方に出で、夜西に落つ。」僧云く、「恁麼なれば則ち㋜一冬二冬、叉手當胸」師云く、「好箇の一語。」僧云く、「兜率に三句あり、還つて咨參を許すや也た無や。」師云く、「何ぞ妨げん問ひ將ち來れ。」僧云く、「參玄は只だ見性を圖る、卽今上人の性、什麼の處にかある。」師云く、「徧界曾て藏さず。」僧云く、「已に見性を得れば生死を脫す、眼光落地の時如何が脫せん。」師云く、「甚麼を喚んでか生死となす。」僧云く、「生死を脫得すれば、須らく去處を知るべし、四大分散の時什麼の處に向つてか去る。」師云く、「山は自ら山、水は自ら水。」僧云く、「向上更に事ありや也た無や。」師云く、「有り。」僧云く、「如何なるか是れ向上の事。」師云く、「向下に薦取せよ。」又僧あり問ふ、「㋝冬至月頭なれば、被を賣つて牛を買ひ、冬至月尾なれば、牛を賣つて被を買ふと、意旨作麼生。」師云く、「見成の公案、直下に會取せよ。」僧云く、「如何なるか是れ冬來の事。」師云く、「白雪天に滿つ。」僧云く、「一番寒骨に徹するに因らずんば、爭か梅花の鼻を撲つて香しきを得ん。」師云く、「好箇の消息。」僧便ち禮拜す。

㋛六陰剝盡。周易の山地剝の上の一爻が剝落ぎされると、直に地雷復となりて、一陽下に生ず、是れ遷流の義なり。

㋜一冬二冬叉手當胸。初冬と仲冬は、寒いから手を組んで胸にあてる。

㋝冬至云々。十二月の月の初に冬至のある年は暖い、冬至が月の末に入る時は、非常に寒い、故に月の初に入る年は、蒲團を賣つて牛を買ふ、月尾に入れば牛賣つて蒲團を買ふなり。

師乃ち云く、「仲冬嚴寒、晷運推移、枯木花を開き、㊂冰河焰起る。㊃左之右之、吉にして利ならざることなし。何が故ぞ。」拄杖を卓して云く、「陽氣發する時硬地なし。」

燈節上堂、「一燈纔かに明かなれば、百千の世界、無量の國土、一時に卽ち明かなり。若しくは佛、若しくは祖、有情無情、此の光中に於て、各〻㊄自位に住し、大安樂の地を得、同じく燃燈の記を受く。且く道へ、是れ那の一燈ぞ。」

浴佛上堂、「㊀我れ今諸如來を灌沐す。見るや見るや、淨智莊嚴功德聚、突出辨じがたし。五濁の衆生、垢を離れしめ、泥裡に土塊を洗ひ、同じく如來の淨法身を證す。大家這裡にあり。崇福恁麼に說く、早く是れ一杓の惡水を將つて、諸人に潑ぎ了れり。然も是の如くなりと雖も、恩を知るものは少く、恩に負くものは多し。」

結夏上堂、「青春已に去り、朱夏初めて臨み、薰風南來、殿閣生涼、正に是れ諸佛出身の時節なり。甚の安居禁足、剋期取證とか說かん。然も是の如くなりと雖も、㊁一日作さざれば、一日食はず。」

㊂氷河焰起。川から湯氣がむらむら立つ。
㊃左之右之。立つもれるも。
㊄自位に住。自已の持前を發揮す。
㊀我今灌沐。浴佛の偈文、浴佛功德經に出づ、文に曰く、「佛像を浴するは、諸供養中に於て殊勝となす、先づ妙香を以て湯水となし、淨器の中に置き以て佛を浴し、水を下す時、願するに偈を以てすべし、偈に曰く、我今灌沐諸如來、淨智莊嚴功德聚、五濁衆生令離垢、同證如來淨法身。」今此處に抄出に係る、精しくは乘恭麵に就くべし。
㊁一日作さざれば一日食はず。自隱が片手の聲を聞くよりも兩手扣いてあきなひがましと、是れでよし。
㊅興德寺。今尙ほ存す、應組前

㊅興德寺佛殿、釋迦を安ずる陞座、「佛身無爲、觸處全眞、等しく塵刹に應じ、沙界に豁周す。無形にして現じ、㊆相々炳然たり。無聲にして說く、法々無盡。若し也た見聞に落ちずして見得して親切に、聲色に涉らずして、聞得して分明ならば、便ち知る靈山の一會、儼然として未散なることを。其れ如し未だ然らずんば、㊇三拜起き來つて、高く眼を着けて看よ。」

書記の秉拂を謝する上堂、「諸佛說不到の處、列祖提不起底、未だ口を開かざる時、文彩全く彰る。何ぞや。㊈畫前元易あり、刪後更に詩なし。」

端午上堂、「青山流水、明月白雲、頭々是れ活祖師意、人々死法の會をなすことなかれ。崇福與麼の告報、意何にかある。」拄杖を卓して云く、「五月五端午の節。」

上堂、「久雨晴れず、衲僧の㊉皮草、甚麼の處に向つてか曬暇せん。崇福今朝雲霧を畫斷して、日輪を放出し、天を照し地を照し去らん。」拄杖を以て劃一劃して云く、「雨過ぎて青山碧に、雲淨うして日月正し。」

中夏上堂、「九旬の安居、今朝半を過ぐ、數日已來、連綿たる霖雨、瞎曇の眼睛を爛却し、衲僧の鼻孔を滴破す。崇福今日、雲霧を畫斷して、晴天

㊅興德寺。今尙ほ存す、應組前住の處なれば、陞座を乞ひしものならん、筑前姪濱興德寺、大應國師自贊の像あり。
㊆相々炳然云々。八十種好三十二相の一相一相、八萬四千の諸法の一法一法。
㊇三拜云々。三拜して本位に歸り、によきりそりかへつて、眼をすゑて見よ。
㊈畫前元易あり刪後更に詩なし。此の畫前の易と云ふとは、邵康節や朱子等の八ケ間敷く說いた處である、元來宋學の日本へ傳はりしは、岐陽あたりと相場をきめて居るが、どうして、もつともつと古くから入宋する人は皆習つて歸つたものである、宋の儒者共が法喜禪悅せしは、北宋より極めて盛なり、吾輩の祖先も儒家と親しむ機會多かりしを以て皆其の學を傳へ歸られしものなり。孔子古詩三千を刪つ

白日に向ひ、諸人と相見し去らん。」拄杖を以て畫一畫して云く、「㋣相見渾べて無事、來らざれば還つて君を憶ふ。」

㋤焙經上堂、「三百餘會も、收捨し上せず、一千年後も提掇不起、岳に積み山に堆く、㋥風吹き日炎す。衲僧門下、一擊を消せず。」拂子を擊つて云く、「六月㋦松風を賣らば、人間恐らくは價なからん。」

解夏小參、「雨炎暑を洗ひ、徧界清涼、現成の公案、迥かに商量を絶す。若し這裡に向つて會し去らば、開眼合眼、是れ解脱にあらざることなし。左之右之、了に異解なし、卷舒は我れにあり、與奪誰にか憑る。然も是の如くなりと雖も、解制自恣底の一句、作麼生か道はん。」拂子を擊つて云く、「秋風梧桐を吹き、落葉兩三片。」

復た擧す、臨濟和尚、衆に示して云く、「一無位の眞人あり、汝等諸人の面門より出入す、未だ證據せざらんものは、看よ看よ。」師云く、「臨濟老漢、未だ是れ白拈賊にあらず、甚の證據未證據とか說かん。直下に㋧元物を識取せよ。何が故ぞ、㋨青氈元是れ我が家の舊物。」

中秋上堂、擧す、僧、德山に問ふ、「㋩靈山に月を指し、曹溪に月を話することは卽ち問はず、如何なるか是れ眞月。」山云く、「昨夜三更西に轉向す。」師云く、「德山恁麼に答ふ、昨夜三更大雨下る、大衆作麼生か會せん。山僧一頌あり、大衆に擧示せん、昨夜三更雨連綿、清光舊によつて山川を照す、茫々として總に明暗を逐ふ底、爭か十分㋭桂影の圓かなるを識らん。」

九月旦上堂、「雨蕭々たり、風颯々たり、黃葉虛庭に滿ち、鴻雁寥泬に鳴く。子細に㋬好し觀を生じ、西來に妙訣なく、妙訣あり。大衆分明に㋮自決せよ。」喝一喝す。

上堂、「一人眞を發し源に歸すれば、十方虛空悉く皆㋯消殞す。五祖云く、『一人眞を發すれば、十方虛空㋰築着磕着す』と。崇福は則ち然らず、一人眞を發し源に歸すれば、十方虛空只だ毫端にあり。且く道へ、故人と是れ同か是れ別か。大衆試みに辨じて看よ。」

開爐上堂、「崇福門庭、從來滴水冰生ず、今朝開爐、寒灰焰を發し、一時に暖熱す、祖意敎意、趙州無賓主の話、面前に突在す。然も是の如くなりと雖も、如何なるか是れ無賓主の話。」拂子を擊つこと一下して便ち下座。

て三百五篇となす、淘汰極めて嚴整なりしかば、刪後に取るべき詩なきなり。

㋦皮草。「みの」なり、虛堂錄に、「皮草を曬晒す」の語あり、みのをほすことなり。

㋣相見して渾べて無事。逢ふて見れば話すこともないが、離れると色々と思ひ出す、面白き境界なり。

㋤焙經上堂。一切經の土用ぼしに就いて上堂、骨折る雲納計りの集まつてあるから、物につけ事につけ上堂があつた。

㋥風吹き日炎す。是れ隨分面白き語、故に色々に用ひられてある。宋人は團扇の贊に「風吹日炎掩彩掩彩」と頌して、世の擧節する處となりしが、藏經の蠹干にもきつかりとはまつて居る。

㋦松風。此の松風に逢ふと五千四十餘卷、八十萬字は一時にすうつと消えうせる。

㋧元物。臨濟は正直で、ひるとんびでなく、證據も未證據もいらぬ、直に元の木地を見よと、之をとりぞこなふと、欲山の樣なひどい目にあはればならぬ。

㋨青氈。王羲之の息子の獻之の處へ、盜人がはいつた、其の時外の物は何も入らぬが、其の青毛氈丈けはわしの家の傳來品ゆゑ、殘して呉れと云ふた。

㋩靈山に月を指す。靈山會上の示しは月を指すが如く、曹溪の禪は月を話するが如しと、玄沙の語也。

㋭桂影。月影なり、大燈國師の歌に、「雲よりも上なるそらへ出でぬれば、雨降る夜も月をこそみれ」とあるが、玄は穴倉の底にふしたる炭俵、雨ふる夜にも月をこそみれと。

達磨忌上堂、「㋕熊耳峯前、峭峻巍々、日日清風匝地、夜々明月流輝。盡く言ふ、隻履西に歸り去ると、誰か知らん千古鎭に長く存することを。且く道へ、如何なるか是れ長く存する底の一句子。」良久して云く、「㋖衆眼瞞じがたし。」

虛堂忌拈香、「生佛未だ具はらざる以前、早く這箇あり、世界纔かに分れて、便ち見る天を熏じ地を炙することを。崇福一年一度當陽に拈出して、這の老和尚に供養す、要且つ是れ恩を報じ德に酬ゆるにあらざるなり、只だ是れ㋗水を借りて花を獻ず。」

上堂、「雪上に霜を加へ、瑞をなし祥をなす。妙應私なく、商量を用ひず。」拄杖を卓すること一下して、「千古萬古只だ是れ者れ、何ぞ必ずしも胡僧㋙勸めて舉揚せん。」

臘月半上堂、祖師の云く、「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、仁者の心㋚動く」と。巴陵拈じて云く、「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、什麼の處に向つてか著けん。」雪竇云く、「是れ風、是れ幡、甚の處にか著けん。」師拈じて云く、「二大老、途を同じうして轍を同じうせず、崇福は

㋕好生觀。よく吟味せよ。
㋖自決。けつの穴が、太いか細いか、自分に見よ、面白い上堂なり。
㋗消殞。四大海水みづ一滴も無くなる。
㋘築著磕著。こつつりこと云ふことにて、山河並に大地、全く法王身を現ずる處。
㋙熊耳峰前。夜々明月流輝、二千年後斯の如し。
㋚衆眼瞞じがたし。皆が見て居るので、手品がつかへぬ。
㋛借水獻花。水は借りもので無いけれども、花を獻ずる爲めに之を用ふ、吾々の立つもねるも行くもすわるも、皆借水獻花なり。
㋜勸めて舉揚せん。是れは大方和尙がいやがるのを、無理に上堂させたものであらう。
㋝巴陵は仁者の心動くが、いやじやから、什麼の處にか著け

然らず、是れ風、是れ幡、切に忌む㋞動著することを。何が故ぞ、㋟喉を轉ずれば諱に觸る。」

㋠知客を謝する上堂、古德云く、「一喝賓主を分ち、照用一時に行ず。」喝一喝して云く、「那箇か是れ賓、那箇か是れ主、若し也た未だ明かならずんば、賓主未だ分たず、若し也た明得し去らば、賓あり主あり照あり用あり。妨げず照用一時に行ずることを。」拂子を擲下して云く、「且く道へ、照か用か。」

元正上堂、「日暖かに風和し、花紅に柳綠なり、新年の佛法、一切成現す。崇福與麼の告報、新歲君聽得し、春風影裡に點頭す。何が故ぞ。」拄杖を卓して云く、「大機㋡圓應。」

上堂、「春山青く、春水綠に、春雨未だ晴れず、春風復た作る。春雨春風共に惡しからず、諸人若し也た會得し去らば、㋢雲門の露、㋣報慈の隔。」

佛涅槃上堂、「㋤手を以て胸を摩し當に慇懃なるべし。雙趺出示して肝心を露す、二千年遠人の見るなく、㋥花笑ひ鳥啼く二月の春。」

二月旦上堂、「日暖かに風和し、鳥啼き花笑ふ。是れ如來禪にあらず、亦西來意にあらず、且く道へ、畢竟如何。只だ㋦老胡の知を許して、老胡のんと出かけた、雪竇は又あなさがしで、あらずあらずを取り除けた、大應國師は又別に一頭地を出された。

㋞動著。さはらしやんすな。
㋟喉を轉ずれば諱に觸る。のど佛が一寸ねざるとまう諱に觸れる。
㋠知客の謝上堂故、臨濟賓主歷然の則を拈す。
㋡圓應。大應の諡號は是に原づくか。
㋢雲門の露。僧、雲門に問ふ、「父を殺し母を殺せば、佛前に懺悔す、佛を殺し、祖を殺せば、何れの處に向つてか懺悔せん、」雲門云く、「露。」
㋣報慈の隔。僧、匡化禪師に問ふ、「情生ずれば智隔たり、想變ずれば懷殊なり、唯だ情生ぜざる時の如きんば如何、」化曰く、「隔、」匡化は報慈に住す。
㋤七言四句の偈なり。

會を許さず。」

浴佛上堂、「㊀天を指し地を指し太だ端なし、語を送り言を傳へ泥裡に輥ず。謾に香湯を把つて年々洗ふ、今に至るまで千古兒孫を累はす。今日如何が爲に屈を雪がん。」拄杖を卓すること一下して下座。

結夏㋐小參、「一毫頭上に結制安居、十方虛空一時に逼塞す。若しくは聖若しくは凡、情と無情と、總に裡許にあつて逃出するに門なし。釋迦老師の影子裡に墮在す。規矩に拘はらず、練行を修せず、酒肆茶坊、禁足護生するも、又㋑七佛の師、舊時の途轍に落つ。呼喚すれども廻らす、羅籠すれども住まらず、行かんと要すれば便ち行き、住まらんと要すれば則ち住まる。活潑々〳〵、轉轆々〳〵、正に是れ而今の衲僧の用ふる底、未だ敢て相許さず。且く道へ、竟畢如何が行履せん。」良久して云く、「㋒若し是れ鳳凰兒ならば、那邊に向つて討ねず。」

復た擧す、梁山和尙頌あり、衆に示して云く、「我れに一枝の拂あり、眞㋓棕鐵作骨、㋔顯道蚊蟲を嚇かし、㋕指南相屈せず、佛祖の病を掃除し、衲僧の窟を擊破す。若し是れ上々〳〵の人ならば、終に喚んで物となさず。」德

㋐花笑鳥啼。花は手を打つて笑ひ、鳥は涙をたれて泣く。

㋑老胡知云々。如來禪は師兄の知るに任す、祖師禪は夢にだも見ざることあり。

㋒天を指す云々。四句有韻の偈、釋迦が天を指し地を指すは、そゝつかしいしわざなり、後來の坊主共が、天上天下唯我獨尊と云はれたなどと、言語の飛脚をするのは、實に見ともない。

㋓此の小參三折、第一折は把住、第二折は放行、第三折は把放自在。

㋔七佛師。文殊也、文殊曾て酒肆淫坊に夏を過す。

㋕若し是れ云々。鳳凰のひよこは、そんな處でも討れずと。

㋖棕櫚は棕櫚、鐵作骨は鐵の骨、棕櫚の葉に鐵の骨のこと。

㋗顯道蚊蟲を嚇かす。妙道を顯す時は、蚊蟲驚き散ず。

山問いて云く、「梁山の好頌、話㋘兩橛となる」と。梁山後に聞いて云く、「我れ當時㋙子細を少く。」師拈じて云く、「二大老恁麼に道ふ意、何にかある、大衆還つて落處を知るや。子期と白牙と、是れ㋚閑相識にあらず。」

結夏衲班を謝する上堂、「衲僧家箇々眼乾坤を蓋ひ、人々口佛祖を呑む。左之右之、龍の水を得るが如く、進前退後、虎の山に靠るに似たり。甚麼によつてか九十日の內、無繩自縛なる。」拄杖を卓して云く、「若し㋛水に入らずんば、爭か長人を見ん。」

藏主の秉拂を謝する上堂、「崇福山頭一片の雲、一大藏敎說不到、戒岸池底の一滴水、天下の衲僧看不透。看得透し說得透する時如何。」良久して云く、「㋜君子は可八。」

中夏上堂、「㋝一百二十日の長期、今朝恰も半に過ぐ、崇福舊公案を擧せず、只だ現定に據つて、汝諸人の爲に箇の消息を通せん。」拄杖を卓すること一下して云く、「六月松風を賣らば、人間恐らくは價なからん。」

六月半上堂、僧、智門の祚和尙に問ふ、「蓮華未だ水を出でざる時如何。」祚云く、「蓮華。」「水を出でゝ後如何。」「荷葉。」師頌して云く、「蓮華荷

㋘指南相屈せず。右向け左向けと指麾すれば、ぐにやりとせぬ。

㋙兩橛となる。德山が一木のくひをふたつに切つた。

㋚子細を少く。成程さう云ふ筈、少し入れば明けて置いた。

㋛閑相識。閑は閑冗の閑にて、通り一邊のちがつきなり、閑相識に非ずは、眞の知音と云ふこと。

㋜水に入らずんば。競走や、川渡りの時に、背の高い男が勝なしめる。

㋝君子可八。烏龜忘八の反、君子は仁義禮智忠信孝悌の八德を行ふ。（諸錄俗語）

㋞百二十日。當時長期を用ひし證據。

㋟泥水。拖泥帶水なり、知解情識の葛藤を離る。

㋠點埃を絕す。馬の糞でも美味、摺鉢でもほこり一つない。

葉㉔泥水を離れ、出末出の時㋑點埃を絶す。限りなき清香收不得、風に和し雨を帶びて滿池に開く。」

解夏小參、「布袋頭結す、大地寸土なく、布袋打開し、徧界活路を通ず。所以に衲僧家、拄杖を摩挲し、鉢囊を㋺抖擻し、仰山の畠田を踏飜して、纖塵立せず。鹽官の扇子を擘破して、清風餘りあり。有佛のところ肯て住まらず、脚下泥深きこと三尺。無佛のところ急に走過す、平地上滑なること砥の如し。三千里外人に逢ふて錯つて擧すると莫れ、早く已に錯つて擧し了んぬ。這箇は卽ち且く置く、且つ解制自恣底の一句の如きんば、又作麼生。」拄杖を卓して云く、「㋩一片の白雲、西より東よりす。」

復た擧す、茱萸和尙、大衆侍立の次、茱萸云く、「只だ恁麼に㋥平白立、箇の說處なし、一場の㋭氣悶。」時に僧あり、出でゝ問はんと擬す、茱萸云く、「衆の爲に㋬力を竭す」と、便ち方丈に歸る。師拈じて云く、「當時纔かに、只だ恁麼に平白立、箇の說處なしと道ふを聞いて、一時に散じ去らん。但だ賓主諧和するのみにあらず、亦乃ち他の茱萸を勞して、衆の爲に力を竭さしむることを免れん。」

㋺抖擻。持鉢囊を打拂ふの意なら、抖擻は俗語解に「妖怪がばける時に、精神をあつめて身ぶるひするを云ふ」とあり、又抖擻行脚の人など云ふ時の抖擻は頭陀と同じ、胸中三斗の塵を抖擻すとか、也た須老精神を抖擻すべしとか、塵埃の衣を抖擻すと云ふが如きは、本錄と同義なり。(佩文韻府)

㋩一片の白雲。風に任せて西より東より、逍遙自在。

㋥平白立。平白は、分曉の義、平白立は一絲亂れず、立班するを云ふ。

㋭氣悶。むなぶくれと同じ、何ぞ枯れ木の樣に、立ちやがつて、胸くそが惡いと。

㋬力を竭す。一場の氣悶が大慈大悲なりと、又歸方丈へも掛けて見よ、國師の評語はこゝにあり。

次の日上堂、拂子を竪起して云く、「只だ這箇是れ什麼ぞ、二千年前說不到、十萬里來踏不着。今朝解制自恣、分明に諸人に與へて看せしめん。」拂子を擲下して云く、「㋮之を見て取らざれば、之を思ふこと千里。」

重陽、㋯直歲・知客・侍者を謝する上堂、「㋰叉手して立つ、賓主歷然、三喚三應、家裡に人あり、然も是の如くなりと雖も、還つて汾陽老人の一句子あるとを知るや。」拄杖を卓すること一下して云く、「重陽九日菊花新なり。」

九月半上堂、「秋葉落ち、秋林脫し、秋月圓明、秋風颯々。祖意敎意、一時に漏泄す。德山㋱棒頭短く、臨濟口門窄し、甚によつてか是の如くなる。」良久して云く、「我れ常に此に於て㋲切なり。」

開爐上堂、「風頭稍硬し、且く暖處に歸せん。這裡切に商量するとを忌む、只だ時に應じて祕を納るゝことを要す。何が故ぞ是の如くなる。」拂子を擊つて云く、「火を㋳覓めては煙に和して得、泉を擔ふては月を帶びて歸る。」

虛堂忌拈香、「世尊の三昧迦葉知らず、迦葉の三昧阿難知らず、先師の三昧崇福知らず、既に是れ彼此相知らず。甚麼によつてか一年一度炷香作禮すや。㋴嗚咿嗚咿、人の此の意を知るなし、我れをして南泉を憶はしむ。」

㋮之を見て取らざれば之を思ふこと千里。是れは見た時貰ふて置かれば、跡から欲しいと思ふても、千里萬里の隔てありと云ふ俗語ならん。

㋯直歲。直歲は一切の作務を掌る、殿堂寮舍の破損に修理を加へ、動用の什物其の數を檢し、役作には其の工程を稽ふる等、皆直歲の任なり、一年の幹事に直す、故に直歲と云ふ。

㋰叉手。直歲、賓主知客、三喚侍者。

㋱棒頭短く口門窄し。棒が短くては届かぬ、口がすぼんでは喝も吐けない。

㋲幼にしては父母を慕ひ、仕ふれば君を慕ひ、壯なるものは少艾を慕ふ、君に得されば黙中す。(孟子)

㋳坊主の身體も性根も、烟の樣なものなり、迷惑ながら、つ

十月半上堂、「禪は㋐意相にあらず、寒月輝々たり、道は㋑功勳を絶す、霜氣浩々たり。㋒會不會、疑不疑、坑に墮ち塹に落ち、道を去ること轉た遠し。畢竟如何。」拂子を擊つて云く、「當頭霜夜の月、任運前溪に落つ。」

㋓都寺・典座・浴主を謝する上堂、「趙州の一甌茶、楊岐の栗棘蓬、生薑は元是辣く、鑊湯に冷處なし。」喝一喝して云く、「喉を轉ずれば諱に㋔觸る。」臘八上堂、「明星夜々現じ、白雪年々寒し、宇宙茫々として人無數、知らず何の處にか瞿曇を見ん。大衆、瞿曇を見んと要すや。」良久して云く、「吾れ爾に隱すことなし。」

除夜小參、「年窮り歳暮れ、古佛の家風、當陽に顯露す。臘盡き春廻り、祖師の巴鼻、觸處に現成す。便ち恁麼に去らば、釋迦雪山に入ることを用ひず、達摩流沙を渡るべからず。人々鼻直眼横、箇々天を頂き地を履む、坐ながら太平を致す。時に應じて祐を納れ、三十六旬、㋕七十二候、汝を㋖孩し着す、其れ如し未だ然らずんば、寒梅香は動ず舊年の枝、岸柳金を拖く新歳の葉。」

復た擧す、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ不遷の義。」州㋗手をもつて

きものなり。

㋐嗚呼。嗚は嗟聲なり、呼は呻吟なり、「おー〳〵」と泣くこゑ。

㋑意相。思慮分別。

㋒功勳。奇特玄妙。

㋓會不會疑不疑。會すと云ふも會せずと云ふも、疑ふも更に疑はざるも、皆穴なり、溝なり、賊破れけやぶれ。

㋔都寺。監寺をすぶるの意。禪林の一役なり。

㋕觸る。栗のいがや、にえ湯を呑むと、喉をそこなふ。

㋖七十二候。春夏秋冬を六氣宛に開いて、二十四氣となる、其の二十四氣を三つ宛に分ちて、都合七十二候となる、一例を云へば、立春は氣なり、之を三候に分ち、東風解凍、蟄蟲始振、魚上氷となすが如し、二十四氣七十二候を合せて、單に氣候と云ふなり。

流水の勢をなす、其の僧省あり。師拈じて云く、「趙州是れ善く來機に應ずと雖も、爭奈せん力を費すこと少からざることを。今夜忽ち人あり、崇福に如何なるか是れ不遷の義と問はゞ、他に向つて道はん、大盡三十日、小盡二十九と。」

元日上堂、「昨夜舊年を送り、今朝新歳を迎ふ。太宰府裡の藤三源四、崇福山中の露柱燈籠、拜する底は拜し、賀する底は賀す。一々我が家の眞機を漏泄し、頭々靈山の密旨を發輝し、山僧一半の㋘氣力を省得す。何が故ぞ。」拂子を擊つて云く、「花の開くは栽培の力を假らず、自ら春風の伊を㋙管帶するあり。」

㋚講經に因つて上堂、「世尊四十九年、横説竪説、未だ曾て一字を説かず、崇福三十餘日、玄を談じ妙を談じ、未だ曾て一法を談せず。且く道へ、如何なるか是れ不談底の事。」拄杖を卓すること一下して云く、「㋛三段同じからず、上科に收歸す。」

進退の兩班を謝する上堂、「㋜三脚の驢兒、獨角の麒麟、一進一退、賓主歴然。㋝栴檀葉々香風起る、須らく知るべし鑊湯冷處なきことを。」

㋘挫す。ゆさぶるなり。

㋙手をもつて流水の勢をなす。くちでざあ〳〵ざあと云つて手をべら〳〵と動かした。

㋚氣力を省得。おれも禪の寶貝をやつてゐるが、今日は藤三源四のお蔭で助かつた。

㋛管帶。歓待と同音。

㋜講經。お經の講釋があつたと見ゆ。

㋝三段同じからず。經文を釋するに分科あり、上科より分れて中科となり又分れて下科となり、幹より枝を生ず、之を三段にして一字宛を遞下す、是れ分科の法なり、世に科注と云ふもの是なり、斯く三段同じからざれども最上の根科に歸納す、三段を用ひしは上に冊目と系を引けり、白隱和尚曰く、「一番高い方へ付く、今高いのは米じや、坊主共も食ふて寐て居ると地獄じや。」

結夏小參、「綠暗く紅稀にして、孟夏漸く熱す。等しく是れ恁麼の時節、阿那箇か是れ圓覺伽藍、什麼を喚んでか平等性智と作す。所以に崇福が一衆八十餘員、西天の㋐影子を守らず、豈に東土の時機に墮せんや、一絲毫の安居禁足底の事なし。崇福也た是れ敢て諸人の一絲毫許りを錯誤せず、只だ要す、各々自ら一條の活路子を行じて、風前月下、山邊水際、意に任せて遨遊し、自由自在ならんことを。何が故ぞ。」拄杖を卓して云く、「但だ路の上るべきあれば、㋑更に高きも人也た行く。」

復た擧す、㋒天平の漪和尚、行脚の時、㋓西院に參ず、毎に云ふ、「㋔佛法を會すと道ふこと莫れ、箇の擧話底を覓むるに也た無し」と。一日西院召して云く、「徙漪。」平頭を擧く、院云く、「錯。」平行くこと兩三步、院又云く、「錯。」平近前す。院云く、「適來者の兩錯、是れ西院が錯か、上座が錯か。」平云く、「㋕從漪が錯。」院云く、「錯。」平休し去る。院云く、「且く這裡にあつて夏を過し、上座が者の兩錯を商量するを待て。」平當時起ち去る、後に住院、衆に謂つて曰く、「我れ當時風に吹かれて、四明長老の處を過ぐ、他をして連りに兩錯を下さしめ、更に我れを留めて者の兩錯を商量せしむ。那の時の錯とは道はず、南方に發足する時、早く錯り了れり。」師拈じて云く、「天平恁麼に道ふ、轉た敗闕を見る、若し是れ當時ならば、他の西院が錯か上座が錯かと道ふを待つて、喝一喝して便ち行かん。惟だ西院の肝膽を覷破するのみにあらず、亦乃ち後人に檢責せらるゝことを免れん。然も是の如くなりと雖も、崇福今夏切に忌む、者の兩錯を商量することを。」

次の日上堂、「㋖三百餘會、一笑を博せず、十萬里來、伎窮つて三拜。崇福今日、布袋頭一結に結定す。南來北來、若しくは聖若しくは凡、氣を出す處なし。且く道へ、古人と是れ同か是れ別か。」拄杖を卓すると一下す。

中夏上堂、「九夏半を過ぐ、見成の公案、諸人若し也た會得せば、一生參學の事辨ず。其れ如し未だ然らずんば、更に那の一半のあるあり。㋗道ふことなかれ言はずと。」

上堂、「時節至れば其の理彰る、桐葉落ちて秋風涼し、古佛の家風都べて漏泄す、衲僧門下商量することなかれ。何が故ぞ、眼底那ぞ㋘金屑を着く容けん。」

中秋上堂、「八月十五、月圓かに戶に當る、人々に這箇あり、只だ是れ用ひ得て別なり。長沙仰山を踏倒す、力を用ふること太だ過ぎたり。南泉拂袖して衆に歸す、靈龜尾を曳く。且く道へ、畢竟如何。大衆、久立珍重。」便ち下座。

㋐三脚の驢兒、獨角の麒麟。楊岐三脚の驢兒、跡を弄して往き、孔子春秋を作つて麒麟來る。

㋑葉々香風起る。褒賞の語。

㋒影子はお釋迦樣の齒くそ、時機は達磨の尻。

㋓更に高きも。大抵の者は龍門迄來ると、尾もひれもきすついて退却す。

㋔天平。清禪師に嗣ぐ、遵は羅漢琛に嗣ぐ、琛は玄沙備に嗣ぐ。

㋕西院。寶壽沼に嗣ぐ、沼は臨濟に嗣ぐ。

㋖佛法を會すと道ふことなかれは善いが、箇の擧話底を覓むるに也た無しとは、いやな處がある、西院のれらひはそこなり。

㋗從漪が錯。和尚も錯、從漪も錯と云へばよいに、是れでは又西院から又錯とはめらるゝは道理なり。

㋘三百餘會、十萬里來。釋迦の三百餘會も迦葉の一笑にあたらず、淡磨十萬里を東來すれば、二祖伎梅まつて三拜す。

㋙道ふことなかれ言はず。是れが國師の御示しなり。

㋚金屑。桐の葉が落ちると、やれさみしいと云ふ、秋風が涼しいと、龜が食ひたいとまわぐ、皆金屑なり。

開爐上堂、「崇福が開爐、元未だ曾て開かず、火焰說法せず、諸佛如何が聽かん。無賓主の話を擧せず、誰か三界唯心を論せん。然も是の如くなりと雖も、須らく知るべし、冷灰裡㋐九轉(の)透瓶香。」

上堂、擧す、明招の示衆に、衆纔かに集る、招云く、「者裡の風頭稍硬し、且つ暖處に歸つて商量せん」と、便ち下座。衆隨つて方丈に至る、招便ち打つて云く、「纔かに暖處に至れば、便ち瞌睡を見る」と。師拈じて云く、「明招老漢、惜むべし暗に明珠を投ることを。當時一衆、眼裡に筋なく、人に隨つて上下す。崇福は卽ち然らず、者裡の風頭稍硬し。大衆、久立珍重。」

佛成道上堂、「㊀明星夜々現じ、臘雪年々白し、諸人若し也た一見便見、一得永得ならば、妨げず、釋迦老子と同見同得なることを。其れ如し未だ然らずんば、天上の星、地下の木。」

除夜小參、僧問ふ、「德山小參答話せず、意甚麼の處にかある。」師云く、「天に倚る長劍人に逼つて寒じ。」僧云く、「趙州小參答話を要す、又作麼生。」師云く、「無孔の鐵鎚當面に擲つ。」僧云く、「和尙今夜小參、如何が爲人せん。」師云く、「儞聞くや也た未だしや。」僧云く、「恁麼なれば則ち㊁三段同じからず、上科に收歸す。」師云く、「向上に眼を著けて看よ。」僧便ち禮拜す。又僧あり問ふ、「舊歲今宵去る、甚麼の處に向つてか去る。」師云く、「臘雪堆中に向つて去る。」僧云く、「新年明日來る、甚麼の處よりか來る。」師云く、「黃鶯聲裡より來る。」僧云く、「還つて新舊に涉らざる底ありや也た無や。」師云く、「有り。」僧云く、「如何なるか是れ新舊に涉らざる底。」師云く、「金香爐下の鐵崑崙。」僧云く、「記得す、感首座、法昌に問ふ、『昔日北禪の分歲、露地の白牛を烹る。和尙今夜分歲、何の施設かある。』昌云く、『臘雪天に連つて白く、春風戶に逼つて寒し』と、此の意作麼生。」師云く、「㊂常住物を用ひて自己の用となす。」僧云く、「感云く、『大衆如何が喫せん。』昌云く、『冷淡無滋味を嫌ふことなかれ、一飽能く萬劫の飢を消す』と、如何が委悉せん。」師云く、「喫著するもの方に知る。」僧云く、「感云く、『是れ何人か置辨す。』昌云く、『無慚愧の漢、來處も也た知らず』と、又作麼生。」師云く、「果然果然。」僧云く、「古人は則ち且く置く、和尙今夜分歲、何の施設かある。」師云く、「金剛圈、栗棘蓬。」僧云く、「大衆如何が喫せん。」師云く、「只だ恐らくは呑吐不下なることを。」僧云く、「是れ何人か置辨す。」師云く、「高く眼を着けて看よ。」僧云く、「和尙與麼の施設、古人と是れ同か是れ別か。」師云く、「別に是れ一家風。」僧禮拜す。又僧問ふ、「歲窮り年盡き、禿頭の笞箒、路傍に舞をなす、學人上來、請ふ師提唱せよ。」師云く、「怪力亂神を見ず。」僧云く、「只だ北禪の露地の白牛を烹、榾柮の火を燒き、村田樂を唱ふと道ふが如きんば、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「也た是れ村裡の家風。」僧云く、「如何なるか是れ露地の白牛。」師云く、「趁へども去らず。」僧云く、「如何なるか是れ榾柮の火。」師云く、「烈焰天に亘つて紅なり。」僧云く、「如何なるか

㋐カ轉の透瓶香。丹と云ふべきなり、開爐故火に緣をとつて香と云ふ、九轉丹は精鍊の極なり、精白瓶と色を同じうす。

㊀仰ぎみれば明星あり、俯して見れば臘雪白し。

㊁三段、上に德山、趙州並に和尙に問ひ來る。

㊂常住物を以て自己の用となす。臘雪や春風を私用すると云ふ意。

是れ村田樂。」師云く、「宮商に渉らず。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「天地覆載し、日月照臨す。陰陽代謝、四序變遷。㊂二十四番の花信、三十六旬の風光、一年三百六十日、數へて臘月三十日に到つて、總に是れ我が家の眞機、更に絲毫の他物なし。然も是の如くなりと雖も、舊年新歲、交頭結尾、轉身の一句、作麼生か道はん。」拂子を擊つて云く、「看よ看よ春風の動くことを、寒梅徧界に香し。」

擧す、僧、㊁鶴林に到りて門を敲く、林云く、「誰そ。」僧云く、「行脚僧。」林云く、「道ふことなかれ行脚僧、佛來るも也た㊄着けず。」僧云く、「既に是れ佛來る、甚によつてか着けざる。」林云く、「汝が棲泊の處なし。」師拈じて云く、「大小の鶴林、無佛の處に尊と稱す。崇福は則ち然らず、既に是れ佛來る、甚によつてか着けず。只だ他に向つて道はん、㊆客となることを會せずんば、主人を勞煩す。」

結夏小參、「青山綠水、明月白雲、滿眼滿耳、廻避するにところなし。是れ格外の玄機にあらず、亦世諦流布にあらず。所以に衲僧家、意、玄に停まらず、㊇眼、戸に掛けず、潛行密用、佛祖も識らず、㊈東倒西擂、魔外

㊂二十四番。梅花に始まつて楝花に終ふ、之を二十四番花信風と云ふ。（歲時記）

㊁鶴林。會元二にあり、四祖下の旁田六世金陵牛頭山の威禪師の法嗣にして、鶴林玄素禪師なり。

㊄着けず。寄せ付けぬ。

㊆客となることを會せずんば主人を勞煩す。折角茶事をやつても肝心の正席が茶心なくては主人の心遣りもむだになり、迷惑千萬なり。

㊇眼戸に掛けず。外へ出る氣も無ければ戸口に眼をつくる用事なし、内も見ず外もみず。

㊈東倒西擂。東にたふれ西にころがるなり、擂は石を推して高きより下るなり。

も測りがたし。林に入つて草を動かさず、水に入つて波を動かさず、終日談じて一語を說かず、終日行いて寸步を移さず。是の如く安居し、是の如く禁足して、始めて禁足底の事なけん。便ち恁麼に去るも、未だ常情を出でず、且く道へ、畢竟如何が行履せん。」拂子を擊つて云く、「是れ梧桐樹にあらずんば、鳳凰誓つて棲まず。」

復た擧す、長慶云く、「㊉㊋惣に今日に似たらば、老胡望あり、㊌家富んで小兒嬌る。」保福云く、「㊉㊋惣に今日に似たらば、老胡望を絕す、國淸うして才子貴し。這箇は卽ち且く置く、畢竟今日の事、又作麼生。」良久して云く、「分明に記取せよ。」

結夏上堂、十五日以前は、頭天を頂き脚地を踏む、十五日以後は、面を仰いで天を見ず、頭を低れて地を見ず。正當十五日、天は是れ天、地は是れ地、甚の三月安居、九旬禁足とか說かん。何が故ぞ。」良久して云く、「㊍猛虎、伏肉を食はず。」

重陽上堂、「九月九是れ重陽、黃花猶ほ未だ發かず、野草分外に香し。見成の公案、迥に商量を絕す。若し是れ眼裡に筋ある底は、妨げず纔かに見て便ち承當することを。其れ或は未だ然らずんば、無事山に上つて行くこと一轉。」

㊉惣に今日に似たらば。禪宗も今時の樣であつたならば達磨も滿足であらう。

㊌家富んで、國淸うして。此の二句は國師の一轉語なり。

㊋惣に今日に似たらば老胡望を絕す。禪宗も今時の樣であつたならば達磨もおきれるであらう。

㊍猛虎伏肉を食はず。眞正の禪子は、一山三文の安悟りは受取らぬ。

冬至小參、「霞灰未だ動かず、全機顯露、㊁六爻纔かに分れて、觀體現成す。衲僧家、人々口佛祖を呑み、箇々眼乾坤を蓋ふ。有る時は無陰陽の地に、胡拋亂撒し、有る時は、聲色頭邊に、東倒西攙す。所以に崇福尋常、聲前の句後に向つて兄弟を羅籠せず、今夜且く一着を放下して、別に一線の活路を通じ、普天の和氣を管取せよ。甚によつてか特地に是の如くなる。」拄杖を卓して云く、「㋙從前の汗馬人の識るなし、只だ要す重ねて蓋代の功を論せんことを。」

復た擧す、僧、巴陵に問ふ、「祖意教意、是れ同か是れ別か。」陵云く、「鴨寒うして水に下り、鷄寒うして樹に上る。」師拈じて云く、「而今の兄弟、十箇に五雙あり、只だ同別の會をなし去る、未だ嘗て夢にだも巴陵の肝膽を見ず。且く道へ、巴陵の意又作麼生、鴨寒うして水に下り、鷄寒うして樹に上る、大衆會すや。㋛鴛鴦を繡ひ出して君が看るに任す、金針を把つて人に度與せず。」

次の日上堂、「群陰剝盡し、㋓嶽峰依前として天を挿んで碧なり。一陽來復、磵泉長時に徹底清し、威音以前、盡未來際、未だ曾て一絲毫許りを移易せず、未だ曾て一絲毫許りを增減せず。便ち恁麼にし去らば、君子道長じて本長せず、小人道消して本消せず。一念萬年、萬年一念、然も是の如くなりと雖も、恁麼の說話、也た是れ尋常座主底の見解、且く道へ、衲僧門下如何が擧似せん。」拂子を擊つて云く、「㋚劫外の一壺春更に好し、優曇華綻びて普天香し。」

庫堂を立つる上堂、「飯は㋐香積に取り、座は㋒燈王に借る。維摩大士力を費すこと少からず、崇福が這裡厨庫已に建ち、香飯自ら成る。一任す、人々喫せんと要せば便ち喫せよ。一微塵裡に法王刹を現ず、妨げず、箇々坐せんと要せば則ち坐せよ。然も是の如くなりと雖も、誰か恩力を承くる。」拂子を擊つて云く、「㋛明月照して盡くることなく、淸風來つて未だ休せず。」

上堂、「岳峰峰頂の寺、家風元自ら別なり。祖師禪に參ずること莫れ、各自に時節を知る。霏々たり黃梅の雨、滴々の聲歇むことなし。德山と臨濟と、也た是れ一概を得たり。」

臘八上堂、「夜々明星輝を流し、人々頂門に眼を具す。一見便見、一得永得。且く道へ、釋迦老子、半夜に忽ち明星を覩ると、是れ同か是れ別か。」拂子を擊つて云く、「天上の星、地下の木。」

講經によつて上堂、「㋜敎中に道ふ、『止みね止みね、說くことを須ひず、我法妙難思と』、崇福は卽

㋙從前の汗馬。汗馬に穫ち、千軍の内を馳驅し、幾たびか生死の境に奮鬪して、正に功成り名遂ぐるを致す、然るに世の中の人は、只だ出世の榮顯ばかりを論じて、別苦の本源を究むることなし。

㋛鴛鴦を繡ひ出し。巴陵の端的なり。

㋓嶽峰。橫嶽峯なり。

㋚劫外。威音王以前、壺中の天地、別に日月あり。

㋐香積。佛の名、此の佛香飯を以て佛菩薩に供奬す、故に後世厨司を香積と云ふ。

㋒燈王。文殊問利言く、「東方世界あり、須彌相と名づく、其の佛を須彌燈王と名づく、彼佛の身長八萬四千由旬、其の師子の座、高きこと八萬四千由旬、嚴飾第一なり。」（維摩經）

㋛今時の衲僧は明月の照し、淸風の吹くを知つて、明月の照して淸風吹くことを知らず。

㋜敎中。法華經なり。

ち然らず、說かんと要せば便ち說き、行かんと要せば則ち行く。何が故ぞ是の如くなる。我法㋐妙難思。」拄杖を卓すること一下して云く、「三段同じからず、上科に收歸す。」

三月旦上堂、「聲色不到の處、紅紫芬芳を競ふ。言詮不及の處、黃鸝枝上に啼く。且く道へ、是れ教意か、是れ祖意か。」拄杖を拈じて一下して云く、「㋑乾三連、坤六段。」

上堂、「三日一雨、五日一風、風條を鳴さず、雨塊を破らず。崇福直に得たり、謳歌鼓腹太平を致すことを。何が故ぞ、㋒佛法は爛却を怕れず。」

佛生日上堂、「雨群峰を洗つて翠色を添へ、瞿曇の面目露堂々。㋓韶陽の正令行不到、播土揚塵、未だ肯て休せず。崇福例に隨つて也た一杓の惡水を潑がん。」喝一喝す。

中秋上堂、擧す、盤山云く、「心月孤圓にして、光萬象を呑む。光は境を照すにあらず、境又存するにあらず、光境俱に忘ず。亦是れ何物ぞ。」師拈じて云く、「盤山恁麼に道ふ、黑山下に向つて活計を作すと。崇福は則ち然らず、光境俱に忘ず、只だ一橛を得たり、更に須らく全提の時節あることを知るべし。然も是の如くなりと雖も、那箇か是れ心月。」拄杖を卓して云く、「禾山の打鼓、雪峰の輥球。」

臘八上堂、僧問ふ、「釋迦老師、半夜城を逾え、雪山六年、一麻一麥、是れ何の心行ぞ。」師云く、「是れ苦心の人にあらずんば知らず。」僧云く、「正當明星現するとき、忽然として悟り去る、還つて端的なりや也た無や。」師云く、「㋺射鵰の手によらずんば、爭か李將軍を知らん。」僧云く、「只だ一人眞を發し源に歸するが如きんば、大地の衆生、什麼の處にかある。」師云く、「大家這裡にあり。」僧云く、「釋迦老師、顚言倒語して道ふ、『奇なるかな、一切衆生、悉く如來の智慧德相を具す』と、既に是れ風なきに浪を起す、如何が太平を得去らん。」師云く、「釋迦老師を誘するとなくんば好し。」僧云く、「恁麼なればは則ち切に忌む、㋻當初を愼まざることを。」師云く、「知つて始めて得べし。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「未だ雪嶺に登らざるに、雪山雪寒し、未だ明星を見ざるに、衆星朗然たり。悟と㋻未悟の時と、萬里一條の鐵。」

臘月半上堂、「光陰箭射の如く、今朝臘月半、氷は水より生じて、水よりも冷かに、青は藍より出でゝ、藍よりも青し。諸人若し會得せば、妨げず、㋼順時保愛することを。其れ如し未だ然らずんば、雪の消し去るを待ち得て、自然に春到來。」

結夏小參、「嶽峯の絕頂、峭峻孤危、老胡仰望し及ばず、古磵寒泉、徹底清冷、弟僧覷視するに門なし。若し這裡に向つて覷得透し挨得入せば、方に仰望し及ばず、覷視するに門なき底の消息を知らん。身を轉じて活路を行じ、手を擺つて那邊に出づ。一切處に禁足し、一切

㋐妙難思。此の上堂三字を拈弄す、立つもれるも此の妙難思の働きなり。
㋑乾三連坤六段。乾の卦は陽爻三本、坤の卦は陰爻三本、陰は中がきれてゐる。
㋒佛法は爛却を怕れず。日に新に日日新なり。
㋓韶陽の正令行不到。雲門の大師の正令の屆かぬ處に、後世の見孫が、きたなきものをまきちらす。

㋺射鵰の手。空飛ぶたかを、射落す位のうで前で無くては、李廣を知ること出來ぬ。
㋻當初を愼まず。初めの粗雜の辭を取消します。
㋻悟りの頭から未悟の尻迄、里程を數ふれば壹萬里、金剛の石疊み堅きこと鐵の如し。
㋼順時保愛。分相應に食つたり飲んだりせよ。

處に護生す。長期短期を問はず、豈に㊀寒岸異草を守らんや。然も是の如くなりと雖も、黑漆の拄杖、猶ほ未だ肯はざることあり、更に甚の殺盡して方に安居、鐵船水上に浮ぶとか說かん。力を費すこと少からず、拈出するを勞せず、畢竟崇福九夏、如何が行履せん。」拄杖を卓して云く、「㋒等閑に獨り超ゆ千聖の外、明月清風類して齊しからず。」

復た擧す、保福因に僧侍立す、福云く、「儞が恁麼に龕心なることを得たり。」僧云く、「甚の處か是れ某甲が龕心。」福、一塊土をもつて僧に度與して云く、「內外に拋向し着せよ。」僧、㋓門外に拋向し、再び來つて却つて問ふ、「甚の處か某が龕心。」福云く、「我れ儞が㋔築着磕着を見る。所以に龕心と道ふ。」師拈じて云く、「保福一顆の明珠、這の僧に附與す、惜むべし、這の僧得て受用すること能はず。崇福門下、總に是れ龕心底。何が故ぞ、我れ諸人を見るに、也た是れ築着磕着。」

次の日上堂、僧問ふ、「衲僧家、尋常氣宇王の如し、甚としてか今朝無繩自縛なる。」師云く、「一事によらずんば、一智を長せず。」僧云く、「只だ朝に西天に到り、暮に東土に歸るが如きんば、還つて禁足底の道理ありや也た無や。」師云く、「終日行いて一步を動せず。」僧云く、「如何なるか是れ鵝護雪、臘人氷。」師云く、「甚の死急をか着けん。」僧云く、「如何なるか是れ㋕鐵彈子。」師云く、「圓鑼劈不破。」僧云く、「和尙此間、何を以てか驗となす。」師云く、「青山流水。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「四月十五、布袋頭結し、盡乾坤大地、一絲毫を漏さず。內放出せず、外放入せず、正恁麼の時、轉身の一句、作麼生か道はん。」拂子を擊つて云く、「㋖一把の柳枝收不得、風に和して搭在す玉欄干。」

上堂、「佛法の兩字、平地の波瀾、鼓を擊つて陞堂、已に㋗物義を傷る。且く道へ、崇福門下、畢竟如何が行履せん。」拄杖を卓すること一下して云く、「二時の粥飯、㋘氣力盛なり、無事山邊行くこと一轉。」

雨によつて上堂、「三日の晴、一日の雨、㋙天平に地平に、河滿ち井滿つ。崇福只だ㋚口あつて飯を喫することを得たり、何が故ぞ是の如くなる。㋛佛法は爛却を怕れず。」

中夏上堂、「㋜荷葉圓々、菱角尖々、衲僧一見便見、一得永得。然も是の如くなりと雖も、猶ほ是れ半提、須らく全提の時節あることを知るべし。何が故ぞ、行いては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起る時。」

解夏小參、「二千年前、靈山會上、㋝怛薩阿羯、百萬の聖衆と、結制解制、長期短期、單に此の事を明す。二千年後、崇福山中、小僧紹明、八十餘僧

㋐寒岸異草。小を得て大を忘す。
㋑壺中別に日月あり。
㋓門外に拋向。此の樣に正直にきちやうめんに、云ふことを聞きます。
㋔築着磕着。頭を柱やとびらにつきあたつたり、こつつりこつつりこばかりしてゐる。
㋕鐵彈子。福州長慶の還禪師、因に僧問ふ、「西天聖人を以て驗となす、未審し此の問は何を以て驗となす、」師云ふ「鐵彈子、」僧問ふ、「意旨如何、」師曰く、「大底は大、小底は小。」

㋖一把柳枝。是れは黃山谷が嶀堂和尙へ引導せし時の偈なり、そよふく風に柳の枝がさらりと欄干をなでた、さても其の優、欄干に結びつく。
㋗物義を傷る。風無きの波、好肉に瘡を剜る。
㋘氣力盛。醫勃の精神の遺りばがない。
㋙早天に雲霓を得、四民歡抃。
㋚口あつて。口開けて居れば、飯が飛び込む。
㋛佛法は爛却を怕れず。捨てるものあれば拾ふ神あり。
㋜荷葉圓々。會元五に、僧、夾山の會禪師に問ふ、如何なる

と、三月安居、九旬禁足、全く此の事に憑る。西天此土、毫髮も移らず。所以に道ふ、㊁三十年藥山にあつて、只だ此の事を明むと、今は則ち聖制周圓、時自恣に臨む、試みに問ふ、諸禪德、那箇か是れ此の事。」驀に拄杖を拈じて卓一下して云く、「若し這裡に向つて會得し去らば、初秋夏末、東去西去、脚頭脚底、七穿八穴。其れ如し未だ然らずんば、前程人に逢はば、錯つて㊂擧することを得ざれ。」

復た擧す、地藏和尙、僧に問ふ、「甚麼の處よりか來る。」僧云く、「南方。」藏云く、「南方の佛法如何。」僧云く、「商量浩々地。」藏云く、「爭か似かん、我が這裡田を種ゑ飯を摶めて契するに。」僧云く、「㊃三界を爭奈何せん。」藏云く、「什麼を喚んでか三界となす。」師拈じて云く、「地藏阿師、只だ田を種ゑ、飯を摶めて喫することを解す。佛法は未だ夢にだも見ざることあり。崇福恁麼に道ふ、意何にかある。今夜暑氣未だ退かず、且つ來日を待つて、㊄汝諸人の爲に說破せん。」

次の日上堂、僧問ふ、「三月安居、今既に滿つ、九旬㊅公用の事如何。」師云く、「冬瓜は直うして備倜、瓠子は曲つて灣々。」僧云く、「學人恁麼に去るか是れ相似の句、」師云く、「荷葉團團鏡の如し、菱角尖尖錐に似たり。」

㊁怛薩阿羯。梵語、此に譯して、如來と云ふ。

㊂三十年藥山にあつて此の事を明む。會元九に船子和尙、夾山に囑して曰く、「汝向後直に須らく藏身の處沒蹤跡、沒蹤跡の處身を藏する勿れ、吾れ卅年藥山に在つて、祇だ此の事を明む、汝今既に得、他後、城壇棗蔡に住する勿れ」と。

㊂擧することを得ざれ。馬鹿くちきくな。

㊃三界を爭奈何せん。食ふてれて居ては三界輪廻を何としませう。

㊄審を放す時の、をとつひ來いじや。

㊅公用の事。九十日の本職の仕事、備倜はぶらりとさがること、灣々はひねくりまがる。

時如何。」師云く、「㊆且緩々。」僧云く、「昔日馬祖八十四人の善知識を出す、箇々㊇阿滝々。今夏和尙、八十餘員の衲僧を接す、何の長處かある。」師云く、「人々天を頂き地を履む。」僧云く、「㊈未だ崇福の門に到らざるに、先づ知り了んぬ。」師云く、「更に須らく子細にして始めて得べし。」僧云く、「記得す、仰山、香嚴に語げて云く、『如來禪は師兄の會することを許す、祖師禪は未だ夢にだも見ざることあり』と、此の意如何。」師云く、「言中に響あり。」僧云く、「如何なるか是れ如來禪。」師云く、「四十餘年說不到。」僧云く、「如何なるか是れ祖師禪。」師云く、「九年面壁覷不破。」僧云く、「如何なるか是れ和尙の禪。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「杲々として明かなること日の如く、漫々として黑きこと漆に似たり。夜半甚だ分明、天曉還つて不露。衲僧一夏、頭を聚め耳を接し、東に覷西に覷れども覷不透、橫に咬み竪に咬めども咬不破、忽然として自恣の日到來、諸人合に作麼生。崇福未だ免れず、重ねて注脚を下し去ることを。」拂子を竪起して云く、「看よ看よ、杲々として明かなること日の如く、漫々として黑きこと漆に似たり。」

㊆且緩々。ちよつとよ、ちよつとまて。

㊇阿滝々。圓轉自在脫洒自由。

㊈未だ云々。頭に天を戴き足地を履む位の事は、生れた時から知つて居る。

崇福寺語錄下 終

洛陽㋑萬壽禪寺語錄

侍者宗㋺心編

師、㋩嘉元三年七月二十日に於て開堂。

拈香に云く、「此の香、靈根空劫以前に生在し、瑞氣㋥九天の上に㋭盤旋す。爐中に爇向して、恭しく爲に今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬々歲を祝延したてまつる。陛下、恭しく願はくは、㋩金輪統御して、天基永く茂り、四海仁に歸して、萬邦入貢せんことを。」

次に香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して、恭しく太上天皇の爲にす。恭しく願はくは億萬年、天清く地泰かにして、永く皇圖を祚し、三千世時和し、歲豐かにして、咸く眷德を謌はんことを。」次に香を拈じて云く、「此の一瓣の香、日本に名聞え、大宋に貴を知られ、乳竇峰前、㋬南屏圓裡、東に嗅ぎ西に嗅いで、全く氣息なし。㋣雙徑那畔五髻峯頭に逗到して、人に覷着せられて、天に薰じ地を炙す。扶桑に歸り來つて、一回拈出して一回新なり。爐中に爇向して、前住大宋徑山興聖萬壽禪寺先師虛堂大禪師の爲にし奉り、用つて法乳の恩に酬ゆ。」

師遂に座に就き、垂語して云く、「絃を動かして曲を別ち、葉落ちて秋を知るは、也た是れ尋常。朕兆未だ分れず、文彩未だ彰はれざる以前に會得する底あることなしや。」僧問ふ、「法幢を建て宗旨を立するは、正に此の時にあり、祝聖の一句、請ふ師提唱せよ。」師云く、「雲淨うして日月正し。」進んで云く、「恁麼なれば則ち一言以て南山の壽を祝し、萬國歌謠して太平を賀せん。」師云く、「風行けば草偃す。」進んで云く、「記得す、梁の武帝、傅大士を請じて講經せしむ、士終に陞座、案を打つこと一下して、便ち下座す。此の意如何。」師云く、「未だ座に登らざる時、經旨既に明かなり。」進んで云く、「帝愕然たりと、又作麼生。」師云く、「將に謂へり、㋧武帝忘却すと。」進んで云く、「志公云く、『大士講經し竟んぬ』と、如何が理會せん。」師云く、「知音知つて後更に誰か知る。」進んで云く、「今日聖主、和尙を請じて演法せしむ、何の祥瑞かある。」師云く、「無限の淸風來つて未だ休せず。」進んで云く、「龍吟すれば霧起り、虎嘯けば風生ず。」師云く、「誰か敢て近傍せん。」僧禮拜す。僧又問うて云く、「㋡釋迦の說法、多寶證明す、和尙今日開堂演法、未審し是れ甚麼の法をか說く。」師

㋑萬壽。五山の一、山城京城山。
㋺宗心。即庵宗心禪師なり。
㋩嘉元三年。二條院の年號、此の時師年七十一歲なり。
㋥九天。鈞天、蒼天、昊天、玄天、幽天、皓天、朱天、炎天、蘇南子に出づ。
㋭盤旋。盤は盤桓、旋は旋回。
㋩金輪。金輪は四輪王の一、四天下を統治す。
㋬南屏。淨慈光孝禪寺、乳峯や南屏圓を嗅ぎまはしても更に香氣なし。
㋣雙徑五髻峯。徑山萬壽禪寺、虛堂の住處なり。
㋧武帝忘却すと。雲山の寄記を忘れられたかと思へば、立派に愕然せられた。
㋡釋迦の說法多寶證明。法華寶塔品の文。

云く、「㊀法々本來法。」進んで云く、「恁麼なれば則ち大機圓應、大用無方。」師云く、「一葉落ちて天下秋なり。」進んで云く、「記得す、夾山初め住院のとき、因に僧ありて問ふ、『如何なるか是れ法身。』山云く、『法身無相』と、此の意如何。」師云く、「錯つて定盤星を認む。」進んで云く、「僧問ふ、『如何なるか是れ法眼。』山云く、『法眼瑕なし』と、意旨如何。」師云く、「學語の流。」進んで云く、「時に道吾座下にあつて失笑す、山請益し、衆に別れて、船子に參じて省發す。未審し、夾山什麼の見處かある。」師云く、「千聞は一見に如かず。」進んで云く、「道吾聞き得て、僧をして行いて問はしむ、『如何なるか是れ法身。』山云く、『法身無相』と、何の優劣かある。」師云く、「甜瓜は蔕に徹して甜く、苦瓠は根に連つて苦し。」進んで云く、「僧問ふ、『如何なるか是れ法眼。』山云く、『法眼瑕なし』と、意那裡にかある。」師云く、「意氣ある時は意氣を添へ、風流ならざる處也た風流。」進んで云く、「僧還つて道吾に擧似す、吾曰く、『者の漢、此の回方に徹せり』と、道吾甚麼の眼目をか具す。」師云く、「鵝王乳を擇ぶ、素鴨の類にあらず。」進んで云く、「古人底は且く置く、今日人あり、如何なるか是れ法身と問はゞ、和尚作麼生か祇對せん。」師云く、「秋風渭水を吹き、落葉長安に滿つ。」進んで云く、「恁麼なれば則ち昔日の夾山、今日の和尚。」師云く、「切に忌む、亂に㊁針錐することを。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「目前に法なく、門外の車馬闐浩々たり。意は目前にあり、屋頭の松竹冷青々たり。是れ目前の法にあらず、耳目の到るところにあらず、清寥々、白的々、只だ這の些兒、人の憎みを得。古に亘り今に亘り、變易せず。釋迦老子、四十餘年、横說竪說も說不到、達磨祖師、十萬里來、東覩西覩も覩不破。臣僧紹明、今日開堂、覺えず眸を擡げて、一覩に覩着し、端なく口を開いて、一句に說着す。說著覩著、太古の風を追同し、純ら無爲の化を樂む。正恁麼の時、恩を知りて恩を報ずるの一句、作麼生か道はん。」拄杖を卓することを一下して云く、「四海而今鏡よりも清く、三邊誰か敢て封疆を犯さん。臣僧紹明、恭しく聖旨を奉じて、今日開堂、正法眼藏を擧揚して、聖壽の無疆を祝延したてまつる。人天大會、草木叢林、情と無情と、同じく光輝を蒙り、共に聖恩に霑ふ。臣僧紹明、下情、感激㊂屏營の至に勝へず。」

「凡そ衲僧家は、時を知り節を知るを、名けて靈利の漢となす。所以に道ふ、佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべしと。一年三百六十日、一日十二時辰、虛しく棄つる底の時節なし。釋迦老子、達磨大師、皆是れ此の時節に應じ、出で來つて大法輪を轉じ、大妙用を顯す。乃至、自餘の諸大老、情と無情と、盡く是れ時に隨つて受用す。故に曰く、『時節既に至れば、其の理自ら彰はる』と。若し佛性の義を論せば、人々具すと雖も、天眼も也た看難し、箇々備ふと雖も、天耳も也た聽きがたし。然も是の如くなりと雖も、時節既に至れば、其の理自ら彰はる。眼を以て見るべく、耳を以て聽くべし、見聞の及ぶところ、一々皆是れ本

㊀法々。一法一法悉皆本來の法なり。

㊁針錐。蟲を知らないで亂りに針を刺すと人を殺す。

㊂屏營。恐懍の義、三國志の吳語に「山林中に屏營彷徨す」とあり、是れより轉化して表箋の通語となりしなり。

來の消息、本地の風光、今日人天普く會す。若し此の時節因緣を知らば、凡を轉じて聖となし、同じく、大光明藏三昧の中にあつて遊戯せん。」

擧す、太宗皇帝因に僧あり、朝見、座を賜ふて宣問す、「何の處よりか來る。」僧奏して云く、「廬山の臥雲庵。」帝云く、「㋐臥雲深き處天に朝せず、甚麼としてか這裡に至る。」僧無語。師云く、「太宗㋑日照して天臨み、幽として燭さざるとなし。當時若し臣僧に、臥雲深き處天に朝せず、甚麼としてか這裡に至ると問はゞ、便ち奏して云はん、㋒遠く聖恩を蒙ると、管取せん皇情大いに悅ぶことを。」

八月旦兩班を謝する上堂、「雨炎暑を洗ひ、徧界清涼、白露珠を垂れ、槿花煙を凝す。頭々轍に合し、東西原に逢ふ。何が故ぞ是の如くなる。」拂を擊つて云く、「才を量つて職に補す。」

九月旦上堂、「頭々是、物々是、塞鴈長空を過ぎ、蟋蟀草底に吟ず。㋓三家村田井水、一々他物にあらず、箇々自己に歸す。且く道へ、何を以てか驗とせん。」拄杖を卓して云く、「公驗分明。」

重陽上堂、「天地同根、萬物一體、大千を方外に抛ち、須彌を芥子に納る。卷舒我れにあり、縱橫妙を得。左之右之、是不是なし、何を以てか驗となす。」拂子を擊つて云く、「重陽九日菊花新なり。」

㋐臥雲深處。白雲堆々裡に安臥して、天子に見えずと云ふ原語。

㋑日照天臨。天然の伶俐底を云ふ。

㋒遠く聖恩を蒙る。廬山の山奥まで聖恩を蒙る。

㋓三家村田井水。昔萬壽のあたりは茅屋一兩家に、はれ釣瓶の野井を認めしなり。

臘月旦上堂、「今朝臘月一、那事分明に極る、徧界分外に寒じ、萬里一條の鐵。」

㋔二月旦上堂、「春山亂青を疊み、春水虛碧を漾はす、寥々たる天地の間、獨立望何ぞ極らん。山僧の此の萬壽に住すること、恰も雪竇老人に似たり、東西山あり水あり、今日覺えず眸を擡げて、清興太だ遠きことあるを。何ぞ也た是の如くなる。」拄杖を卓すること一下して云く、「四海五湖皇化の裡、知らず何の處か是れ封疆。」

龜山法皇の㋕大祥、勅を奉じて嵯峨殿に就いて陞座、師香を拈じて云く、「此の香、天地覆載し、日月照臨し、瑞を爲し祥を爲し、雲と爲り蓋と爲る。爐中に熟向して、禪定法皇の爲にし奉る。恭しく願はくは、心華長く禪林無盡の晨に開き、玉葉鎭に御園萬古の春に若しきことを。」

師衣を斂めて座に就いて云く、「千聖の靈機、全く掌握に歸し、列祖の命脈、只だ目前にあり。此の旨を領得する底あることなきや。」僧問ふ、「金鷄曉を唱へ、玉鳳花を含む、一句無私、請ふ、師祝聖。」師云く、「天高うして群象正し。」僧云く、「只だ一句無心の法を將つて、仰いで堯天舜日の明を祝す。」師云く、「四海九州、雷動じ風行く。」僧云く、「昔日㋖梵王、佛の說法を請ふとき、花を雨らし地を動す。今日聖主、師の說法を請ふ、何の祥瑞かある。」師云く、「恁麼なれば則ち四衆恩に霑ひ去らん。」師云く、「闔

㋔嘉治元年の二月、師七十二歲なり。

㋕大祥は三年忌なり、大祥小祥は禮の喪禮に出づ、後宇多院の御父なり、故に師を請じて此の導師とせられしなり。

㋖梵王。法華化城喩品にあり。

國威く知る。」僧云く、「前に釋迦なく、後に彌勒なし、正當恁麼の時、禪定法皇何の處にあつてか作佛し去る。」師云く、「㊥徧界曾て藏さず。」僧云く、「記得す、肅宗皇帝、忠國師に問ふ、『如何なるか是れ㋖十身調御。』師云く、『檀越、毗盧頂上を蹈んで行け』と、此の意如何。」師云く、「歩々清風起る。」僧云く、「帝云く、『寡人不會。』國師云く、『自己の清淨法身を認むること莫れ』と、又作麼生。」師云く、「玄關を瞥轉し去る。」僧云く、「今日如何なるか是れ十身調御と問はゞ、和尚如何が祗對せん。」師云く、「巍々堂々、煒々煌々。」僧云く、「優曇花綻びて普天香し」と。便ち禮拜す。師云く、「時節逢ひ難し。」

師乃ち云く、「聲前の一句、乾坤未だ剖れざるに早く漏逗す、末後の一機、世界纔かに分れて便ち現成す。佛祖不傳の妙、觸處に全く彰る。人天性命の道、當陽に顯露す。天に輝き地を鑑み、色に透り聲に透る。歴代の祖師、天下の衲僧、千般の伎倆を做し盡せども、總に這の影子を出でず。臣僧紹明、今日恭しく聖旨を奉じ、高く此の座に陞る。未だ免れず、佛祖未行の令を行じ、衲僧未拈の機を用ふることを。」驀に拄杖を拈じ、禪床に靠けて云く、「且く道へ、是れ何の宗旨ぞ。便ち見る、君臣慶會、時清く道泰かに、堯天舜日、共に昇平を樂むことを。且く闕を望み恩に酬ゆるの一句、作麼生か道はん。」拄杖を卓して云く、「但だ見る皇風の一片となることを。知らず何の處か是れ封疆。

㊥徧界曾て藏さず。風吹き日炙す、皆是れ法皇の面目なり。

㋖十身。般若五百六十八卷に、「何をか十身となす、一には平等身、二には清淨身、三には無盡身、四には嚴修身、五には法性身、六には離導問身、七には不思議身、八には寂靜身、九には虛空身、十には妙智身。」

臣僧紹明、恭しく惟れば、太上天皇、昔日靈山會上にあつて、親しく如來の㋙記莂を受く。今日王舍城中に於て正宗を扶竪し、祖道を光贊す。山野をして宗乘を擧揚し、人天大會、草木業沐、情と無情と、均しく光輝を蒙り、同じく恩澤に霑さしむ。臣僧紹明、下情、感激屏營の至に勝へず。」

又云く、「從上の佛祖、世に出興し、只だ本分の一着に據りて、略目前の些子を露はす、閃電光・擊石火の如くに相似たり。眼を眨得し來れば、三千里外。然も是の如くなりと雖も、若し本分を論ぜば、斷々として言語の上にあらず。所以に釋迦老子、㋗摩竭に室を掩ひ、此の事を思惟す。身を藏して影を露はす、天の普蓋するが如く、地の普擎するに似たり。當時一衆、若し這裡に向つて、一時に會し去らば、那ぞ更に四十九年、三百餘會、許多の葛藤を說き盡さん。又一日大衆雲集し定まる、世尊陞座、一言を措かず、明かなることは杲日の如く、徧界藏さず、一衆猶ほ未だ會せざることあり。文殊白槌して云く、『諦觀法王法、法王法如是。』樵子の徑によらずんば、爭か㋘葛公が家に到らん。後來雪竇の明覺大師、頌して云く、『列聖叢中作者知る、法王の法令斯の如くならず、會中若し㋚仙陀の客あらば、何ぞ必ずしも文殊一槌を下さん。「雪竇老漢、世尊未登座の時に向つて、箇の

㋙記莂。佛法は國王大臣有力の檀越に付囑するの記莂なり。

㋗摩竭に室を掩ふ。諸佛要集經に、「世尊、摩竭陀國にあり、阿難に言つて曰く、諸の弟子人天四衆、我れ常に說法し、敬仰を生ぜず、我れ今因沙薯室の中に入つて、坐夏九旬せん、忽ち人あり、法を問はゞ、一切法不生、一切法不滅と說けと、言ひ訖つて、室を掩ふて坐す。」

㋘葛公。名は玄、丹霞洞に在つて鍊丹し、飛來峰に得道す、文殊の手引によらずんば、世尊の不言は分らぬと。

㋚仙陀の客。伶俐の漢と云ふが如し、のみこみの早き人を仙

消息を通じて、恁麼に頭出す、却つて些子に較れり。ある時外道、佛に問ふ、『有言を問はず、無言を問はず』と、世尊良久す、外道悟り去つて、讃嘆して云く、『世尊大慈大悲、吾が迷雲を開いて、吾をして得入せしむ』と、只だ這の外道、也た是れ鉢漢、若し是れ世尊未だ良久せざる以前に悟り去らば、異道の名を免れ得ん。何に況んや、而今多くは是れ世尊良久の處に向つて會せんと要す、劍去つて久し矣、方に乃ち舟を刻む。其れ如し然らずんば、又甚麼の處に向つてか會し去らん。妨げず、目前に於て高く眼を著くることを。一見便見、一得永得なるも、未だ分外となさず。世尊既に是れ是の如し、況んや又祖師門下には、目前に一條の活路あり、他の一切の有情無情をして、同じく此の中に入つて、共に大安樂大自在の地に到らしむ。何が故ぞ是の如くなる、他家曾て㋔上頭の關を踏む。」

復た擧す、唐の太宗皇帝、因に僧朝見、奏して曰く、「陛下還つて記得すや也た無や。將に謂へり、皇帝㋕忘却す」と。帝云く、「何の處にか相見し來る、日照し天臨む。」僧云く、「靈山に一別してより、直に如今に到るまで、來風辨ずべし。」帝云く、「何を以てか驗となす。」僧無語。師拈じて云く、「皇帝天鑑無私、這の僧無語、公驗甚だ分明なり。何故ぞ、既に是れ親しく龍顏に對す。」

陀の客と云ふ、涅槃經に出づ。

㋔上頭の關。父子不傳の呼吸なり。

㋕忘却。靈山の記莂を忘却するなり。

萬壽寺語錄 終

巨福山建長禪寺語錄

侍者克原編

師、德治二年臘月二十九日に於て入院。

山門、「南來北來、東より西に過ぎ、㋑諸方の門戸を歷遍し、却つて這裡に向つて歸るを知る。且く道へ、這裡是れ甚の所在ぞ。」喝一喝して云く、「到るもの方に知る。」

佛殿、「看よ看よ、古佛猶ほ在り、切に忌む當面に㋺諱却することを。」便ち座具を展ぶ。

土地堂、「我れは說法、儞は護法、須らく知るべし、心同じく道同じきことを。㋩大家齊しく力を着け、舊家風を扶起せよ。」

祖師堂、「諸祖の三昧、山僧知らず、山僧が三昧、諸祖知らず。既に是れ相知らず、㋥甚によつてか特地に炷香作禮す、彼此出家兒。」

方丈、「德山の棒、臨濟の喝、㋭這裡一時に倚閣、甚麼の處に向つてか相見せんと擬す。吽々、且く門外に居く。」

㋑諸方の門戸。師家の門庭を蔽遮するなり。

㋺諱却。佛の前に垣をゆふなり。

㋩大家。大權菩薩の皆標方。

㋥甚によつてか特地。齊と楚とは風馬牛も相關せざるなり、甚によつてか特地に作禮す。

㋭這裡一時に倚閣。倚閣は手を付けないと云ふこと、方丈では左樣の用事なし。

㋩府帖、「㋥山川を該括し、天地を包容す。玉轉じ珠回り、祥をなし瑞を爲す。西來的々の意を揮輝して、此れより拂々香風起る。」

諸山疏、「桑を指して柳を罵る、叢林の風義、惡語人を傷ふ、一團の和氣。」

山門疏、「㋧未だ擧せざるに先づ領じ、未だ言はざるに先づ通ず。家裡の人、家裡の話を說く、字々句々皆春風。」

江湖疏、「㋨一言に道ひ盡して、頭々轍に合し、月四海に明かに、風六合に淸し。」

法座、「向上の一路、嶮崖の一機、步を擧すれば踏着し、口を開けば說着す。須彌燈王、㋭這邊を過ぎ着。」

師陞座、香を拈じて云く、「此の㋬一瓣の香、爐中に爇向して、恭しく爲に、

今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬々歲を祝延したてまつる。陛下、恭しく願はくは、金輪統御して、天基永く固く、四海仁に歸して、萬邦拜手せんことを。」

次に拈香して云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して、

㋩府帖。鎌倉幕府の請狀なり。

㋥山川天地は將軍の德に就いて、玉轉珠回は機用に就いて、祥をなし云々は其の効果、西來的々は其の修用なり。

㋧未だ擧せざる云々。こちらの注文する迄にちやんと承知して居る、こちらの發言しないに、ちやんと屆いて居る。

㋨一言云々。是れは禪中妙句を踏んで挨拶ありしなり。

㋭這邊云々。着は助辭、須彌燈王佛はこゝらあたり通らるゝと。

㋬後二條天皇のための拈香なり。

㋮一品親王。久明親王なり。

㋯一品親王征夷大將軍家の爲にし奉る。伏して願はくは、威三邊を鎭し、德四海に被り、永く上聖を佐けて、普く下民を澤せんことを。

此の一瓣の香、爐中に爇向して、本寺大檀那㋰最勝園寺殿の爲にし奉る。伏して願はくは、壽は南山に等しく、福は北溟より深く、皇家に柱石として、佛法に㋱金湯たらんことを。

此の香、爐中に爇向して、前住大宋徑山興聖萬壽禪寺虛堂和尙大禪師の爲にし奉り、用つて法乳の恩に酬ゆ。」

師衣を斂め、座に就いて云く、「太華を㋳分破し、滄溟を劈開す。當機覿面、誰か敢て辨明せん。有りやありや。」僧問ふ、「大法幢を建て、大法輪を轉じ、四衆筵に臨む、請ふ師祝聖。」師云く、「瑞雪地に滿ち、祥雲空に徧し。」僧云く、「只だ金殿に禪を譚じて㋲龍顏を怡悅するが如きんば、今日の勝會と是れ同か是れ別か。」師云く、「限りなきの淸風、來つて未だ已まず。」僧云く、「恁麼なれば則ち寰中は天子の勅、塞外は將軍の令。」師云く、「一句に道著す。」僧問ふ、「記得す、㋴閻王、羅山和尙を請じて開堂、山陞座、僧伽梨を欽めて乃ち曰く、『珍重』と、便ち下座、意旨如何。」師云く、「㋷龍袖拂開して全體現ず。」僧云く、「閻王近前、手を把つて

㋯一品親王征夷大將軍。北條貞時なり。

㋰最勝園寺殿。北條貞時なり。

㋱金湯。外護の意、漢書蒯通傳に「金城湯池攻むべからず」の語あり、金鐵の城、沸騰の壇近づきがたきなり。

㋳分破。太華山を眞二つに分ち、東海を縱橫につんざく、衲僧得力の處。

㋲龍顏。後宇多院の召に應じて宮中に法を說く。

㋴閻王。王審知なり、道閑禪師を請じて羅山に居らしむ。

㋷龍袖拂開。龍は龍なり、かき合せし袖を一時に開くなり。

曰く、『靈山の一會、何ぞ今日に異ならん』と、又作麼生。」師云く、「㋐天鑑私無し。」僧云く、「山曰く、『將に謂へり、是れ箇の俗漢』と、意那裡にかある。」師云く、「君臣道合。」僧云く、「後來白雲の端和尚頌して曰く、『㋑紛々たる雪影闘天に耀く、闘王欣逢して倍樂然、一旦春風大地を吹かば、更に㋒一點の階前に在るなし』と、此の意如何。」師云く、「錦上に花を添ふること又一重。」僧云く、「果して是れ人天の大導師。」便ち禮拜す。

師乃ち云く、「道は目前にあり、四面の青山碧空を磨す、目前覩難し、雙澗の泉水湛へて藍の如し。這裡に向つて會し去らば、人々分上、壁立萬仞、箇々面前、大寶光を飛ばす。朝遊夕處、賓主歴然、佛祖の命脈、全く掌握に歸し、衲僧の巴鼻、觸目現成。直に得たり、瑞雪地に滿ち、祥雲空に徧きことを。正に是れ鷲山成道底の時節、巨福峯鎌倉縣、和氣靄然たり。鷲峯の消息、正に斯の時にあり、少室の家風、又見る重ねて新なることを。正恁麼の時、畢竟㋓誰か恩力を承くる。」拄杖を卓すること一下して云く、「㋔天上に星あり皆北に拱す、人間水として東に朝せざるなし。」

復た擧す、㋕乳源和尚、衆に示して云く、「西來的々の大意、擧唱し易からず。」時に僧あり出づ、源便ち打つて云く、「是れ甚麼の時節ぞ出頭し來る」と。師拈じて云く、「乳源只だ諸人の時を知り節を知らんことを要す。此の如きの㋖業々、這の僧、衆を犯して出づ。惜むべし未だ肯て㋗全く領せざることを。」

㋐天鑑無私。天の照鑑にはかげひなたなし。
㋑紛々雪影。羅山を賞美す、闘王欣逢は、珍重の戰法を聞いて樂む處。
㋒一點。一點の雪も一點の俗塵もなし、將に謂へり、是れ箇の俗漢を拈弄することを。
㋓誰か恩力。天子樣と將軍樣の御恩なり。
㋔天上に星あり。北辰其の處に居て衆星之に拱ふ。
㋕乳源。馬大師の法嗣。

當晚小參、「法に定相なく、緣に遇ふて卽ち宗、立處皆眞、方に隨つて主となる。所以に山僧帝都にありて法幢を建つる、其の緣にあらざることなし。關東に來りて宗旨を立す、其の處を擇ばず。直に得たり、處々原に逢ひ、頭々轍に合することを。便ち見る、年窮り歲暮れて、㋘破沙盆子掛けて壁上にあり、臘盡き春回つて、大庾嶺上、㋙古佛光を放つ。恁麼底の時節、時に應じて㋚祐を納るゝの一句、作麼生か道はん。」拂子を擊つて云く、「四海の清風已に㋛駱蕩、㋜十洲の月色人を照して新なり。」

復た擧す、潙山因に僧問ふ、「如何なるか是れ道。」山云く、「無心是れ道。」僧云く、「學人不會。」山云く、「不會底を會取せよ。」僧云く、「如何なるか是れ不會底。」山云く、「只だ是れ儞、是れ別人にあらず。」師拈じて云く、「潙山恁麼に道ふ、明投暗合、然も是の如くなりと雖も、諸人切に忌む恁麼に會することを。何が故ぞ、㋝靈蹤更に猿啼の處あり。」

正旦兩班を謝する上堂、「風は虎に從ひ、雲は龍に從ふ。左之右之、是

㋖業々。汲々と同意ならん。
㋗全く領せざることを。頭の先から足のつま先まで魔摩羅も全點しない。
㋘破沙盆。破れたすりばちなれども、此の處はふちのもげたざると譬すべし。
㋙古佛光を放つ。清香十里に香ばし。
㋚祐を納る。天の祐助を容納する。
㋛駱蕩。駱の字は駱の誤ならん、駱蕩は春色舒放なり。
㋜十洲。十洲三島は仙人の住居なり。

不是なし。㊁七穿八穴、㊂吉にして利ならざることなし、何が故ぞ。」卓拄杖、「花の開くことは㊃栽培の力を假らず、自ら春風の伊を管帶するあり。」

佛涅槃上堂、僧問ふ、「春日熙々、春風浩々、桃腮雨に媚び、柳眼煙を鎖す。如何なるか是れ瞿曇の眞面目。」師云く、「遍界曾て藏さず。」僧云く、「塵塵等しく是れ春光の裡、雙樹甚によつてか榮枯ある。」師云く、「無榮枯の處に向つて看よ。」僧云く、「㊄生と道はず滅と道はず、唇吻に涉らず、願はくは一句を聽かん。」師云く、「天は東南に高く、地は西北に傾く。」僧云く、「只だ㊅今日は卽ち有、明日は卽ち無と道ふが如きんば、如何が體會せん。」師云く、「桃花は紅に、李花は白し。」僧禮拜す。又僧問ふ、「十方㊆薄伽梵、一路涅槃門、未審し路頭甚の處にかある。」師云く、「脚下を看よ。」僧云く、「乾峯拄杖を以て劃一劃して云く、『這裡にあり。』と。」師云く、「路頭分明。」僧云く、「記得す、世尊入涅槃に臨み、手を以て胸を摩し、普く大衆に告げて云く、『汝等諦かに吾が紫磨金色の身を觀、瞻仰して足ることを取れ、後悔せしむること莫れ』と、意旨如何。」師云く、「末後慇懃。」僧云く、「世尊又云く、『若し吾れ滅度すと謂はゞ、吾が弟子にあらず、若し吾れ滅度せずと謂はゞ、亦吾が弟子にあらず、畢竟如何が委悉せん。」師云く、「平生の肝膽、人に向つて傾く。」僧云く、「飲光來る時、更に雙趺を出す、是れ何の心行ぞ。」師云く、「恩大にして酬い難し。」僧云く、「爭奈せん今に至るまで骨節皮竅に連ねて、暴露す春風百草頭。」師云く、「狼藉少からず。」僧云く、「和尙如何が伊を蓋覆せん。」師云く、「一口に乾坤を呑却す、甚麼の處に向つてか摸索せん。」僧云く、「別に報恩底の句あること莫しや。」師云く、「恩を報じ了れり。」僧便ち禮拜す。師乃ち云く、「日暖に風和し、㊇萬葉敷榮し、釋迦老子、此の時節に於て、百花叢裡に渾身を藏し得たり。然も是の如くなりと雖も、覺えず㊈脚の露るゝことを。直に如今に至つて收不得、春風に㊉惱亂して卒に未だ休せず。」

四月旦上堂、「三月春已に去り、九夏今初めて來る、建長只だ順時保愛を得たり、諸人也た是れ自ら合に節を知るべし。其れ如し未だ然らずんば、只だ見る㊋落紅風の掃ひ盡すことを、豈に庭樹綠陰の深きを知らんや。」

浴佛上堂、「母胎を未だ出でざるに、度人し畢んぬ、也た是れ我が家の第二機、那ぞ更に天を指し復た地を指さん。端なく千古㊌閑非を惹く、過犯彌天、如何が㊍煎雪せん。」拄杖を卓して云く、「㊎之を

㊆薄伽梵。仙境に獵の嗜くのは一すこたへると。

㊁七穿八穴。七通八達と見るも可なり、人間の七竅八穴と見るもよし。

㊂吉にして利ならざることなし。立春大吉。

㊃栽培の力。强ひて助長せずとも、時節來れば果自ら成る、骨折れば運が開ける。

㊄生と道はず云々。世尊滅する時、手を以て胸を摩して曰く、「汝等若し吾れ滅度すと謂はば、吾が弟子にあらず、若し吾れ滅度せずと謂はば、亦吾が弟子にあらず。」

㊅今日は卽ち有云々。涅槃經遺教品に、爾の時阿泥樓豆、阿難を安慰して言く、「咄哉、何ぞ愁をなす、如來涅槃の時至るが若きんば、今日ありと雖も明日は卽ち無し。」

㊆薄伽梵は佛のこと、十方薄伽梵は、十方法界悉皆成佛と同じ。

㊇葉。しげることなり、艸の盛なる貌。

㊈脚露。頭かくして尻まくり。

㊉惱亂。紅々白々、黃紫碧廿四番の親世音。

㊋落紅云々。光のどけき春の日に靜心なく花の散るらんなり。庭樹云々は青苔日に厚うして自ら塵なき底。

㊌閑非。閑はむだごとなり、むだなしぞこなひ。

㊍煎雪。煎は洗と同音相通ず。

㊎之を齊しうする。如來の恥かくしに、大應國師が雪を焚き拜をする。

齊しうするに禮を以てす。」

結夏小參、僧問ふ、「西天は蠟人を驗となす、建長門下は何を以てか驗となす。」師云く、「露柱燈籠。」僧問ふ、「未審し意旨如何。」師云く、「汝が面門を照破す。」僧又問ふ、「乾峰和尚、衆に示して云く、『法身に三種の病、二種の光あり、一々透過して始めて穩坐』と、意旨如何。」師云く、「㊐蛇、竹筒に入る。」『雲門衆を出でゝ云く、『庵内の人什麼としてか庵外の事を見ざる』と、此の意如何。」師云く、「㊋家裏の人、家裏の話を說く。」「峯呵々大笑す。門云く、『猶ほ是れ學人が疑處。』峯云く、『闍梨是れ甚麼の心行ぞ』と、此の意如何。」師云く、「㊌彼此知ることを要す。」「門云く、『也た和尚の委悉せんことを要す』と、又如何。」師云く、「㊍果然果然。」僧云く、「只だ乾峯和尚の法身に三種の病、二種の光あり、一一透得して初めて穩坐と云ふが如きんば、和尚如何が祇對せん。」師云く、「㊎一二三四五。」僧禮拜す。

乃ち云く、「我が宗に語句なく、一法の人に與ふるなし。須らく知るべし、當人分上、箇々眼乾坤を蓋ひ、人々舌梵天を拄ふることを。擧足下足、圓覺伽藍にあらざることなく、語默動靜、總に是れ平等性智、劒樹刀山、鑊湯爐炭、一切處に安居し、一切處に禁足するも、未だ分外となさず。建長與麼の告報、只だ諸人の自ら一條の活路子を行せんことを要す。其れ如し未だ然らずんば、㊁夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。」

復た黃檗、衆に示して云く、「汝等諸人、盡く是れ㊅噇酒糟の漢、與麼に行脚せば、何の處にか今日あらん。還つて大唐國裡に禪師なきことを知るや」の公案を擧す。師拈じて云く、「這の老漢、㊇敗闕少からず。且く道へ、那裡か是れ他の敗闕の處、諸人若し也た勘辨し得出さば、但だ親しく黃檗爲人の處を見るのみにあらず、亦乃ち自己の光明を表顯せん。」

次の日上堂、「衲僧家は尋常、千聖を慕はず、己靈を重んぜず。甚麼によつてか四月十五日、釋迦老子二千年前、漫天の網子裏に墮在して、一歩子を動し得ざる。」拂子を擊つて云く、「㊈犀は月を翫ぶによつて文角に生じ、象は雷に驚されて花牙に入る。」

兩班を謝する上堂、「看よ看よ、東邊底、頂門上杲日空に當る、看よ看よ、西邊底、脚跟下清風地を匝る。一進一退、頭正しく尾正し。建長恁麼に道ふ、意何にかある。」良久して云く、「才を量つて職に補す。」

上堂、擧す、僧、鏡清に問ふ、「學人未だ源を知らず、請ふ師方便せよ。」清云く、「是れ什麼の源。」僧云く、「其の源。」清云く、「若し是れ其の源ならば、何の方便かあらん。」師云く、「鏡清と這の僧との相見は且く置く、如何なるか是れ其の源。」拄杖を卓すること一下して云く、「㊉行いては到る水の窮るとこ

㊐蛇竹筒に入る。もがきたふすと云ふことか。
㊋家程の人云々。細々と內證ごと云ふてゐるわい。
㊌彼此知ることを要す。古人云ふ、ありがたい詞でござると。
㊍果然果然。さてこそさてこそ。
㊎一二三四五。いろはにほ三二一。

㊁夜行。暗い處でうろつくな。
㊅噇酒糟。粕くらひと云ふこと。
㊇敗闕。お山の大將おれ獨り。
㊈犀は水中に棲む、明月水を照して角中に文を生ず。
㊉行いては到る云々。こつんと云はして、行いては、坐してはと唱へられた。

ろ、坐しては看る雲の起るとき。」

七月旦上堂、僧問ふ、「⑪火雲空に散じ、秋期時を待つ、萬緣に涉らず、如何が商量せん。」師云く、「曉風落葉を吹き、秋信梧桐に到る。」僧云く、「黃龍に三關の語あり、還つて咨參を許すや無や。」師云く、「問ひ將ち來れ。」僧云く、「我が手何ぞ佛手に似たる、意旨如何。」師云く、「散花燒香。」僧云く、「我が脚何ぞ驢脚に似たる、又如何。」師云く、「渡水過橋。」僧云く、「如何なるか是れ學人生緣の處。」師云く、「趙州㉘東院の西。」又僧問ふ、「蟬は木末に鳴き、蛩は壁根に吟ず、見成の公案、迥に商量を絕す。唇吻に涉らず、如何が津を通せん。」師云く、「崑崙生鐵を嚼む。」僧云く、「如何なるか是れ奪人不奪境。」師云く、「夜深けて月孤明。」僧云く、「如何なるか是れ奪境不奪人。」師云く、「花散じ盡して鳥猶ほ來る。」僧云く、「如何なるか是れ人境兩俱奪。」師云く、「花散じ盡して鳥來らず。」僧云く、「如何なるか是れ人境俱不奪。」師云く、「茶に遇ふては茶を喫し、飯に遇ふては飯を喫す。」僧又問ふ、「記得す、陸亘大夫、南泉に問ふ、『弟子、家中に一片の石あり、ある時は坐し、ある時は臥す。鐫つて佛となし得んや』と、此の意如何。」師云く、「儞が鐫つて佛となすに任す。」僧云く、「泉云ふ、『得ん』と、又如何。」師云く、「果然果然。」僧云く、「又問ふ、『得ざることなしや。』泉云く、『得す』と、又如何。」師云く、「ある時は得、ある時は得す。」僧便ち禮拜す。

師乃ち擧す、乾峯和尙、衆に示して云く、「一を擧して二を擧することを得ざれ、一着を放過せば第二に落在す。」雲門衆を出でゝ云く、「昨日人あり、天台より來る、今朝却つて南嶽に往き去る。」師拈じて云く、「一人は高々たる峯頂に在つて立ち、一人は深々たる海底に在つて行く、⑪驀劄に相逢ひ、話し盡す山雲海月の意、然も是の如くなりと雖も、誰か是れ知音のものぞ。」

解夏小參、「長期短期、結制解制、靈山の舊話、古佛の家風、然も是の如くなりと雖も、衲僧家は⑦陳年の曆日に管せず、自ら⑦肘後の靈符あり。等閑に步を擧すれば、瞿曇の眼睛を踏著し、驀然として手を伸ぶれば、老胡の鼻孔に觸著す。東西南北、廻避するに門なく、四維上下、在處渠に逢ふ。頭々總に是れ生涯、物々妙用にあらざることなし。解結不二、與奪自在、直饒ひ與麼なるも、建長が拄杖猶ほ未だ放過せざることあり。何が故ぞ。」拄杖を卓して云く、「日月輪邊氣象高く、㋕魚龍穴下盤根固し。」

擧す、㊂大隋の眞和尙、因に僧辭す、隋問ふ、「什麼の處にか去る。」僧云く、「峨眉に普賢を禮し去

⑪火雲秋氣。熱火は虛空に消散し、爽涼の秋氣今將に至らんとす。

㉘東院の西。是れは面白き語にて、趙州が途で一婆に遇ふた、婆問ふ、「和尙いづれの處にか住すや、」州云く、「趙州東院せい、」州歸つて衆僧に問ふらく、『東院せいの「せい」の字如何なる字なが用ひし、』或るものは云ふ、「東西の西の字、」或るものは云ふ、「棲泊の棲の字」と、州云く、「汝等徒に疑ふ判官たり、」衆僧曰く、「和尙なんとしてか然か云ふや、」州云く、「汝が徒に字を識るが爲なり。」（會元の四）

⑪驀劄。驀直と同意。

⑦陳年の曆日。古こよみなり。

⑦肘後の靈符。左のかひなにぶらさげたるやくよけのお守りなり。

㋕魚龍穴下云々。奈落のどん底から生えぬいた樣な。

㊂大隋法眞禪師は長慶の法嗣。傳は會元四にあり。

る。」隋拂子を竪起して云く、「文殊普賢、總に者裡にあり。」僧一圓相を畫して、背後に拋向す。隋云く、「侍者一貼の茶を將つて、者の僧に與へ去れ。」師拈じて云く、「大隋拂子を竪起し、者の僧圓相を打す。賓主歴然、然も是の如くなりと雖も、隋云く、『侍者一貼の茶を將つて、者の僧に與へ去れ』と、且く道へ、佗を肯ふか他を肯はざるか、具眼のものは試みに辨取せよ。」

次の日上堂、「三月安居、㋐羱羊角を掛く、九夏自恣、猛虎林を出づ。行かんと要すれば便ち行く、凛々たる神威、迥に羅籠を絶す。住らんと要すれば則ち住る。壁立千仞、誰か敢て近傍せん。然も是の如くなりと雖も、」手を以て禪床を拍つて云く、「總に㋑者裡を出でず。」

中秋上堂、「寒山子、馬蕣箕、等しく是れ月を翫ぶ、建長門下、家風自ら別なり。別別、蝦蟇呑却す中秋の月。」

上堂、擧す、雲門大師、衆に示して云く、「乾坤の内、宇宙の間、中に一寶あり、形山に秘在す。」師拈じて云く、「山僧看來るに、此の寶但だ形山に秘在するのみにあらず、今朝情を盡して拈出して、大衆に普施せん。看よ看よ。」拂子を揮下して云く、「海人貴きことを知つて價を知らず、人間に留與して夜光と作す。」

九月旦上堂、「㋒庭に開く金菊宿根より生ず、來鴈新に聞く一兩聲、昨夜㋓七峯老興を索く、千思萬想天明に到る。」師拈じて云く、「五祖老漢、只だ人の時節を知ることを要す、諸人還つて知る麼。福峯今朝清興を發す。」

㋐羱羊。かもしか、角が屈曲してゐるから、夜さりは角を樹に掛けて外患を避く。
㋑者裡を出でず。出ました、大きな寒丸が。
㋒庭に開く云々。五祖法演禪師上堂。
㋓七峯。閣の名、海會寺にあり、海會は五祖の住せし處。

佛光忌、香を拈じて云く、「破沙盆を提起し、正法眼を滅却し、㋔眞如境を踏翻し、㋕圓覺海を抹過して、巨福峯頂に拶到す。直に得たり、白浪滔天、佛祖も廻避するに路なく、衲僧も卒に近傍し難きことを。謂ふと莫れ、而今光を韜み跡を晦すと。諱日斯に臨み、面目全く露る。」香を竪起して云く、「見る麼見る麼、一炷の香を燒いて、他の鼻孔を熏ず。佛光禪師、怪むことなかれ㋖觸忤することを。」

重陽上堂、「九月九是れ重陽、茱萸紫烟を凝し、黃菊露を帶びて香し。是れ禪ならず、是れ道ならず、畢竟如何。花根本艶なり。」

開爐上堂、拂子を竪起して云く、「只だ這の火種、人の見得することなし、「㋗龍淵水底より收拾し將ち來る、冷灰堆中に幾回か焰を發す。近傍せんと擬欲すれば、面門を燎却す。看る時見ざれば、暗昏々地。建長、儞諸人の爲に吹起せん。看よ。」拂子をもつて吹くこと一吹して云く、「各自に眉毛を照顧せよ。」

達磨忌上堂、「未だ西竺を離れずして㋘迷情を救ふ、東土人の此の意を知るなし。空しく少林に向つ

㋔眞如。佛光國師、京都の眞如寺に住す。
㋕圓覺。圓覺寺なり、拶到ほつきあたるなり。
㋖觸忤。角と角との突き合せ。
㋗龍淵。徑山方丈に龍淵室の額を掲ぐ。無準下なればなり。
㋘迷情。一華五葉、傳法偈中の文。

て安心を覓む、更に言ふ履を携へて還た歸り去ると。咦。元不來、今何ぞ去らん。㊐寥々たる千古、清風匝地。」

㋑大通忌、香を拈じて云く、「空劫以前、威音那畔、早く靈根あり、人の收得するなし。三世の諸佛、歷代の祖師、纔かに些子の氣息を得れば、敢て囊藏被蓋せず。頭を競ふて出で來つて、貴買賤賣、全提半提、横拈倒用して、一生拈弄し出さず。今日大通禪師三回の諱辰、㋔大檀那、山僧をして一炷の香を燒かしむ。山僧免れず分明に拈出して、他の鼻孔を熏ずることを。何が故ぞ是の如くなる。㋕同參面前、敢て自ら謾せず。」

次に㋖五部の大乘經を讃す、師乃ち陞座して云く、「恁麼恁麼、三世の諸佛說不到、不恁麼不恁麼、歷代の祖師提不起。不恁麼の中却つて恁麼、天下の衲僧名狀し出さず。恁麼不恁麼總に得ず、盡大地の人鋒を亡じ舌を結ぶ、便ち與麼に去る、土曠かに人稀なり。若し這裏に向つて身を轉じて活路を行じ、手を撒して那邊に出づれば、便ち見る、大地山河、草木叢林、一々全體の機を發し、明暗色空、見聞覺知、頭々眞宗にあらざることなし。所以に道ふ、法々隱藏せず、古今常に露る。大藏小藏、這裏より流出し、大機大用、此によりて頓發す。如來禪、祖師意、向上の

㊐寥々たる千古。あなわびし、鳥だに鳴かぬ奥山は。
㋑大通。西澗の子曇、大通禪師と謚す、石帆衍の法嗣。本錄の跋文を書す、極めて能書なり、遺墨多く世に存す。
㋔大檀那は北條貞時なり。
㋕同參面前。他人の前で吹く樣な法螺は吹けぬて。
㋖五部。般若部、寶積部、大集部、華嚴部、涅槃部、之れ五部の大乘と云ふ、慶讃ありしと見ゆ。

機、末後の句、又何の處よりか得來る。住みね住みね、只だ老胡の知を許して老胡の會を許さず。今日大通禪師三回忌斯に臨む、諸門弟子、山僧を請じて正法眼藏を擧揚せしむ。殊に知らず、山僧未だ座に登らざる以前、法々全く彰れ、法恩已に畢んぬ。且く道へ、報恩已に畢る底の一句、又作麼生。吾れ爾に隱すことなし。」

㋗虛堂忌拈香、建長、這の老和尙と相隨ふこと多年、面々相覩、眼々相照す。所以に一年一度、一炷の香を燒き、一甕の茶を點ず。㋘楊岐の女人拜をなさず、㋙蘿蔔從來鎭州より出づ。」

新舊兩班を謝する上堂、「一步を進むるときは則ち珠盤に走り、一步を退くるときは則ち盤玉を走らす。轉轆々、活鼇々、全賓全主、全是全非、甚によつてか是の如くなる。」良久して云く、「彼此出家兒。」

冬至小參、「陰魔㋚殂伏し、陽氣未だ生せず、大地平沈、渾べて縫罅なし。老胡名狀し出さず、衲僧覷視するに門なし。便ち恁麼にし去らば、土曠かに人稀にして、相逢ふもの少なり。建長、今夜一線道を放ち、一針線を通じ去らん。」拄杖を卓すること一下して云く、「一氣此より潛通し、萬彙此より發生す。便ち見る、枯木花を開き、石笋條を抽き、普天の和氣、徧界春の如きことを。正恁麼の時、黑漆の拄杖子、又作麼生。」拄杖を靠けて云く、「等閑に靠却す禪床角、限りなき

㋗虛堂忌。十月七日なり。
㋘楊岐女人拜。楊岐、慈明の忌辰に、齋を設く、衆僧に集まる、楊岐眞前にて、兩手をもつて拳を拈じて頭上に安じ、座具を以て劃一劃して、一圓相を打し、便ち燒香し、退身三步、女人拜をなす。
㋙蘿蔔云々。宮重大根は尾張の產物。
㋚殂伏。殂は逝なり。

の風光誰にか付與せん。」

㊀慈明和尙、冬日僧堂前に榜出するの公案を擧す。拈じて云く、「若し是れ人天の眼目にあらずんば、辨明をなしがたし。然も是の如くなりと雖も、上に三圓相を書し、下に九畫を書す。且く道へ、甚麼邊の事をか明す。來日一陽生ず。」

十一月半上堂、㊁歸宗和尙、時に僧ありて辭す、宗云く、「時寒し、途中善爲せよ。」拈じて云く、「歸宗年老い心孤にして、慇懃に送行す。建長は卽ち然らず、若し僧ありて辭せば、只だ他に向つて道はん、㊂去れと。何か故ぞ、家々の門首長安に透る。」

臘八上堂、僧問ふ、「臘雪寒崗に滿ち、溪梅一朶香し。底事ぞ現成の處、請ふ師更に擧揚せよ。」答へて云く、「天は是れ天、地は是れ地。」進んで云く、「記得す、㊃孝宗、佛照に問うて云く、『雪山六年の所成は何事ぞ。』照奏して云く、『將に謂へり、陛下忘却す』と、意旨作麼生。」答へて云く、「天鑑私無し。」進んで云く、「孝宗龍顏大いに悅ぶと、是れ何の道理をか得たる。」答へて云く、「㊄日照天臨。」進んで云く、「當時若し孝宗の雪山六年の

㊀慈明云々。是れは國師は全則を擧揚せられしも、諸人皆知るの公案なれば、語錄の編者が省略せしなり。

㊁傳燈錄七に、馬祖の法嗣廬山歸宗智常禪師、僧あり辭し去る、宗近前來と喚び、「吾れ汝が爲に佛法を說かん、僧近前す、宗曰く、「汝諸人靈く事のあるあり、汝他日道理に却り來つて、人の汝を識る無けん、時寒し途中善爲せよ」と。善爲とは鉢を大切にせよと云ふとなり。

㊂去れ。出で失せよ。

㊃孝宗。南宗の第二世、佛照は大慧の法嗣佛照德光にて、化門旺盛の人なりしなり、孝宗が手紙で此の事を問はれしに、佛照折節施主家の齋に赴き、席上にて此の返事を書きて奏上せしなり。

所成何事ぞと問ふに遇はゞ、未審し和尙如何が奏對せん。」答へて云く、「雪山の雪寒骨に徹す。」進んで云く、「只だ世尊未だ明星を見ざる以前の如きんば、甚の處に在つてか行履せん。」答へて云く、「鷲峯の山色㊅青更に青。」僧便ち禮拜す。

師乃ち云く、「老瞿曇、老瞿曇、來由あり、巴鼻なし。元閻浮に降らず、何ぞ曾て雪嶺に上らん。若し明星を見て悟り去ると言はゞ、虛を承け響を接し、錯を將て錯に就く。既に然も是の如し、甚によつてか㊆靈山に密旨ある。」良久して云く、「參。」

上堂、擧す、金峰、僧あり來り參ず、峰云く、「吾れに一則の因緣あり、儞に擧似せん、切に忌む錯つて會することを。」僧聽く勢をなす。峰云く、「早く錯り了れり。」僧拂袖して便ち出づ。峰云く、「雪上に更に霜を加ふ。」師拈じて云く、「高山流水、子規能く之を聽く。是なることは則ち是なり、且く道へ、峰、雪上に更に霜を加ふと云ふ、又作麼生。

㊇限りなき清風來つて未だ休せず。」

新に昭堂を開くの陞座、乃ち云く、「乾坤未だ剖れず、㊈大塊無象、諸佛出世せず、祖師西來せず。人々頂門に眼を具し、箇々皮下に血あり、純ら無爲の化を樂み、太古の風を追回す。所以に德山云ふ、

㊄日照天臨の文字は多く天然のもちまへと云ふ意に用ふ。

㊅青更に青。藍より出で藍よりも青し。

㊆靈山。末後靈山會上に、世尊密旨あり、迦葉覆藏せずとにどうじや。

㊇限なき清風來つて休せず。寂ぐその上に小便垂れるといふ事なりと古人云へり。

㊈大塊。莊子齊物論に出づ、大塊のあくびを名けて風と云ふ、或る時はさあ〜と云ひ、或時はぶう〜と云ふとあり、大塊は一物なき處を云ふ。

『吾が宗に語句なく、一法の人に與ふるなし。』趙州云く、『佛の一字、我れ聞くことを喜ばず。』點檢し將ち來れば、二老漢、只だ解す無佛の處に尊と稱することを。建長は卽ち然らず、㋝一莖草上に法王刹を現じ、一微塵裏に大法輪を轉じ、一切處に建立し、一切處に成就し、頭々轍に合し、處處原に逢ふ。正恁麼の時、且く道へ、誰か恩力を承くる。」拄杖を卓して云く、「皇天親み無く、惟れ德是れ輔く。」

擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」門云く、「東山水上行。」是なることは卽ち是なり、山僧は然らず、梵刹已に立ち、今日開堂。」

㋛師初め正觀寺に寓す、佛成道の日、太守請じて府裏に就いて拈香せしむ。云く、「空劫以前、威音那畔、早く這箇あり、天に熏じ地を炙す。昔日釋迦老子、纔に些子の臭氣を得て、四十九年三百餘會、直說曲說說不盡、橫拈倒用用未已。今朝臘月八日、山僧が手裏に落在し、大檀主一覷に覷着す、直に得たり這の老子を供養することを。是れ恩を報じ幷に德を酬ゆるにあらず、只だ要す徧界香風の起ることを。」

建長寺語錄 終

㋝一莖草。此の昭堂を建てんが爲に、上の地ならしがいるなり、昭堂の事は、蒙器鑾に釋しあり、「僧堂のうしろに一室あり、立僧首座の住持に代つて入室を聞き普說をなす處、故に其の堂内にも法座を設く、元來其の屋僧堂に連りて、光線暗ければ、特に其の屋を高うし、敞明をとる、故に照堂と名く」と、本錄には照を昭に作る、是れは日本の禪林にては火を忌む、故に連火を去つて昭に作りしなり、他にも例あり、照牌の如きも昭牌と書す。

㋛德治二年丁未。國師北條貞時の聘に應じて京都より鎌倉に下る、時に年七十三、此の臘八上堂あり、越えて廿九日建長に入寺せられしなり。

法語

三條二品資緒卿に示す

頂門の一着、古今辨明を爲し難し、見成の公案、㋑當頭如何が領畧せん。直饒ひ未だ言はざるに先づ領ずるも、猶ほ是れ鈍漢、未だ擧せざるに先づ知るも、是れ俊流にあらず。所以に道ふ、向上の一路、千聖不傳と。

㋺學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如し。這裏に到つて、如何が湊泊し、如何が踐履せん。想ひ見るに、吾が二品尊閤、㋩別に見處あり、請ふ他の㋥一頭地を出して、高く眼を着けて覷よ。若し也た忽然として、一覷に覷得破せば、方に知る、㋭末後の一句、始めて牢關に到ると道ふことを。

㋬玄提禪人に示す

世尊拈花、迦葉微笑、㋮金金を博へず、水水を洗はず、此より遞代相尋いで、㋯虛を承け響を接し、一人は一人に傳與す。便ち見る、㋰東より

㋑當頭。出合がしらと云ふが如し、領畧は合點なり。

㋺學者云々。向ふに物があると思ふて、ひたすら取らう取らうとする、御苦勞千萬なり。

㋩別に見處あり。是れは資緒卿の現今力量底を指す。

㋥一頭地。百尺竿頭なり。

㋭末後の一句。いたちの最後屁と云ふこと、此の兩句は洛浦の元安禪師の上堂の語なり。（會元六）

㋬玄提禪人。日向の大慈寺の開山玉山玄提禪師なり、南禪寺の大明國師の法嗣、佛智大通禪師のこと。

㋮金々水水。世尊拈花は金なり、迦葉微笑も金なりなどと

西に過ぎ、西より東に過ぎ、禾山の打鼓、祕魔の擊叉、雪峰の輥毬、俱胝の堅指、麻三斤、柏樹子、自餘萬般の施設、百千の作用、㋓一摸に脫出し、一串に穿却す。若し是れ本分の衲僧ならば、誰か他家杓柄の長短を管せん。

㋔胡蘆を傾けずして酢は越よ酸し。只だ自家の見成によつて、自ら活計をなす。提上人、世尊未だ曾て花を拈せざる以前に向つて、急に眼を着けて看よ。看來り看去り、工夫純熟して一念相應せば、便ち本來の面目、本地の風光を見ん。那の時黃面老子、金色の頭陀、㋖下風に立在せん。所以に云ふ、㋗大丈夫天地に先ちて心祖となると。提上人、之を思へ之を思へ。

㋘元冲禪人に示す

從上の佛祖、世に出興するや、只だ本分の一着に據つて、眥目前の些子を露はす。便ち見る、㋙牀を敲き拂を竪て、地を打ち叉を擎げ、鼓を打ち球を輥じ、土を搬び石を拽く。千鈞の弩は、㋚鼷鼠の爲に機を發たず。然も是の如くなりと雖も、冲上人、江湖に徧歷し、久しく叢林に遊ぶ。這般の㋛陳年の曆日に管せず、只だ自家見成の活路によりて、東に行き西に行き、㋜天に冲するの鷂子の如く、眼を眨すれば便ち那邊に過ぐ。其れ如し未だ然らずんば、生佛未だ具らず、世界未だ分れざる以前に、直下に看取せよ。二六時中、行住坐臥、綿々密々、看來り看去つて、工夫純熟し、驀忽に一念相應し、生死の心破れば、便ち本來の面目、本地の風光を見ん。一々分明なること、恰も十日の並べ照すが如くに相似たり。這の田地に到つて、㋝更に須らく子細にすべし。何が故ぞ、末後の一句、始めて牢關に到る。冲上人、相聚ること一夏、㋞忽ち他山の興を起す。行に臨み語を求む、筆に信せて之を書し、以て其の請を塞ぐ。

空證禪人に示す

佛祖の一大事因緣、日用應緣の中を離れず、㋟此土他方の間を隔てず、古に亘り今に亘り、天に輝き地を鑑む。所以に道ふ、塵劫來の事、只だ而今にあり、只だ貴ぶらくは、當人大丈夫の氣槩を具し、朕兆未分の時、文彩未だ彰れざる以前に向つて、猛く㋠精彩を着けよ。看來り看去り、工夫純熟し、一念相應し、生死の心破れ、忽然として本來の面目、本地の風光を明見して、一々分明ならば、則ち從上の佛祖と同見同聞、同知同用、方に出家行脚の本志に負かざることを得。空證禪人、之を勉めよ之を勉めよ。

云ふてはいかぬ。

㋓虛を承け云々。うそのつきあひ、山彥のかちあはせ。

㋔東より西に過ぎ。來々往々。

㋕一摸。摸は範なり、鑄形なり。

㋖胡蘆を傾けずして酢は越よ酸し。胡蘆はふくべなり、德利なり、德利を傾けずとも、酢は酸いぞ、一段酸いぞ餘り多く用ひて無いてふ語なり。

㋗下風。上風下風と云ふことあり、下風はかざしもなり。

㋘大丈夫云々。歸宗和尙の語。

㋙元冲禪人。秀山元冲禪師にして、佛燈國師の法嗣、寂室と兄弟なり、筑前聖福寺に住す。

㋚牀を敲。溈山、拂を竪つるは馬觀、地を打つは打地和尙、叉を擎ぐるは秘魔岩、鼓を打つは禾山、球を輥すは雪峯、土を搬ぶは青林、石を拽くは歸宗、打地和尙は會元の三に出づ。

㋛鼷鼠。はつかねずみ、左傳に鼷鼠郊牛の角をかみて祭を臺なしにせしことあり。

㋜陳年の曆日。陳は陳腐の陳で、古きことなり、をとしのこよみは役立たぬもの。

㋝天に冲する鷂子。そら飛ぶはやぶさ目にもとまらぬ。

㋞更に須らく子細にすべし。是れが聖胎長養の眼目なり。

㋟忽ち他山の興を起す。元冲和尙一夏を終へて游方の志を起されたのである。

㋠此土他方。こゝかしこ。

㋡精彩。骨折らぬ者は此の精彩が不充分なりと。

玄安浴主に示す

頂門の一着、末後の一機、纔かに尋思せんと擬せば、白雲萬里。直饒ひ刹竿を望んで便ち回り、招手を見て横に趨るも、猶ほ是れ半提、未だ全機の作畧と爲さず。安浴主、直に須らく自ら一條の活路子を行くべし。東州西州、脚頭脚底、直下に用ひ得去らば、方に知らん、頂門の一着、天に輝き地を鑑み、古に耀き今に騰り、諸方を遍參し、久しく叢林にあり、古人の途轍を守ることなく、直に須らく自ら一條の活路子を行くべし。東州西州、脚頭脚底、直下に用ひ得去らば、方に知らん、頂門の一着、天に輝き地を鑑み、古に耀き今に騰り、正に是れ自家安身立命の處なることを。崇福恁麼に道ふ、也た只だ是れ㋙水を借つて花を獻ず、曾て一點の外料を加へず。上人之を思へ之を思へ。

玄臺比丘尼に示す

京師の玄臺大姉、慕道の志親切にして、常に來つて此の段の大事因緣を請益す。予一日渠に示して云く、「百尺竿頭に歩を進めよ。」渠云く、「百尺竿頭歩を進むるところなし。」予云く、「歩を進むる處無きに向つて、更に千百歩を進めて、方に丹霄に獨歩し、徧界全身なることを得ん。」渠、唯々として微笑するのみ。未だ領略し去ることを得ずと雖も、尋常平地上に㋗蹉跎する底の漢に同じからず。今故都に歸らんと欲す、香を袖にし來つて一語を覓む。予曾て茶陵㋝郁山主の贊を做る。仍つて之を書して云く、「竿頭に歩を進むるは尋常の路、最も苦しきは溪邊喫瓢の時、大地山河載せ起さず、㋐虚空笑を含んで驢腮に滿つ」と。請ふ禪尼、時々提起して看よ、百尺竿頭如何が歩を進めん。驀忽に時節到來して、這の一歩子を進め得ば、虚空笑を含むこと定れり矣。記取せよ記取せよ。

玄傑禪人に示す

玄傑禪人、結夏以前に曾て來つて相見して道を問ふ。予云く、「我れ上座の爲に曾て覆藏せず。」傑無語、去つて後、夏了つて復た來つて、相見して云く、「和尚覆藏せざる處、學人會し了れり。」予云く、「如何なるか是れ我が覆藏せざるところ。」傑云く、「學人、和尚の爲に覆藏せず。」予云く、「今日非々想天、幾人かあつて退位す。」傑云く、「知らず。」予云く、「我が覆藏せざる處、上座未だ知らざることあり、更に問はん、麻三斤、柏樹子、一切の語言、予曾て覆藏せず、上座會すや否や。」云く、「不會。」予故に云く、「我が覆藏せざる處、上座未だ會せざることあり、豈に道ふことを見ずや、世尊密語あり、迦葉覆藏せず、上座若し、迦葉覆藏せざる處を知らば、便ち世尊の密語を知らん。其れ如し未だ然らずんば、船舷未だ跨がざる以前に、高く眼を着けて看よ。兩岸の蘆花、一葉の扁舟、上座の爲に覆藏するや、覆藏せざるや。咄。」傑禪人今故都に歸る、若し玄珍法兄に相見せば、只だ恁麼に擧似して看よ。行に臨み紙を袖にして語を求む。予一點の外料を加へず、筆に信せて之を書し、以て其の請を塞ぐのみ。

㋙水を借つて花を獻ず。水に用事はなけれども花を獻ずる爲に用ふる、外料は外のまぐさ。

㋗蹉跎。尻のすわるを桑根と云ふ。

㋝郁山主。山主、僧法燈に問ふ、「百尺竿頭如何が歩を進めん、」燈云く、「嘘」と云ふ公案を拈提すること三年、一日驢に乘つて溪橋を渡る、橋板を蹈み外づして墜ち、忽然として大悟す。喫瓢はとんぼがへり。

㋐虚空笑を含む云々。虚空がにつと笑ふと、驢馬のあぎとに、えくぼが出來た。

曇翁居士に示す

從上の佛祖、世に出興する、只だ本分の一着による、事已むことを獲ずして、畧目前の些子を露す。擊石火、閃電光の如くに相似たり。眼を眨得し來れば、三千里外、若し是れ宿根靈利の漢ならば、宗師未だ口を開かざる以前に、早く來由を知る、方に共に語るに堪へたり。其れ如し未だ然らずんば、一念未だ起らず、文彩未だ彰れざるの時、直下に看取せよ。一切時、一切處、日用應緣の處、綿綿密々に、看來り看去り、工夫純熟して、驀忽に時節到來し、一念相應せば、生死の心破れ、本來の面目、本地の風光を明見せん。恁麼の田地に到り、聞見覺知、明暗色空、一々自家本來の消息、更に一點の外物なし。旃を勉めよ旃を勉めよ。豐州の曇翁居士、慕道の念深切にして、遠く崇福に來つて、日用工夫、用心の處を問ふ、予免れず、筆に信せて之を書し、以て其の請を塞ぐのみ。

㋐鏡圓上人に示す

後に萬壽に住す

臨濟當年、黃檗を辭す、檗云く、「甚の處にか去る。」濟云く、「是れ河南にあらずんば、便ち是れ河北。」檗便ち打つ、濟、棒を扭住して、遂に一掌を與ふ。檗、呵々大笑して、侍者を喚んで云く、「百丈先師の禪板拂子を將ち來れ。」濟、侍者を召して云く、「火を將ち來れ」と、好兒、終に爺錢を使はず。檗云く、「汝但だ持ち去れ、已後、天下の人の舌頭を坐却することあらん。」這の老漢、兒を憐んで羞を覺えず。圓上人、㋑岳峰に相聚ること四載、辨道の志念堅確に、日用亂に走作せず。忽ち他山の興を起し、來つて崇福を辭す。上人㋒火を索むるの機ありと雖も、崇福分付すべきの禪板拂子なし。且く道へ、古人と是れ同か是れ別か。若し三家村裡十字路頭に到つて人に逢はゞ、錯つて舉することを得ざれ。

㋐鏡圓。南禪の通翁和尚、大光國師元亨宗論の主宰。

宗玄禪人に示す

宗玄禪人、嶽峯に相從ふこと一夏、辨道の念群ならず、常に來つて、大事因緣を請益す、予本分の事を以て之に示す。夏末紙を袖にし來つて一語を求む、若し是れ大事因緣ならば、㋓斷々として言語の上にあらず。三世の諸佛、橫說竪說するも、終に是れ說不到、歷代の祖師、全提半提するも、何ぞ曾て提げ得起さん。崇福更に是れ口を開くの分なし、禪人若し是れ文彩未だ彰れざる以前に會得せば、當人の頂門上、杲日空に當り、脚跟底淸風匝地。崇福恁麼に道ふ、也た是れ水を借つて花を獻ずと。禪人之を思へ之を思へ。

源朝道人に示す

佛祖の大事因緣は、日用應緣の中を離れず、此土他方の間を隔てず。所以に道ふ、大唐國裡未だ鼓を打たざるに、日本國中に曾て上堂、南山雲を起し、北山雨を下す。若し是れ宿根靈利底の漢ならば、

㋑岳峰。橫岳山崇福寺、鏡圓上人奈須の雲岩に參ずること十七度、橫岳に上ること十七度、終に大應に嗣法す。
㋒火を索むる。臨濟の機。
㋓斷々。決してと云ふが如し。

未だ擧せざるに早く知り、未だ言はざるに先づ領じ、歩を動せずして大宋に歴徧し、口を開かずして言天下に滿つ。句々朝宗、法々是れ令、頭々轍に合し、處々源に逢ふ。源朝道人、其れ如し未だ然らずんば、一念未だ興らず、文彩未だ彰れざる以前に、直下に看取せよ。二六時中、行住坐臥、綿々密々、看來り看去り、履踐純熟し、工夫眞實にして、驀然として時節到來、一念相應せば、方に知る、當人頂門上、脚跟底、壁立萬仞、大寶光を輝すことを。正恁麼の時、從上の佛祖も下風に立在せん、大事因緣甚の破草鞋にか當らん。然も是の如くなりと雖も、更に須らく旗を勉め旗を勉むべし。何が故ぞ、㋐禹力到らざる處、河聲流れて西に向ふ。源朝道人、宋に渡りて歸來、帋を携へ來つて一語を求む、崇福免れず、筆に信せて之を書す。

玄興禪人に示す

玄興上人、久しく叢林にあり、江湖を歴盡し、崇山に來遊し、相聚ること三載、他を看るに、正に是れ本色の道流、尋常亂走の輩に同じからず。初秋夏末、他山の興動き、紙を携へ來つて一語を求む。㋑崇福未だ口を開かずして言天下に滿つ、何ぞ特地に語を求むることを須ひん。然も是の如くなりと雖も、若し喚んで語ありと作さば、畢竟箇の什麼をか道ふ。上人今故都に歸る、前路人に逢はゞ、錯つて擧することを得ざれ。

㋐禹力不到。夏の禹王は日本の角會了以の様な土木の名人であつたが、其れでも黄河は云ふことを聞かなかつた、東へ落す河が逆に西にそれた、こんなところがあるかいな。

㋑この一句、如何に國師の面目の躍動するかを見るべし。

眞證禪人に示す

眞證禪人、道聚すること久し、今故都に歸る、行に臨み、香を懷にし來つて一語を求む。吾が宗に語句なく、一法の人に與ふる無し、須らく知るべし、當人分上、壁立萬仞、大寶光を輝すことを。所以に從上の佛祖、世に出興し、只だ諸人の爲に此の事を證明し、一點の外料を加へず。崇福更に是れ口を開くの分なし、只だ貴ぶらくは、天然の氣槩を具し、壁立萬仞の處に向つて、直下に全機受用して、更に第二人無きことを。然も是の如くなりと雖も、行いて㋒葦屋渡頭に到つて、忽然として古帆未だ掛けざる一句子に撞著せば、切に忌む、錯つて名言を下すことを。眞證禪人、記取せよ記取せよ。

㋒葦屋渡頭。筑後の葦屋の渡し場で、浮かとふりむくな。

法語終

佛祖贊

觀音　六首

㋑圓通の境處々に明かなり、瓶水活して柳眼青し、更に寒巖翠竹のあるあり、時人何事ぞ ㋺太忙生。

㋩巖峋々たり水粼々たり、圓通の境觸處に新なり、覿面相逢ふて人識らず、衆生何の日か迷津を脱せん。

蓮華常に手に携へ、獨り自ら立つて巍々、童子來つて相訪ふ、無言眼眉に似たり、須らく知るべし合掌低頭の外、箇の事如何が伊に説向せん。

瀑泉聲冷淡、山嶽色幽奇、刹々圓通の境、善財㋥那ぞ知ることを得ん。

幽巖勢嶮巇、懸水清機を發す、刹々圓通の境、當頭入るもの稀なり。

雲淡々水漫々、普門現じて相謾せず、童子に咨詢すれば未だ有ることを知らず、空しく走る ㋭百城煙浪の寒きに。

文殊

㋑圓通の境。圓通大師はどこにもかしこにも滿ちて居る、即ち下句の如し。

㋺太忙生。外に有相の佛を求めば、汝と相似すなり。

㋩峋々は山の嶮危なり、粼々は水の激する貌。

㋥那ぞ知ることを得ん。合點はならぬ。

㋭百城烟浪。四國西國京江戸と尋ねまはる。

㋬文殊。是れは雜兒の文殊の像、露刃劍を提つて獅子王に跨るはいかめしい。

㋮七佛以前底。七佛の師なる文殊は一寸ちがふ。

㋯風波。不識とか無功德とか波浪沸騰す。

師子騎り來つて伎倆を呈す、端なく現出す小孩童、爭か如かん ㋰七佛以前底、明月清風類して同じからず。

達磨　五首

梁王殿上人の識るなく、揚子江頭葦を折つて航す、限りなきの ㋱風波後に隨つて起り、今に至るまで東土沸くこと湯の如し。

萬里西來、九年面壁、雪冷じく氷寒く、山青く水碧なり、少林の消息尚ほ ㋲依然、今古知らず誰か的を辨せん。

西來の消息、會するもの大難、蘆葉風冷かに、江波月寒し。

㋳鳳凰臺上月魂沈み、少室峰前四隣を絶す、雪冷じく氷寒く風颯々、知音は是れ ㋴立庭の人にあらず。

西天大いに六宗の異を破り、東土却り來つて一心を示す、蘆葉 ㋵棲々として江水冷かなり、今に至るまで千古知音少なり。

西山亮座主

分明に指示する處、覿面相謾せず、雨西山を過ぎて後、嵐光眼を潑して寒し。

㋲依然。昔の儘なり。

㋳鳳凰臺は江南にあり、少室峰は河南にあり。

㋴立庭。二祖の慧可大師をいふ。

㋵棲々は悽々と同意ならん。

㋶西山亮。亮首座、西山に隱れて火種刀耕、終る處を知らず、大慧武庫に「宋の政和の間、能秀才なるものあり、西山に遊んで偶々一僧を見る、貌古神清、麗眉雪頂なり、葉を綴んで衣となし、盤石に坐す、熊自ら思へらく、今時斯くの如きの僧なし、嘗て聞く、唐の亮首座、此の山に隱ると、疑らくは是れ其の人かと、興を出でて鞠躬として問うて曰く、是れ亮座主なるとなきや、僧手を以て東に向つて指す、熊乃ち方に手に隨つて見る、回顧すれば僧の所在を失す、時に小雨初めて歇

㋕李源、圓澤を訪ふ

相別れて又相見る、情懷自ら惘然たり、風高うして月色冷かに、舊因緣を寫し難し。

㋖水上快和尚

一點の靈光、天に輝き地を鑑み、左之右之、是と不是となし。黑漆の竹篦劈面に揮へば、凜々たる清風徧界に起る。

與聖の㋗月谷長老

頭髮㋙鬖鬆として雙眼青し、全提の一句人の憎を得たり、龜毛の拂子未だ曾て動せざるに、凜々たる清風匝地に生ず。

む、無自ら石に登つて觀れば、坐する處猶ほ乾く云々」此の故事を知れば、頌意自ら分明ならん。

㋕李源圓澤。李源は居士、圓澤は和尚、圓澤死して牧童に生れかはる、李源之に逢ふて知らす。

㋖水上。肥前水上山萬壽寺ならん。

㋗月谷。諱は宗忠、關山慧玄大師の嫡者、大應國師の法嗣。

㋙鬖鬆。此の和尚有髮で居られしと見え、あたまの毛がもじやもじやなり。

眞贊

遠州の太守の頂相

本光靈徹、凡聖同歸、不生不滅、絕離㋑絕微、袈裟の形相些々あり、恰も㋺丹霞選佛の機に似たり。

修理亮殿の形質。

浮生二十八年の事、夢は破る南柯㋩一夜の秋、雲淨く月明かにして風露冷かなり、人をして特地に恨休むことなからしむ。

尼妙雲の頂相

靈源不昧、觸處全眞、男にあらず女にあらず、類を絕し倫を離る、一段の光明畫けども就らず、從敎あれ喚んで㋥末山人と作すことを。

㋑離微。言語道斷の處を言ふ。

㋺丹霞選佛。俗かと見れば袈裟を掛けて居る、僧かと見れば俗人なり、丸で俄か坊主の丹霞そつくり。

㋩一夜の秋。此の人秋に死す、故に斯く押めるならん。

㋥末山。末山の了然禪師は高安大愚の法嗣にして恐ろしき尼なり、灌溪の閑和尚も遣り込められて、三年も圓頭となつた程である。

自贊

觀空禪人の請

㋑百無能人の憎を得たり、描すれども就らず畫けども成らず、知らず這般の面目、當頭誰か敢て辨明せん。咄。

㋺空證禪人の請

口佛祖を呑み、眼乾坤を蓋ふ、水月比することなく、㋩松柏論じ難し。咦、一段の光明畫けども就らず、㋥寥々たる千古鎮長に存す。

玄與禪人の請

龜毛の拂子、㋭觀面全提、㋬々たる神威、佛眼も窺ひがたし。世間限りなき丹青の手、五彩如何が伊を畫き得ん。

鏡圓上人の請

㋮此の用に卽するか此の用を離するか、馬祖一喝百丈耳聾、老僧拂を取つて口を開かず、公案圓成徧界通ず。

㋑百無能。何をさしても鈍突くなり、此の無調法者をどう描くか。
㋺空證。此の自贊は現今紫野大德寺に藏す「終に空證禪人予が賢質を繪いて贊を請ふ、時に正應改元戊子解夏の後三日、住勅賜萬年崇福禪寺南浦紹明」とあり。
㋩松柏。論語に「歲寒うして松柏の後凋を知る」と。あり。
㋥寥々千古。さてもさみしや千年萬年。
㋭觀面。まつかうと云ふが如し。
㋮此の用云々。百丈再參の因緣。
㋬宗意。柏庵宗意禪師、誠宗興の師なり。

㋬宗意禪人の請

明歷々露堂々、沒巴鼻來由あり、乾坤收不得、突出す㋣一毫頭。

㋣一毫頭。一本の毛先から出現した。

佛祖贊 終

小佛事

己上座の起龕

㋑己靈を重せず、內に於て無心、千聖を求めず、外に於て何ぞ尋ねん。生死に遊戯し、可不可なく、高く象外に超え、迥に古今を絕す。然も是の如くなりと雖も、未だ親切となさず、更に須らく轉身の時節あるを知るべし。一番雨過ぎて一番涼し、八月秋光何の處か㋺熱す。

㋩觀上座の起龕

正見あるを正となす、觀を觀じて無觀に至る。我が全身あるに非ずんば、生死の關を跳出す。且く道へ、跳出して後如何、手を撒して那邊にか去る、寥々として天地寬し。

光書記の鎖龕

㋥光境俱に忘じ、聖凡路絕す。照と照者と、同時に寂滅、便ち恁麼に去るも、只だ一槪と得たり。更に須らく上頭の關あることを知るべし、把定放行汝が爲に決す。光書記、還つて知るや、門背に㋭鎖を着け、鎖子に鐵を添ふ。

㋑己靈千聖。石頭と南嶽との問答なり、己上座の己の字を拈じてあり。
㋺茶毘の起龕故に熱を用ふ。
㋩觀上座。蓋し正觀と云ふ人ならん。
㋥光、境。自心を光と云ひ、萬物を境と云ふ。
㋭鎖、鎖子。此の鎖や鎖子は鎖龕の佛事に切なり。

元上座の起龕

「混元未だ辨ぜざる時、生も無く亦死も無し。直下に便ち歸を知らば、迥然として依倚を絕す。然も是の如くなりと雖も、切に忌む、這裡に坐在することを。」彈指一聲して云く、「元上座、彈指の聲を聞いて㋩三昧より起つ。」

尊監寺の秉火

佛の尊ぶべきなく、道の學すべきなし。鹽味は本鹹く、薑性は元辣し。這裡に會し去らば、死中に活と得ん。且く道へ、活と得るの後作麼生。倒に㋪楊岐三脚の驢に跨つて、烈焰堆中蹄を弄して行く。

太宰府の都督少卿禪門の秉火

火把を竪起して云く、「只だ這箇變易なし、古に亘り今に亘り、天に輝き地を鑑む。所以に太宰少卿禪門、國家に柱石として、常に關東を佐くるは、全く這箇の恩力に憑る。名九州に播き、德四海に傳ふるは、全く這箇の恩力に憑る。萬民を撫育し、子孫を覆蔭するは、全く這箇の恩力に憑る。時節到來し、生を出でて死に入るは、全く這箇の恩力に憑る。且く道へ、這箇は是れ什麼ぞ、山僧今日分明に說破せん。」火把を擲下して云く、「會すや、大地炎々たり一團の火。」

㋩三昧より起つ。それ動き出した、國師の佛事の語は目の付け處尋常と別調、是れ國師の家風なり。
㋪楊岐三脚の驢。會元の十九に、僧問ふ、「如何なるか是れ佛、」岐曰く、「三脚の驢子蹄を弄して往く。」三脚の驢馬は進むには前の一本が邪魔になる、退くには後の二本が邪魔になる。

妙慧禪尼の下火

「眞如の慧光、徧界圓明、本來の面目、觸處現成、松風颯々たり、磵水冷々たり。非男非女、非心非佛、若し這裡に向つて會し去らば、生死の苦源を拔出し、涅槃の樂果を證得せん。且く道へ、何を以てか驗となす。」火把を擲下して云く、「㋐丙丁童子來求火。」

左金吾禪門法心の秉火

「春山點埃を絕し、春水虛碧を漾はす。左金吾禪門法心、若し這裡に向つて領畧し得去らば、去來㋑象を以てせず、動靜心を以てせず。心を以てせざれば、則ち昔日の生や未だ曾て生せず、象を以てせざれば、卽ち今時の死や未だ嘗て死せず。驀忽に象心兩忘し、瞥爾として死生共に泯せば、直に得たり、鬱々たる青松、本有の光輝を發し、森々たる翠竹、自受用の三昧を顯す。步々是れ道場、處々皆淨邦、縱橫妙を得、卷舒自由、便ち恁麼に去るとき如何。」火把を擲下して云く、「㋒嗅烟蓬焞の中、優曇香馥郁たり。」

明靜大師の下火

㋐丙丁童子來求火。會元十に報恩院の玄則禪師、靑峰に問ふ、「如何なるか是れ學人の自己」、峰云く、「丙丁童子來求火」、玄則後に法眼に參ず、法眼云く、「靑峰に何の言句かある」、則、前話を擧す、法眼云く、「上座作麼生か會す」、則曰く、「丙丁は火なり、更に火を求む、是れ自己を以て自己を求むるが如し」、法眼云く、「恁麼に會せば爭か得たりとせんや」、則曰く、「某は只だ與麼、いぶかし和尙は如何」、法眼云く、「爾問へ、」則問ふ、「如何なるか是れ學人の自己」、眼云く、「丙丁童子來求火」、玄則言下に大悟す。

㋑象は形像、心は一心。

「明中に暗あり、暗中に明あり、明暗兩忘し、動靜俱に泯し、生死夢破れ、凡聖路絕し、男女の相にあらず、㋺尼總持に越ゆ。便ち恁麼に去らば、一點の靈光、天に輝き地を鑑む。然も是の如くなりと雖も、末後の一句重ねて提撥せん。」火把を擲下して云く、「火裡の紅蓮香拂々。」

欽上座の下火

「諸方の善知識を欽敬し、多年茫々として外に向つて走る。頭を回して踏着す鄉關の路、平生の㋻偸心を死却し去る。然も是の如くなりと雖も、死中に活と得るとき如何。」火把を擲下して云く、「大地炎炎として火發す、須彌も也た須らく粉碎すべし。」

㋒蓬焞。濃々として烟をあぐる形、娑婆世界は是れ寂光淨土。

㋺尼總持。達摩に嗣法の尼の名。

㋻偸心。取らう取らうとする盜人根性。

小佛事 終

偈頌

泥塑の達磨

身々一片㋑墻壁の如く、假を弄して分明に却つて眞に像たり。更に問ふ西來底事にか緣る、㋺普通年遠幾たびか春を經。

月巖

㋩靈山の指出曹溪の話、只麽に傳へ來つて知んぬ幾年ぞ、今日頭を天外に回して看れば、清光冷かに照す斷崖の前。

空首座の柑子を送るに謝す

東福に住する㋥藏山和尙なり、書中に洞庭の柑と云ふ

㋭酸者は酸に甘者は甘、未だ嘗て口を下さゞるに齒先づ寒し、舌頭若し具眼のものにあらずんば、只だ㋬洞庭一樣の看を作さん。

靜齊　二首

㋻肯諾俱に忘じて津を問ふことを罷む、寥々として四顧知音少なり、無言にして獨坐す蘿窓の下、却つて維摩一室の深きに勝れり。

㋑墻壁。逢壁、二觀に示して曰く、「外諸緣をやめ、內心喘ぐなく、心墻壁の如くにして以て道に入るべし」、又或居士は「學道は須らく是れこの饑渴なるべし」とも云へり。

㋺普通年遠。梁の年號、普通から今迄何回春を經過した。

㋩靈山の指出云々。靈山の拈花は月を指すが如く、曹溪の端的は月を話するが如し、古人の語を以て月巖の月を拈す、號頌なり。

㋥藏山順空の傳は延寶傳燈に詳なり。

㋭同じく物を詠ずるにしても、宗師家の眼のつけ樣は別なものなり。

終日蕭然として人到らず、苔は古砌を封じて草離々たり、這般冷淡の閑門戶、千聖如何が眼を着けて窺はん。

宏峰

巍々獨立して更に㋬齊しきなし、㋮雨洗ひ風磨して勢嶮巇、若し天外に出頭して看るにあらずんば、㋯玄微鳥道誰か知ることを許さん。

竹亭　蘭溪和尙の韻に和す

高節虛心㋱萬方を壓す、清風戛玉滿軒涼し、香嚴昔日㋲有ることを知らず、擊着端なく㋳錯一場。

鷹碧池

㋴一片虛凝徹底清し、冷かに山影を涵して寒青を鬪はしむ、當頭此の深々の意を領せば、萬頃の滄波㋷眼を濺して明かなり。

晏如

宇宙空じ來つて一物なし、安然として獨坐眼眉の如し、茫々たる塵世誰か我れを辨せん、㋸冷淡の生涯只だ自知す。

濟翁

㋬洞庭一樣の看。「波陵一望洞庭の秋」の句あり。

㋻肯諾。能所と云ふが如し、會元の十三に、疎山曰く、「肯は他の千聖を肯ひ、諾は即ち己靈を諾す」と云ふ。

㋬齊しきなし。肩を並ぶるものなきなり。

㋮雨洗風磨。骨折つて身を碁石にすりみがく。

㋯玄微鳥道。洞門に鳥道玄路あり、千岩萬岳の奥、只だ一條の鳥道あるのみ、玄微は幽玄微妙なり。

㋱萬方を壓す。獨立挺々のところ。

㋲有ること。言句の墻界。

㋳錯一場。しまつた。

㋴碧池。建長寺の佛殿の前にあり。

㋷眼を濺。塵まみれの目玉も一拭で明瞭々。

㋸冷淡の生涯。一簞の食一瓢の

㋛苦海中流人を度せんと要す、海の深きは何ぞ此の心の深きに似かん、年々老大休歇なし、棹を鼓して高歌自ら賞音す。

鐵關病中の韻に和す

衆生の㋜毛病幾多般ぞ、是れ鐵關常に不安なるによる、㋝縱ひ文殊來つて相訪ふことあるも、容易に心肝を露はさしむること莫れ。

㋞上元後の雪　二首、蘭溪和尚の韻に和す

三夜の明燈佛庭を照す、天龍瑞を呈して卒に停ることなし。鹽花地に滿つ千重の玉、銀屑空に飄る萬點の星、皓色人に逼つて眼を着けがたく、寒聲粟を起して聽くに堪へず。須らく知るべし此は是れ豐年の事、定めて寰中分外に寧かるべし。

萬點の金燈殿庭を照す、晨に臨む瑞應曾て停らず。㋟飄零玉碎冷かに月を修し、暗に㋠氷花を剪つて飛んで星に似たり。少室の家風今尚ほ在り、鷲山の公案又重ねて聽く。老師の高德感是の如し、天下の蒼生太寧を賀す。

巨源　二首

滔々たる㋡萬派天下に遍し、流遠うして方に知る濶うして又深きことを、容易に窮めがたし㋢雲の起る處、㋣桃花浪は湧く武陵の春。

天に連り地に遍く濶うして窮りなし、正に是れ曹溪一脈通ず、流遠うして方に知る深うして底沒きことを、千波萬浪盡く朝宗す。

山上に亭あり　韻に次す

路は遠る幽巖の腹、雲は飛ぶ四面の山。時に丘壑の味を增し、迥に世塵の艱を洗ふ。白鳥花を啣んで去り、遊人徑を尋ねて還る。誰か知る絕頂を披いて、更に㋤上頭の關あることを。

竹林鐵關庵

㋥斜曲分明に人に指示す、也た知る多福の老婆心、若し還つて牢關を把定し去らば、百鳥花を啣むも尋ぬるに處なし。

了如居士、僧と做る　次韻三首

㋦心空及第するも機猶ほ鈍、碓觜花を生ずるも未だ作家ならず、爭か似かん如翁今剃髮して、僧と同じく一甌の茶を喫するに。

此の回裏ます㋧龐公の帽、肩に伽梨を擔つて我が家を共にす、直饒ひ頂門に活眼を開くも、更に趙州の茶を喫するを要須す。

飲、回や其の樂を改めず、晏如の處。

㋛苦海中流。六道輪廻、四苦八界、三毒の酒に醉ふ。

㋜毛病。「けじらみ」の轉なり、「むしや〳〵」と多き罪業を云ふ、毛病の二字巧なり。

㋝縱ひ文殊云々二句。此の道理あの道理と、智見解會の鬨擊に遇ふも、うかと載せられて、鐵の關門を開くなと。

㋞正月十五日上元の燈を燃す。此の獻燈がすむ頃から、雪霰として降りしなり。

㋟飄零玉碎云々。此の首中解しがたき句なり、是れは珠玉のくづがばらり〳〵と落ちて來るのは、月の修繕のかんな屑ならんと云ふ意。西陽雜俎に、「月は七寶より成る、問める處に八萬三千戸あり、一人あり、其の數を修す」と。

㋠氷花。雪のことなり、少室は慧可、達磨に參じて雪中に立つ。鷲山は靈峰、鷲山の雪中に見性す。老師は廬溪を指す、太寧は太平安寧なり。

㋡萬派天下に遍し。あちの水もこちの水も四方八方から一道に歸し、故に派脈天下に遍しと云ふ。

㋢雲の起る處。雲の起るあたりは流の根源。

㋣桃花浪は湧く武陵の春。三級浪高きの激流は、武陵桃源の春を流し來る。

㋤上頭の關。是れ則ち山上の亭。

㋥斜曲分明に人に指示す。會元四に多福和尚、因に僧問ふ、「如何なるか是れ多福一叢の竹、」福曰く、「一壑兩壑は斜なり、」僧云く、「學人不會、」福曰く、「三壑四壑は曲れり。」

㋦心空及第。龐居士の偈に、「十方同聚會、箇々學無爲、此は

㋓殿前の草を刻却してより、一段の風流作家に屬す、人衲衣底下の事を問はゞ、當機只だ一杯の茶を點ぜよ。

斷雲

卷き去り舒べ來つて片々奇なり、起は何の處よりし滅は何にか歸す、看よ他の兩段元無間、只だ太清一點の時にあり。

看山軒

獨り危欄に倚つて夕陰に到る、千峯具に一微塵にあり、煙迷霧鎖濛朧の處、㋖見得て分明なるは幾人かある。

㋐寂庵藏主を賀す

瞿曇四十九年の說、㋺以字非なり八不成、今日寂庵㋻重ねて點出す、百千の妙義一時に明かなり。

蒙古國の信使㋼趙宣撫が韻に和す　東林遠の語あり　二首

遠公㋽虎溪を出でざるの意、是れ淵明にあらずんば誰か賞音せん、箇の中の消息子を話せんと欲す、蒲輪何の日か雲林に到らん。

外國の高人日本に來る、相逢ふて談笑眞機を露す、殊方異域差路なく、

是れ選佛場、心空及第して歸る。」心空を得ば頭に毛があつても、學校卒業なりと云ふも、鈍つくよ、六龍の磨うすに花が咲いても、矢張り俗漢なり。

㋷龐公帽。虛堂和尙に「山僧要まず龐公帽」の句あり。

㋖殿前の草を刻却。出家得度と同じ、會元五に、石頭一日衆に告げて曰く、「來日佛殿前の草を剃れ」と、來日に到つて大衆諸童行各〻鍬鑊を採つて草を剃る、獨り丹霞盆に水を盛り、頭を沐して石頭和尙の前に前んで胡跪す、頭見て之を笑ふ、便ち爲に剃髮す、又爲に說戒すれば、丹霞耳を掩ふて出づ、此の故事を用ふるなり。

㋖見得て分明。くもり切つた處で、山を見るでなければ、ほんものでない。

㋗目擊道存す更に誰かある。

宗簡侍者の遊方を送る

三呼三應㋘險關の外、向上須らく知るべし活機あることを、若し諸方に到つて參得徹せば、歸來急々に巖扉を扣け。

心侍者が豐州に之くを送る

老來頻に三喚するに力なし、㋙秋風の助けて機を發するに一任す、此去つて豐城溪畔に看よ、空に蘸る黃葉誰が爲にか飛ぶ。

㋚悟藏主が韻に和す　國覺に住する桃溪和尙なり

道伴に相逢ふて肩を交へて過ぐ、山は自ら青く水は自ら淸し、後夜人の此の意を知るなし、屋頭唯だ聽く野猿の驚くを。

義侍者を送る

國師三喚すれば便ち三應す、已に墮す拈花微笑の機、口未だ開かざる時先づ薦得せば、家鄕は元洛陽の西にあり。

㋛資緒卿の韻に次す

常に思ふ詩人錦繡の腸、氣は虹色の朝陽に映ずるが如し、㋜此の文未だ

㋐寂庵が藏主職になつた賀頌なり。

㋺以字非なり八不成。五千四十八卷、四十九年の說はひきからげて以字でもなく、八の字迄ゆかぬ、是れは經卷の上に〆の梵字あり、以字でも無く八字でもなし、只だ此の一字に歸すと。

㋻重ねて點出。この處を明らめた。

㋼趙宣武。文永八年十月、蒙古の牒使趙良弼、書狀官張鐸等、高麗の廉允紹を先導として筑前今津に至り、直に京師に入りて國書を奉らんとす、太宰府之を許さず、問難すること數日、良弼竟に副本を遺め、十一月を期して答書せんことを乞ふ、太宰府之を鎌倉に呈す、幕府之を朝廷に獻ず、廷議之に答へんとす、幕府抑へて報ぜず　終に良弼等

喪せず今猶ほ在り、目擊道存して意自ら長ず。

竺翁

西天此土風光別なり、箇の事如何が人に說向せん、口未だ開かざるとき鬢已に雪、拈花の消息幾か春を經。

石牛

頭尾全く彰る空劫の前、群隊に隨つて自ら安眠せず、古今徧界藏しがたき處、兩角崢嶸鼻遼天。

隱溪

世上人の來つて我れを問ふなし、山深うして唯だ聽く磵泉の聲、一たび這裡より挨得入して、獨り自ら流に枕んで月明を看る。

空庵　二首

四面寥々として一物なし、纔かに毫髮を存すれば路通じがたし、鳥啼き花笑ふ樹梢の外、只だ見る三更月窓に到ることを。

威音那畔家風別なり、門庭を立せず誰か敢て通せん、百鳥花を啣んで覓むる處なし、月明只だ在り綠蘿の中。

を放逐す、翌々十年六月蒙古再び其弼を日本に使す、蒙府又之を卻く、蓋し良弼兩度の使節中、國師との應酬は蒙福住持中の事ならん、然らば第二次使節の時なり。

❼ 廬山の遠法師、陶淵明を送つて覺えず虎溪を過ぐ。

❽ 目擊道存。ちらりと眼光相對すれば既に足れりの意、莊子田子方篇に出づ。

❾ 險關。三呼三應は險關なり。

❿ 秋風云々。吾れは年寄つて高聲に三喚するに力なし、秋風の次行脚の機を發轉するに一任すと。

⓫ 悟道主。延傳十六に出づ、蘭溪の法嗣、入宋して頑極に育王に參ず、筑州の聖福寺にも住す。

⓬ 三條資諸鄉、系圖に見えず。

⓭ 未喪ぜず。論語に出づ。

⓮ 此の首、大意は此處の門庭を商量して、充分肝膽を傾けざるに、烏藤を擔つて、又他方の知音を訪問す、雲衲の世渡りは、先づ斯うしたものである、さて〳〵萬里の天外に誰人と山雲海月を話するかと。

⓯ 叢林凋落の時桂衆扶起す。

⓰ 蓋し婦人の號。

古山

魏々峭峻頂を窮めがたし、雨洗ひ風磨して年を記せず、謂ふなかれ空劫消息斷ゆと、春來れば花鳥尙ほ依然。

玄悟禪人を送る

⓱ 門庭を敲磕して言未だ盡きず、烏藤拈却して春風を問ふ、衲僧の活計又是の如し、天外知らず誰と與にか同じき。

桂堂

秋來群木蕭索を添ふ、⓲ 獨り丹根の花正に開くことあり、限りなき淸香收不得、夜深けて月に和して空堦に滿つ。

⓳ 花翁

曾て桃源に在つて上色に誇る、風光漏泄して人間に到る、老來改めず紅粉の面、誰か識らん心肝鐵山の如きことを。

敬叟

叉手低頭賓主分る、從來非禮未だ曾て聞かず、而今老大猶ほ是の如し、限りなきの幽懷誰と與にか論せん。

小池に題す

礀泉湛々として色藍の如し。山影水光眼を潑して寒し、此に到つて若し能く底を親見せば、風なきに颯々として波瀾を起さん。

化浴　四首

木杓を拈じ來つて驀頭に澆ぐ、體をも洗はず塵をも洗はず、只だ要す ㊃惺々歷々にし去らんことを、諸方自ら賞音の人あり。

一滴性空の清淨水、宣明妙觸十成の身、而今猶ほ要す從頭に洗つて、本地の風光轉た新を見ることを。

本來眞の面目を見んと要せば、大家力を着けて洗ひ將ち來れ、諸方自ら知音のある在り、聽き得ば一時に笑眼開かん。

無位の眞人汗雨に似たり、好し涓滴を將つて一時に澆ぐに、敎他あれ歷々惺々にし去れ、聽き得て知音笑つて點頭。

柏樹下の雪達磨

通身一片銀山に似たり、風彩人に逼つて毛骨寒し、西來端的の意を問はんと欲すれば、庭前の柏樹心肝を露す。

㊃惺々歷々。光風霽月常惺々、川河大地明歷々。

㊁引清軒

三更月は照す幽窓の外、松竹青々として碧流れんと欲す、因つて思ふ祖翁敗闕の處、今に至るまで千古卒に收めがたし。

牛溪

昔時㋑巢父流に臨む處、草は自ら青く水は自ら清し、㋺劈箭機前の一句子、今に至るまで千古轉た分明。

雪師子

㋩百億毛頭同一色、毛前毛後白漫々、當陽に突出して辨じがたき處、凜凜たる威風匝地に寒し。

諸庵

一たび㋥肯心を辨じてより後、諸方を驗盡して眼底空ず、雲は蘿窓を鎖して過客少に、幾回か獨り喚ぶ主人公。

泥牛

頭角崢嶸鼻遼天、春風影裡自ら安眠、直饒ひ㋭潙老牧しがたき處も、㋬鬪つて入る海門明月の前。

㋁引清。五祖演の頌に本く、頌に曰く、「山前一片の閑田地、又手叮嚀に祖翁に問ふ、幾度か賣り來つて還た自ら買ふ、爲に儔む松竹清風を引く。」

㋑巢父。許由耳を洗ふ處、巢父牛を引き去る。

㋺劈箭。飛び出す箭、潙溪の閑禪師、僧問ふ、「久しく潙溪と響く、到來すれば只だ瀉麻池を見る。」溪云く、「汝只だ瀉麻池を見て、要且つ未だ潙溪を見ず。」僧云く、「如何なるか是れ潙溪。」溪曰く、「劈箭急。」牛溪の頌、故に此の意を襲用す。

㋩百億毛頭。仰山の故事を用ふ、會元の九に、仰山、潙山に在つて牛を牧ふ、時に泰上座問うて云く、「一毛頭上に獅子現ずることは即ち問はず、百億毛頭に百億の獅子現ずる

㋚西嶠

㋛初祖當年曾て踏着す、分明に脚下草離々たり、憐むべし只だ這の片田地、萬古千秋耕す者稀なり。

雪

看よ看よ變じて銀世界と成ることを、㋜文殊の蹤跡卒に尋ねがたし、趙州在らず明白裡に、誰か解せん此の時一片の心。

泉石の韻に和す

水は㋝雲根に漱いで來處異なり、分明に源脈蓬壺より出づ。磷々たる岸石台嶺を壓し、湛々たる金池太湖に勝れり。松竹影斜にして碧玉を浸し、瀑泉聲碎けて眞珠を散す。遊人此に到つて歸路を忘す、覺えず頭を擧ぐれば日晡ならんと欲す。

流泉岸に瀉いで聲歇むことなし、一滴の曹源知んぬ幾か深き、㋞波浪如し相似たりと言ふことなかれ、當頭に鷹取すれば月光沈む。

偈頌終

こと作麼生、」山云く、「正當現ずる時、毛前に現ずるか毛後に現ずるか。」

㋙肯心。肯諾の心なり、瑞岩日に主人公と呼び、又自ら應諾す。

㋚潙老。此の泥牛は潙山も牧し得まい。

㋛闘つて云々。古句に、「兩個の泥牛闘つて海に入り、直に今に到るまで跡を見ず。」

㋜西嶠。歸去來辭に、「農人來つ告ぐ、春の將に至るを以てす、將に西嶠に事あらんとす」と、文字是れより來る。

㋝初祖云々。門來の端的は達磨にして正に識る。

㋞文殊蹤跡。是れは將賢と用ふべき處、文殊は黄金世界、普賢は白銀世界なり。

㋟雲根は石の異名、蓬壺は仙山の名。

㋠波濤云々。古句に「曹溪の波濤若し相似ば、限りなき平人も熊沈ざられん」と、此處似るの似ぬのと、枝葉を追ふな、眞向に鷹得すれば黑漫々なりと。

圓通大應國師塔銘

杭州路中天竺天曆萬壽永祚禪寺住持㋑延俊撰す

圓悟の道、支れて二となる、一は㋺大慧の杲となり、一は虎丘の隆となる。隆三傳して松源の岳となる、岳一傳して運庵の巖となり、再傳して㋩虛堂の愚となる。虛堂の傳を得て日東に在る者は、建長禪寺圓通大應國師なり。國師諱は紹明、字は南浦、駿州安部縣の人、藤氏に出づ。幼にして本州建穗寺の淨辯師に事へて、出世の法を學ぶ。年十五、髮を薙り具戒を受く。往いて建長の蘭溪隆公に依る。㋥正元の間、海に航して宋に至り、徧く知識に參ず。虛堂の愚公、淨慈に主たり、門庭高峻にして、學者㋭崖を望んで却く、師往いて禮謁す。堂曰く、「古帆未だ掛けざる時如何。」師云く、「㋬蟾螺眼裡の五須彌。」堂云く、「掛けて後如何。」師云く、「黄河北に向つて流る。」堂云く、「㋮未在、更に道へ。」師云く、「某甲は恁麼、和尚又作麼生。」堂云く、「黄河北に向つて流る。」師云く、「和尚人を謾ずることなくんば好す。

㋑延俊。增集續傳燈第五に傳あり、笑隱訢の法嗣、明の洪武元年に寂す。

㋺大慧は杲罵天、虎丘は睡虎、松源は瞎翁。

㋩虛堂。白隱和尚云く、「虛堂は大唐の中興じや、歴代の中にも、水晶の珠數の如くでない、優劣がある、唯だ大菩薩のみ此の義を解すと云ふ、祖祖相傳底の大事じや」と。

㋥正元。大應國師二十五歲の時なり。

㋭崖を望んで却く。險しき巖崖を望んで逡巡退却するなり。

㋬蟾螺。かまきりむし、ばつ

し。」堂云く、「參堂し去れ。」久しうして賓客を典らしむ、日夕咨扣す。一日美く畫く者をして堂の壽像を寫さしめて贊を請ふ、堂、筆を掇つて書して曰く、「㋟紹既に明白、語宗を失はず、手頭簸弄す、金圈栗蓬。」大唐國裡、人の會するなし、又却つて流に乘じて海東に過ぐ、時に㋠咸淳改元の夏六月なり。是の年秋八月、堂詔を奉じて徑山に遷る、師をして與に俱にせしむ、師益策勵す。一夕靜定中に於て起つて大悟す、偈を呈して曰く、「忽然として心境俱に忘ずる時、大地山河機を㋡透脫す、法王の法身全體現ず、時人相對して相知らず。」堂、巡寮して衆に報じて曰く、「這の漢、參禪大徹せり」と、是れより一衆觀を改む。㋢咸淳三年の秋、師辭して日本に歸る、堂、贈るに偈を以てして曰く、「㋣門庭を敲磕して㋥細かに揣摩す、㋦路頭盡くるところ再び經過す、明々に說與す虛堂叟、㋧東海の兒孫日に轉た多し」と。復た其の後に書して曰く、「明知客、發明してより後、告げて日本に歸らんと欲す、尋いで㋨照知客・通首座・源長老、頭を聚めて龍峯會裡の家私を語る。紙を袖にして法語を求む、老僧今年八十三、思索するに力なし、一偈、行に贐す。萬里の水程、㋩道を以て珍衞せよ」と。既に歸る、

㋞未在。屆かぬ。

㋟紹既明白云々。古人印證の語、往々に其の名を頌す、此處紹明の二字なり、語宗を失はずとは一句語を吐き、一寐語をなすも、宗旨を失はず、簸弄はもてあそぶとなり、金圈は鐵の牢屋、栗蓬は栗のいが、手にも齒にも合はないものを、自由自在にとりまはすこと。

㋠咸淳改元は日本の文永二年にて、國師三十一歲の時なり、入宋の七年目。

㋡透脫。桶の底のぬける樣なり、一機の足もとを蹈みはづすなり。

㋢咸淳三年。師三十三歲、入宋の九年目なり。

㋣門庭云々。大宋諸方師家の門庭を參じまはるなり、敲はたたく、磕は石の相擊つ聲。

本國の文永四年に當れり。建長の蘭溪、卽ち命じて藏敎を典らしむ。乘拂の提唱に、「十載中華に歷徧して歸る、未だ佛法を將つて唇皮に掛けず、端なく今夜始めて口を開く、㋤鐵樹花を生ず正に是の時」の語あり。㋥文永七年の秋、西都に徙り、筑州の興德禪寺に出世す。遂に嗣法の書幷に入院の語を以て、㋦曇侍者に因つて徑山に呈す。堂之を得て大いに喜び、衆に謂つて曰く、「吾が道東せり矣」と。其の堂の爲に器重せらるゝこと此の如し。又明年太宰府の崇福に㋧移る、居ること三十三年、參徒日に㋨盛なり。㋩嘉元甲辰、詔を奉じて京師に入る、太上皇、宮掖に召對す、問答旨に稱ふ。特に差して輦下の㋪萬壽禪寺に住持せしむ。貴遊道を問ふもの、車馬日に駢集す。又東山の故址を以て㋫嘉元禪

㋥細かに揣摩。宗旨の微細を究むるなり、揣摩は史記蘇秦傳に出づ、揣は「はかる」なり、摩は撫摩なり、人の情をはかり、摩でゝ之に近づくとあり、此處は吟味すと云ふが如し。

㋦路頭盡くる云々。極め極めて、窮極に至るなり、再び經過すは、又凡夫地へ立ち歸つて、足を蹈み出すなり、此處十萬の波濤を越えて宋に入り、往き行きて路窮まり、再び十萬の波濤を經過して日本に歸ると。

㋧東海の兒孫。大應下の兒孫を東海日多の孫と云ふは、之れに基づく。

㋨照知客、通首座、源長老。三師の傳未詳、或曰く、通は大川の法嗣、饑壁通禪師、源は虛堂下寶藥の道源禪師なり」と、蓋し三師大應國師を送別せしなり。

㋩道を以て珍衞。這の大道の爲に其の身を珍重護衞せよとの意。

㋤鐵樹花を生ず。すりこぎに樹の花が咲いた。

㋥文永七年。建長にあること足掛け四年、此の時分蒙古との國際關係を生じ、頻々使節の往來あり、師を西筑に住持せしめしは、一種の使命ありしならん、冬十月廿八日興德に入寺す。

㋦曇侍者。按ずるに、曇は古來西澗の子曇となす。子曇は國師より少きこと十四歲、當時本國にあり、故に曇なして嗣書を呈せしめしなり、而して曇は翌八年に趙良弼と日本に來れり。

㋧國師の興德住持は壹年と二ケ月なり。

㋨晩年には每夏八十餘員の雲衲あり。

剎を興造し、師を延いて第一祖となす。㋑德治丁未、旨を奉じて關東に赴き、㋺正觀寺に留まる。而して相州の太守平㋩崇演、師を請じて署所に卽いて法を演ぜしめ、復た敷奏して、請じて巨福山建長興國禪寺を主らしむ。明年の春、太上皇、手詔を降して存問す、恩禮優至なり。入寺の夕に當つて、小參に曰へることあり、「今年臘月二十九日、來に所來なく、明年臘月二十九日、去に所去なし」と、衆驚訝して其の意を諭るなし。明年延慶戊申臘月二十九日に當つて、㋻忽ち微疾を示す、二鼓に至つて、手づから偈を書して曰く、「風を訶し雨を罵る、㋼佛祖知らず、一機瞥轉して、閃電猶ほ遲し」と、書し畢つて跏趺して逝く。世壽七十有四、坐六十夏、度する處の弟子㋽宗雲・宗意等千有餘人、

㋴嘉元甲辰。甲辰は二年なり、國師年七十歲、早熟英邁の歸朝者も時に遭はずして西埵に沈埋すること三十五年、瑾瑜發光、隱々として花洛を動かし、茲に後宇多院の請招を見るに至れり、然れども國師の道の盛大流行は、此の三十五年の沈埋より十八哲七十二員を敲出せるにあり。

㋾萬壽禪寺に住持。是れは嘉元三年の七月廿日なり、翌年の二月迄は萬壽に住持せられしなり。

㋿嘉元禪剎。是れは天台宗の强訴により、中途に廢す、此の間に龜山院大祥忌の陞座あり。

㋀德治丁未。國師入京の四年目、蓋し國師の鎌倉に赴かれしは、京都には台徒の紛爭を生じ、鎌倉には圓覺住持西澗の命、且夕に迫りしより、此の擧を生ぜしならん。

㋺正觀寺。是れは國師の親友なる西澗子曇の住せし寺なり、子曇はその前年の十月に寂せり。

㋩崇演。最勝寺殿北條貞時なり、鶴八の上堂あり。

㋻忽ち微疾。月の初めの鶴八上堂も、其の後の位牌堂新築の陞座も、健在で勸められしなり。

㋼佛祖知らず。佛祖もあなのぞき出來ぬ。

㋽宗雲、宗意。宗雲は未だ詳かにせず、宗意は鎌倉天源の開基、柏庵宗意禪師なり。

㋾興聖の忠。日谷宗忠、妙心の關山國師の緣者にして、關山國師を率ゐて、大應國師に相見せしことあり、弟子に滅宗を出す。

㋿崇福の運。卽山と號す、嘉曆二年正月寂す。

其の法を嗣いで列剎に分居するもの、㋷興聖の忠、㋸崇福の運、㋹南禪の卓、㋺南禪の圓、㋻萬壽の禪、㋼建仁の然、㋽崇福の一、萬壽の心、㋾大德の超、㋿崇福の津、㌀聖福の胤、㌁建長の什、㌂崇福の龍、㌃龍翔の友等若干人、龕を奉じて闍維す、設利を獲ること無算なり。事聞す、皇上哀慕して已まず、勅して圓通大應國師と諡し、仍つて勅して寺を西京に建て、額を龍翔と曰ひ、骨石舍利を寺の後山に塔す。塔を普光と云ひ、庵を祥雲と云ふ。弟子建長に在るもの、舍利を奉じて之を瘞む、塔を㌄天源と云ふ。弟子崇福に在るもの、舍利を奉じて塔を建つ、庵を瑞雲と曰ふ。他日瑞雲火あり、半天に及んで忽ち雪を雨らし、火遂に滅す、藏する所の舍利塔を求むるに所在を失す、門人方に

㋷南禪の卓。絕崖と號す、建武元年六月寂し、龍翔を建つ。

㋹南禪の圓。通翁と號す、元亨宗論の主將。

㋻萬壽の禪。雪庭と號す、貞和三年四月寂す。

㋼建仁の然。可翁と號す、書を能くす、貞和元年四月寂す。

㋽崇福の一。峰翁と號す、延文二年三月寂す。

㋾大德の超。是れは大德寺開山なり。

㋿崇福の津。濟川と號す、貞治六年五月寂す。

㌀聖福の胤。秀崖と號す、貞治五年八月寂す。

㌁建長の什。物外と號す、淫年不詳、竺仙と甚だ親し。

㌂崇福の龍。雲川と號す、文和四年二月寂す。

㌃龍翔の友。松岳と號す。

㌄天源。竺仙梵仙の集に、天源庵の記あり、創立の由緒、舊寺の位置を詳記せり、柏庵宗意の獨力經營に成る、今大德寺に存する運庵廬堂大應三祖自贊の畫像は、天正年中、天源より大德寺に移れるものなり。

㌅至正二十五年。南朝の正平二十年、北朝の貞治四年、無我再度の入元は貞治二年なり。

㌆省吾。無我と號す、日本永德元年二月支那の牛頭に寂す。

㌇宗規。月堂と號す、康安元年九月寂す、月堂錄あり。

㌈海の內外。支那日本の隔てなし。

㌉大荒。山海經に出づ、世界と云ふが如し。

㌊鯨濤云々。支那より日本を見れば、鯨波は天の川に引續いて居る。

㌋渾蒙は淮南子に出づ。東方日の出づる地とあり、又元氣なりと注す、一箇の別天地あり

憂駭す。夜半に至つて、巖阿に光を發す、之を迹ねて焉を得たり、遠近尤も之を異とす。㊐至正二十五年の夏四月、比丘㊑省吾、其の師筑州安國山聖福禪寺に住する國師の門人㋔宗規の撰する所の行狀を持し來つて、言を徵し、師の塔に銘せしむ。惟みるに、法道の天下にあること、㋕海の內外を間つることなきなり、日東の諸國、佛僧尤も蕃盛たり。圓通大應國師の名、海國に震ひ、道は主上に契ひ、衆の歸を致すこと、水の壑に赴くが如し。既に寂して、尤も靈異を著すが若きは、殆んど古佛の願轂を馳せて、來つて其の化を昭かにするものなり。是れ宜しく銘すべし。銘に曰く、

㋑大荒の內東海の東、
㋺鯨濤の上銀漢と通ず。
別に天地あつて㋻鴻蒙を開く、
君臣の禮樂諸夏に同じ。
㋽世代綿歷として終窮なく、
故宋の㋾太宗淳風を歆む。
尤も能く誠を傾けて覺雄に事へ、

て、一大元氣を豁開す、豐蓁原の瑞穗の國是なり。
㋽世代綿歷。萬世一系の天皇を戴く。
㋾太宗淳風を歆む。齋然和尙の入宋したとき、日本の國體を聽いて、王姓緒を繼ぎ、臣下官を世にするは古の道なりと榮歎せられた。
㋿金銀高く張る。金銀を惜まず、堂塔伽藍を張大にする。
㋀宜なり爾く云々。さて〳〵此の樣にとつかけ、ひきかけ、豪傑の士を支那へ差向けるも尤もじや、韻字の都合にて龍象を倒用す。
㋁宗工。佛法の棟梁。
㋂吡盧の印。吡盧遮那王の印綬なり、白隱和尙は隻手の聲なりと解せり。
㋃卓行懿德云々。論語に「簡ぶ帝心にあり」と出づ、大應國師の卓行美德は九重に達して

㋄金銀高く張る釋梵宮。
㋅抑耆頑あつて其の中に居る、
㋆宜なり爾く雜遝象龍を來すこと。
圓通大應は國の㋇宗工、
㋈吡盧の印を佩びて盲聾を開く。
㋉卓行懿德淵叟に簡ぶ、
㋊寵錫異數禮益隆なり。
至る處に皷を擊ち橫に鐘を撞く、
天人圍繞して華雨濛たり、
㋌龍伯蟲蠹して蛟鼉充つ。
茫蠢を啓覺して㋍凡庸を超え、
㋎造化を尅期して有終を示す。
㋏獸鬼鄙蹋して滯無從、
火餘の設利は光●曈々たり。
●海天不夜長虹を貫き、

後宇多院の簡拔に逢へりと、淵叟は深きみこゝろと云ふが如し。
㋊寵錫異數。錫は賜なり、異數は異常と同じ。
㋌龍伯蟲蠹。龍伯蛟鼉は皆叢林の守護神、蟲蠹は作力の貌とありて、今の蠢力と同じ、文選西都の賦に出づ、今は依怙、ひいきと用ふ、稍轉ず。
㋍凡庸を超え。凡庸の境を超絕す。
㋎造化。造は忽なり、鹿月二十九日の死を前年に知る。
㋏獸蹋。跡ずさりすることなれど、茲は辭鄙の意に用ふ、群生の佛涅槃に遭へるが如し、
海無從は淚縱橫の意か。
●曈々。朝日の出づる時の盛なるかゞやきを云ふ、舍利の光は旭日の如し。
●海天不夜長虹を貫く。蒼桐の殺氣は白虹を貫くとあり、今此の舍利不夜城を現じて、光り長虹を貫くと。
㋇寧塔鼎峙。三處に塔を建つるを云ふ、支那人が想像すると斯の樣の語が出る。
㋈堂封。大に保護するの意ならん。
㋉寶に惟れ國師厥の躬を勦めしむ。西埜三十五年の橫說竪說は、父や母や、我を生んで勦勞するなりと、兒孫は是れを忘れては不幸よ。
㋌南山巍々。此の句は上に附くれば巍々たる南山もすりつぶすと、勞苦に觀す、下に附くれば、峨々たる南山惟れ石巖巖たり、取つて以て銘を刻すべしとなる、然れども上に附けて見るべし。
㋍勒。刻なり、主功は大功なり、蓋恭は翩然恭敬なり。